
言葉（仮）

アヒル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

言葉（仮）

【Nコード】

N69440

【作者名】

アヒル

【あらすじ】

母の死により心に深い傷を負ってしまう美月^{みつき}。

一人になった美月は祖父母に引き取られ、穏やかな長野の山奥で療養にあたることに。一緒に暮らすことになったいとこの深紅^{みく}の温かい心に触れ、いつしか美月の傷は徐々に癒えていった。

だが、逆に深紅は身体的な病気に蝕まれ心を閉ざしていつてしまふ。

美月は自分を救ってくれた深紅に元気になって欲しくて、必死に元

気付けようとするが、なかなかうまくいかない……。

徐々に心が離れてい深紅。それでも美月の深紅を思う気持ちは強くなるばかり。深紅の笑顔を取り戻すため、美月はある決心を胸に重い扉をノックする。

愛によって傷が生まれ、傷は愛によって癒えていく……。

愛と傷の相互関係を描いた純粋で切ないラブストーリー！。

序章 【鈴虫】

声には不思議なちからがある
文字にはない、特別なちから
世界にひとつしかないあなたの音で
あなたの言葉を話してみよう
受け取った相手は必ず感じる
あなたの不思議なちからを

ベッドに腰掛けている彼女から差し伸ばされた細い腕を、ただ僕は見つめている。彼女の背後には大きな窓があり、白いレースのカーテンが掛けられていた。そこから射し込む月の光を受けて、この暗く、殺風景な部屋は、ぼんやりと青白く映し出されていた。

妖しげに光る彼女の腕は、とても物悲しく見えた。

秋の涼しくてさわやかな夜風に吹かれ、遠くで木の葉がざわついている。その音に混じって聞こえてくる鈴虫たちの交響曲。今の僕には迷子の子供が早く母親に見つけてもらいたくて泣き叫ぶ悲痛な声。そんなふうに聞こえていた。

嫌な音だ……。

そう頭に浮かぶと、足先から這い上がるように震えが湧き上がるのを感じた。何がそうさせるのか、僕は思い出さなくてはいけなかった。思い出そうとすればするほど身体が拒否をする。心臓が、頭が、目が、耳が、全てが痛くなる。

どれくらい経った頃だろう。ふと、慈愛にあふれた、細く、やさしい声で僕の名前を呼んだのが聞こえ、一瞬、鼻の奥がツンとしたのを感じた。

ゆっくり進んで彼女の傍まで行くと、もう僕は立っていられなかった。彼女の前に跪いた形になると、彼女はそっと、そのか弱い手

で、僕の頭をやさしく撫でてくれた。

たぶん、僕はひどい顔だったと思う。胸の奥から込み上げてくる感情を、必死に塞き止めていたからだ。

「我慢……、しなくていいんだよ……？」

（っ！）

「おいで……」

（……。）

もう、抵抗は無駄だった。

途端に目の奥が熱くなり、彼女の姿が水の世界に覆われてしまった。

ひとつ……、ふたつ……。

みつ、よつ、いつ。

「……う……う……う……う……」

喉から勝手に漏れてくる音に、悔しくなつて、彼女に聴かれたくなくて、らくだ色の下地に茶色い格子模様の入ったひざかけをのせた彼女の膝に、顔を埋めて嗚咽した。彼女のひざかけが生温い僕の泪を吸い込んで、すぐに冷たくなっていくのを感じて、僕は少し申し訳ない気持ちになっていた。

そんなこと、気にもしていないだろう彼女の手が、相変わらずゆったりとしたリズムで僕の頭をやさしく撫でてくれている。彼女は僕が泣き止むまで、いつもそうしてくれる。僕が泣いている理由も聞いてはこない。全て、分かっているから。

泣くのは嫌いだけど、彼女にそうしてもらっているときは、不思議な程心地よくて、彼女のとても良い匂いがして、このひとときがたまらなく好きだった。

「鈴虫つてね」

僕が落ち着いてきた頃、彼女は、子供を寝かし付ける母親のように、暖かい声で話し始めた。

「鳴いているのは全てオスなのよ。ほとんどの場合、メスを探すときに鳴くの。生まれてからすぐには鳴けなくて、何回も、何回も苦しい脱皮を繰り返して、やっと美しい音色で鳴けるようになるの。苦しみを乗り越えて手に入れた、その美しい鳴き声のおかげでメスと出会うことができるのよ。でもね、やっと見つけたメスと交尾をすると、オスは羽が壊れて、二度と鳴けなくなつて、やがては死んでしまうんですって……」

えっ、という顔をしている僕に、彼女はニコつと笑ってから続けた。

「私はこの話が好き」

カーテンが風を受けて揺らめき、合間からいつそう強く、月の灯りが部屋を照らした瞬間、『だって』と続けた彼女の視線が、恥らうように右下へ落ちるのが分かった。

「たくさんの鳴き声の中から、そのオスの鳴き声に惹かれるのは、たった一匹のメスだけなんですもの。お互いが出会うため、そして子供へと未来を繋げるため、たくさんの苦勞を重ねて生きてきた……。それって本当に素敵なことだと思うの……。それに、とっても綺麗……」

『聞こえるでしょ……』と言つて、彼女は意識を外へ向けるように、瞼を閉じた……。

思わず見とれてしまい、僕の喉から短い吐息が漏れた。さわやかな夜風に揺られて、片側の耳に掛けた髪の毛がほどけかける。それを彼女の指がそつと押さえる。そうした彼女の仕草は、とても美しかった。

彼女に習い、そつと耳を澄ました。この部屋を訪れたときよりも大きく不規則に木の葉が揺れていた。

『サァー…… スゥー……』

『……リン』

(あっ)

『……リリリリ……リリリリ……』

『リーン、リーン、リーン、リーン』

（本当だ……。綺麗な音。）

しばらくして、『落ち着いた？』『眠れる？』という質問に頷くと、僕は彼女の部屋を出て、隣にある自室へと戻り、再び横になった。

こうしてもらった後の夜は、眠るまで彼女のことを考えられる。彼女は真夜中だというのに、ノックをして入ってくる僕に向かって、嫌な顔ひとつ見せたことは無い。それどころか、決まってやさしい微笑みを向けてくれるのだ。

微かに残った彼女の匂いは、甘く切ない桜の匂いがした。その匂いをそっと抱きしめながら、僕は静かに目を閉じた。あんなに嫌な感じがした、鈴虫の泣き叫ぶ声は、いつしか淡い恋心を綴った美しいバラードに変わっていた。

一章 【いれもの】

「五時三十五分発ー、急行、西武新宿行きー、まもなく発車致します」

西武新宿線、所沢駅に、発車前のアナウンスが流れると、賑やかな音楽がこだまする。

僕は、ゆっくり電車の中へ乗り込むと、慌てることなく空いてる席に腰を下ろした。

電車のドアが閉まったところで、バッグから携帯ゲーム機を取り出して、イヤホンをセットした。

平成二十一年二月十一日、建国記念日。この年の東京は例年よりも暖かく、けども、小さくて細かな雪が何度も降った。

夜になると、騒がしいネオンが創り出す紫色の空から、ゆらゆらと細雪が舞い落ちる。朝になると、雪はほとんど失われており、ビルの合間の駐車場に止めてあった車の上にだけ、うっすらと、確かに存在していたことを主張していた。

そんなことが今月に入って五回もあり、そして昨日の夜がその五回目だった。僕はその夜のことを、深く後悔することになる。生きるのが辛くなる程に。

僕の名は瀬戸^{せとみづき}美月、女みたいな名前を恨めしく思ったこともあったが今は案外気に入ってる。歳は十四。特技は家事全般。A型ということもあって、料理には細かいこだわりがあるし、洗濯物を干すときなんかは、それぞれ、物に合った干し方をしないと気がすまない。掃除に至っては他人にさせたくない程だ。

性格は明朗活発でいて、大人顔負けの冷静さを持ち、リーダーシップのとれる人間だ。なんて自惚れ屋だと思いかもしれないが、小学生の頃から、教師同士話し合わせたかのように、通信簿の『ひと

こと欄』に度々そう書かれるのだ。

しかし、真実は少し違う。

実は、毎日のように、授業中に面白いことを言って皆を笑わせ、進行を妨げて先生を困らせたり、悪さをしては体育教師にゲンコツを食らったりしている、そんなお騒がせな悪ガキなのだ。

中学二年の終わりを迎えたところでの成績はギリギリ平均点。最近仲間との遊びが生活の中心にあるせいで、すいぶん下がってしまったが、昔はもっと頭が良かった気がする。が、気にはしていない。

遊び、というのは中一の頃に覚えた麻雀のことを指す。放課後に仲間と集まっては毎日のように賭けて遊んでいる。まあ、動くお金はせいぜい大きくて千か二千そこらだ。だからといって、腕前をなめてもらっては困る。さっき言った『仲間』の中には友達の家族も含まれており、しょっちゅう雀荘に通ってる兄や、大学時代にセミプロまでいったという父親とも勝負をし、今のところ総合成績で『黒』なのだ。

前に、勝ちが続いてそこそこの軍資金が貯まったので、大学生三人を相手に、彼らのルールとレートで勝負したことがあったが、結果は大勝で、『そこそこの軍資金』は、一夜で倍になってしまったのだ。そう言つと目を丸くするかもしれないが、近頃ではそんな中学生は珍しくない。

ところが、最近の中学生のくせして女の子と付き合った数はゼロ。毎年チヨコの数に母のを抜かして二、三個は獲得するところを見ても、全くモテないわけではないと思う。

なんというか、両思いと分かっていても、そこから先、何をどうしたらいいのか分からないし、今は仲間と遊んでいるのが楽しいので、そうなる前に、いつも時間だけが過ぎてしまう。

と、いった感じで、毎日そこそ楽しく過ごしているが、社会的な位置は『あまり恵まれない子』らしい。理由は簡単、僕は生まれたときから父親が居ない。付け加えると兄弟もいない。少なくとも、

僕が物心付いた頃からは、母はずっと水商売で生計を立てている。要するに典型的な母子家庭ってやつだ。

僕が赤ん坊の頃、長野にある母の田舎から、婆ちゃんが助けに来たり、逆に長野に預けられたりもしたらしいが、基本的には母ひとり、子ひとりで暮らしてきた。

毎日から保育園に預けられ、母が迎えに来るのは、大抵最後の一人になってからだった。小学校に上がっても状況は大して変わらず、学校から帰ってきてても母の姿は無く、代わりに、テーブルの上に五百円玉がぽつんと置いてあった。

ここ最近で一番の変化といえば、五百円玉が千円札に変わったことだけだった。

通信簿に良いことだけ書かれるのはそんな背景があるからだと思っている。担当の先生が家庭訪問に来て、現在の家庭状況を聞いていく、それは記録として学校に残される。その記録を次の担当教師が目を通し、再び家庭訪問。結果、皆思うわけだ、『可哀想な家族』と。そんな安っぽい同情から生まれたのが良いことしか書かれていない『ひとこと欄』に繋がるのだと、僕はそう考えてきた。

だからこそ、通信簿に『忘れ物が多い』とか『注意力散漫、先生の話は最後まで聞きましよう』というような、悪い面をきちんと書いてくれる先生がいると、とても嬉しくて、無理を言っただけに遊びに行ったり、悩み事をあれこれ相談したりと、とにかく自分から近付いていった。僕の大人を見る目、というのはそういうところで培われた。

大人と言えば父親の話。小さい頃は死んだと聞かされていたが、本当は僕が生まれる三ヶ月前に、母とお腹の中の僕を捨ててどこかへ逃げてしまったそうさ。そして僕が二歳になる頃、判の押された離婚届だけが送られてきたという。

中学の入学式の夜、久しぶりに母が腕によりをかけて作ってくれたご馳走を食べているときに教えてくれたのだ。写真も見せてもらった。嫁入り道具として婆ちゃんから譲り受けたという、貴重な黒

柿を使用した裁縫道具箱の一番下にそれはしまつてあつた。

渡されるときに「ろくでなしの顔はどんなかなー」と母に悪態をついたが、本当のところ、微妙な心境だったことを良く覚えている。右下にオレンジ色のデジタル数字で『94・8・16』と印字されたその写真は、少し色が抜けていたが、さほど、昔のもの、という印象は受けなかった。中央に若い男女が札幌の時計台を背に写っていたのだが、驚いたことに、最初に目を惹いたのは若々しい母の姿だった。

黒茶色に、くすんだ赤色の小さな薔薇が全面にプリントされ、胸の部分にギャザー加工が施されたワンピースを着て、黒いタイツに紫色のパンプスを履いていた。

なかなかやるじゃないか。素直にそう思った。当時二十歳だった母は今の若い子とさほど違いはなく、顔、服装、髪型、そのどれをとつても、そのまま出て来て十二分に通用すると思った。

……その隣。Ｔシャツを着て、ジーンズにブーツを履いた、無造作ヘアのさわやか風の男。なるほど、結構な伊達男だった。それだけ。後は特になんとも思わなかった。

母は、会いたいなら連絡先と住所を教えてあげると、手帳から小さく折られた一枚の紙を取り出したが、そんな気は更々起きなかった。そんなもの必要ないから捨ててしまえと言った。

そんなことより　と前置きをしてから、写真に写った母のセクスを褒めてやると、母はくすぐったそうに少しはにかんでから、「あたりまえよ、母さんモテモテだったんだからね」と言つて、腰に手を当て、えっへん、のポーズをした。

それから、若い頃の色々な思い出話や、失敗談を聞かせてくれた。一緒に笑ったりして、なかなか楽しい中学生初日だった。

ほつたらかされて育ってきたとはいえ、母はそんなに悪い人間じゃない。まともに休めるのは週一回のお店の定休日だけ、その日はよほど体調が悪い場合を除いて、必ず僕の希望を叶えてくれた。行きたい場所があれば連れて行ってくれるし、欲しいものがあれば一

緒に買いに行ってくれた。家でゆっくりしていたいと告げると、本当に一緒になつて一日中家でごろごろしていたこともあった。こう、改めて考えると、どちらかといえば僕は甘やかされて育てられた部類に入らると思う。

だから別に、子供時代の大半を一人にされたことなど恨んだりしてない。それどころか、きちんと愛情を注いでもらってきたことに感謝している。恥ずかしくてそんなこと絶対に言えないが。

そういえば『甘やかされて育てられた』で思い出したが、ひとつだけ、母は僕に間違つた育て方を実践していた時期がある。今はもちろん、なんとも思つちやいないが、当時の僕は、相当母を責めた記憶がある。

単純に言つと、『甘やかされて育てられた』ではなく、『可愛がられて育てられた』のだ。女の子のように。

なんだそんなことか、と思う人が大半だと思う。しかし、『そんなこと』でも度が過ぎると本人の人生を大きく左右してしまうことを僕は知っている。

名は体をあらわす。とはよく言つたもので、美月という名前が表す通り、僕は周りから見ても可愛かつたのだと思う。母以外の人と話すと、かなりの確率で「お嬢ちゃん、可愛いねえー、今いくつー？」と聞かれていたからだ。

その現象を、当然の如く母は面白がり、それから女の子の格好を度々させられるようになっていった。

男の子にこんな名前を付けるのだから、女の子が欲しかったに違いない、それは分かる。育児には、多少の遊び心も必要なのだとも思う。（ことにする。）

しかし、どんなものにも物事を定めるボーダーラインというものがあるのだ。それを超えたが最後。次には疑うことを止めてしまう。残念ながら、僕はそのラインを超えてしまった。人から『可愛い』と褒められることが、たまらなく嬉しく感じるようになってしまったのだ。

結局僕は、女の子として保育園に通っていた。母の話では、可愛いプリントシャツにオーバーオールを着て、長めの髪を後ろで二つに結わいてもらうのがその保育園では流行だったらしい。確かに同じような格好の女の子四人が写っている写真が保育園のアルバムにあった。……もちろん、その中の一人が僕だ。

そのまま行けば、女の子として赤いランドセルを背負わされていたかもしれない。そんな小学校入学前のお正月。待ちに待った変化が訪れた。

今は大抵友達と遊ぶのを優先するのではらく帰っていないが、昔は毎年正月になると田舎に帰って新年を祝うのが習慣だった。大人達の話がさっぱり面白くない僕は、決まって、三つ年上のいとこの女の子（親戚で歳の近い子は彼女しかいなかった）と、お人形遊びをして遊んでいた。絵本を読んでもらったりしていた。お年玉を貰ってまわる他は、それだけが僕の楽しみだった。

その日も同様に、いとこの子と髪型遊びをして遊んでいた。僕の髪をおでこの上でぴよこんと立つように結って、可愛いって言うてくれていた。

そんな折、爺ちゃんが酒焼けのした重たい声で、小ばかにする様に僕に言ったのだ。いや、僕だけじゃなく皆に言った。

「美月、女の子とばかり遊んでたらチンチン取れちゃうぞ？　まだ付いてんだろう？」

それを聞いた母の台詞。

「美月は女の子だから良いんです。チンチンなんて無くたって平気よ。ねえ美月」

そんな他愛も無い会話。僕は顔から炎が立ち昇るように真っ赤になった。爺ちゃんはそれを更に茶化すので、僕は、しまいには大泣きしてしまって、いとこのおばさんに終始くっついていて。それから女の子を別の生き物として意識するようになった。

かくして、男の子としての自我が確立した訳だけど、それとは引き換えに正月の楽しみがひとつ消え、更には気になる女の子の顔を

まともに見れなくなるという悪い習性が植えつけられてしまった。
好きな女の子の目を見て話すと、恥ずかしくて赤面してしまうのだ……。世間一般では笑い話のレベルかもしれないが、僕にとっては深刻な悩みのひとつでしかない。

そんな経緯があつて育つた僕は、残念ながら今でもおおよそ男らしくない一面が残っている。

ここぞというところでの僕は、優柔不断で、打たれ弱く、ネガティブ思考。おまけに甘いものと可愛いもの全般が大好きという始末。気持ち悪いと思うかもしれないが、最近までベッドの枕元には常にお気に入りのぬいぐるみが一体置かれていた。そうしないとうまく寝付けないからだ。もちろん、知っているのは母だけ、のはずだ。

電車の椅子から乗客がいつきに立ち上がる。

いつの間にか椅子はほとんど埋まっていたらしい。横目でその大半が降りていくのを見て、僕は携帯ゲーム機の電源を落とした。

ここは、終点ひとつ手前の高田馬場。いつも決まって、車内の八割から九割はここで降りていく。ここから先は歌舞伎町に用事がある人だけになるので、車内の雰囲気はガラッと変わる。

艶やかな長い足を組んで、ひっきりなしに携帯を操作している女。ド派手なスーツ姿の男。小脇にハンドバッグを抱え、夜だというのにサングラスをかけた強面のおじさん。悠々と電話で話をしている外国人。ハードゲイの格好をした男性。等等……。

安っぽい表現だが、嘘ではなく、これが新宿歌舞伎町なのだ。

西武線の終点である西武新宿駅を降りたとき、凍てつくほど冷えた空気を吸い込んで、少し咳をした。唯一さらけ出した顔や喉から急激に体温が奪われていく。

電車に乗ったときは降る気配すらなかったのに、新宿の地面は既に白くなり始めていた。まったく。これで今月六回目だ……。

僕はユニクロのトレーナーにリーバイスのジーンズ、靴はありふ

れた赤茶色のワークブーツという、いかにも中学生らしい格好の上に、ウエストベルトが付いた黒いポールスミスのトレンチを羽織っているおかげで、いくらか周りの目を気にしないで済む。

その服装を聞いて違和感を持つ人もいるだろう、僕だってそうだ。何故、そんな分不相応な物を羽織っているかと言うと、頼んでもいないのに母が、「良い物を知らない、良い男になれないから」といって、部分部分で高価なものを買い与えてくれるのだ。その中のひとつがこのトレンチというわけ。じゃあ子供の頃のあれは何だったのだと言いたくなるのだが、買ってもらった手前、にっこり微笑んでいる母を責められるわけがなかった。まったく極端な母親だ。

時計は夜の六時を過ぎたところだった。僕は駅沿いにひとつだけある信号を曲がり、あまり気の進まない街へと侵入していく。

母の話では東京都の持ち物だという、歌舞伎町におよそ似つかわしくない、高さ二十階程の小奇麗なビルを通過するあたりで、昨晚のことを思い出していた。

来たくも無い場所へ来る原因ともなった、昨晚の出来事。

僕と母は久しぶりに喧嘩をした。言い訳から言わせてもらうと、その日の僕は珍しくイライラしていた。麻雀でしこたま負け込んでしまい、一万はあった軍資金を全て失い、それどころかマイナス三千という借金まで背負ってしまったからだ。

というわけで、昨晚の喧嘩は僕が悪い……。

昨晚、次の日が休みということで家に着いたのは三時を過ぎてからだだった。次の日が休みだからといって普段はこんなに遅くなることはなかった。理由は前述した通り。負けを取り戻そうと、もう一回、もう一回と僕が懇願したからだだった。いつも勝ち続けている僕が珍しくへこんでいるのを見て、仲間も良い気分だったのだろう、快く引き受けてくれた。ああくそ、今思い出しても腹が立つ。

丁度降ってきた細かい雪が、僕には憎たらしくてしかたなかった。

既に母が帰ってきている時間なので、ドアの鍵をゆっくり開けて、真っ暗な廊下を進み、入ってすぐ左にある自室へと向かうときだった。

僕の部屋の前で、低くうずくまっている何かがモゾモゾ動いたのが分かった。もちろん正体は母だった。

「どおーこ、行つてたのよーこ」

僕の部屋のドアにもたれかかるようにしていた母は、上体を起こそうとしたが、手をついた先の、ワンピースの裾がすべったらしく、ストンと崩れ落ちては、頭をドアにぶつけて「あたっ」と言つてから低く唸り始めた。

「んだよもう、酒臭えなあ」

そう言つて僕があからさまに嫌な顔を見せると、
「なによー！ のんじゃ、いけないっていつの！」

と、間に唾を飲み込みながら怒鳴ってきた。詳細は覚えていないが、そこから母はつかえながらも、たくさんの小言を並べ立てた。最後の方はわんわん泣きながら喋るので、何を言っているのか本当に分からなかった。

僕はもう、どうでもいい気持ちになつてしまい。

「あー、もういいや、面倒臭え」

そう悪態をついてから、未だに起き上がれずにいる母の腕を引っ張つて「どけよ」と言つた。母は相変わらず泣きながら「やだー」と言つていたが、力任せに奥の居間へ連れて行き、踵を返すと自室へ逃げ込んだ。後ろで「待つて！」と聞こえたが、僕は気にしなかった。

逃げ込んだ後の僕は、寝巻きに着替えて暖房を全開にし、毛布に潜つてただ温まるのを待つていた。

三十分くらい経つてからだろうが、『コン……、コンコン……』と遠慮がちなノックが聞こえ、ドアの外から「ねえ……、美月？」と聞こえた。僕はしこたま大きな溜め息をついてから返事をした。そこからの会話は鮮明に覚えている……。

「入ってもいい？」

「入ってくんな」

「……」

他の家はどうか知らないが、うちの母は僕の嫌がることは無理にはしない。今までに数回だけあった喧嘩も、僕が部屋に逃げ込むと途端に収束するのだ。入ってくるな、と言えば入ってこないし、怒鳴るな、と言えば怒鳴らない。だから今回もそうなると思ってた。

ところがその日は違った。『ガチャ』という音がして、ドアの間から母の顔がひよこつと侵入してきたのだ。初めての出来事に戸惑い、とにかく激怒するしかなかった。

「はあ？ 何やってんの？ 入ってくんなよ！」

今度は僕が怒鳴っていた。ベッドから飛び出して近づくと。

「あのね、これ」

そう言つて差し出してきたのは、可愛いキャラクターの付いたキーホルダーだった。

「意味分かんねえ！ なんもんいるかよ！」

手を払いのけるとキーホルダーが床に落ち、『チリン』と鈴らしき音が鳴った。

「いいから出てけ」と言いながら母を押し戻して勢い良くドアを閉めたが、尚もドアを開けようとするので、力任せに押さえていると意味不明な懇願が聞こえた。

「お願いだから！ 聞いてよ！」

僕は、（なにがだよ！）（なんなんだよこれ！）と困惑していたふと、あちら側のノブに加わっていた力が消えたかと思うと。急に涙声に変わった母の声が聞こえた。

「お願いだからあ、お母さんを、一人にしないで、よお……」

「悪いけど、俺は一人になりたいの、頼むから大人しく寝てくれよ」
「……」

返事が返ってこないのを気まずく思つて、あろうことが、何かに弱っているのであらう母に向かって、僕はとどめを指した。

「どうでもいいけど、明日の飯代だけは置いてけよな」

そう母のことを切り捨てると、ベッドに戻り毛布に包まった。まだドアの向こう側で鼻をすする音が聞こえていたが、しばらくすると落ち着いて、戻ってくれたようだ。

そうして今日の昼頃、意識の向こう側で聞こえてきた、玄関の閉まる音、微かな鈴の音色、ヒールで階段を降りる音で目が覚めた。

寝た体勢のまま目だけゆっくり開いて、しばらくの間ぼーっとしてから、（ああ、そうだ……）と思って起き上がる。怒った母が飯代を置かないで行ってしまったのではないかと心配になったのだ。

さっそく、いつもお金が置いてあるリビングのテーブルを見に行くと、期待通りのものは無かった。いや、あったのだが……。母の財布ごと置いてあったのだ。

普段ならむき出しの千円札があればそれでいいのだ。中身を確認するとざっと見て五万は入っていた。（おいおい……）と思って、早速母の携帯に電話しようとしたが、昨日のことを思い出し、気まぐずになって携帯を折りたたんだ。

その後、適当にテレビを見てから風呂に入り、軽く着替えてすぐそのコンビニで弁当を買い、遅すぎる昼食を食べた。

五時を迎えたところで、やっぱり母に財布を届けて、昨日のことを謝ろうと思った。もう店が始まっている時間なので、電話をせず直接母が働いているスナックに行くことにした。

歌舞伎町を歩くとなると、ガキの格好だと目立つので、クローゼットの中に大事に掛けてあるトレンチを着込むことにした。

部屋を出るとき、『チリンチリン』と音が鳴った。音のしたほうを見ると、可愛い脱力した猫のキャラクターと目が合った。鈴付きの首輪を巻いた、いわゆる、ゆるキャラの猫が笑顔でじつと僕を見つめていた。

「分かったよ」

僕はそいつを拾い上げ、ポケットの中から鍵を取り出し、ぶら下げてやった。玄関のドアから出て鍵を閉めるとき、そいつは満足そ

うに音を鳴らして揺れていた。

駅から出て、二百メートル程歩いただろうか。辺りが歌舞伎町らしい顔を見せ始めた。この繁華街へはもう十回目くらいになる。そのすべては好んで来た訳じゃない。母に頼まれたからだ。

内容はというと、「昔の友達が来てるんだけど、卒業アルバムと一緒に見たくなっちゃってさあ。お願い！ 持ってきてえ」だった。り、「とっても良くしてくれるおじさんが美月のことを是非見たいって言うからさあ、一緒にご飯食べない？」など、多岐にわたる。

僕もただで動くほど良い子ちゃんじゃない。行けば必ずと言っていい程、飲んでいる客が小遣いをくれる。それもすごい人だと、お年玉の総額を超えるくらいの額をポンとくれる人もいるから、基本的に母の頼みは断つたりはしない。

しかし、いつ来てもここは騒がしい。大きく分けて三種類の人種が、それぞれ絶えず声を上げているからだ。

前に歌舞伎町の客引きに制限が加えられたとニュースで聞いたことがあったが、お構いなしのように見える。黒いスーツを着て耳にピンマイクを着けた彼らは、男の人になら誰にだって声を掛ける。

「オッパイありますよ？ 五千円でどうですか？」

「お兄さん、今日はキャバすか？ いい子いますよ！」

「寒いでしょ？ 暖かいですようちの女の子は！」

これが一つ目の人種。

男に声を掛けてこないのは派手なのスーツを着たホスト達だ。一人として同じスーツの人間はいない。昔はホスト同士の喧嘩が絶えなかったらしいが、最近は取り締まりが厳しくなったおかげで喧嘩などは滅多に起こらないらしい。

とはいえ、他のホストに勝つ為に少しでも自分を格好良く見せて、互いが牽制をし合っている。僕から見ると、皆笑顔で呼び込みをしているが、鮮やかな警戒色の皮を被った毒蛇みたいだ。今も通りす

がる獲物に向かってひっきりなしに声を掛けている。これが二つ目。最後は三つ目。これは騒がしくないのだが、やたらとしつこい。

直接客を取ろうと声を掛ける外国人の女性達だ。

「オニイサン、マツサージシテク？」

「オフロドオ？ イツショニハイラナイ？」

一度だけ「ごめんなさい、僕まだ子供なので」と断ったことがあるが。無論、聞く耳など持っていなかった。むしろ釣れたとも思ったのか、ずっと僕の後をついて来て、延々と「ダイジョウブ」「ヤスイカラ」と声を掛けられた。

そんな人たちが目的地に向かう間に何度も進行を妨げる。そうなれば誰だって同じ答えに辿り着く。どんなに話しかけられようが、誰にも耳を貸さず、誰にも目を合わせず、少し早歩きで突っ切るのが安全な歩き方だと。

今日もその教訓を実践してきたおかげで、ほとんど話しかけられることはなかった。多分、同年代の子達の中では一番うまくいんじゃないかな。『子供の歌舞伎町の歩き方講座』とか開けるかも。

今ではこの騒がしい客引きの声も、ひとつの音として捉えられるようになってきた程だ。

車の行き交う、新宿区役所通りに辿り着き進路を左にとる。ここを曲がれば母のスナックはもうすぐだ。昨日は喧嘩してしまっただけ、自分の財布を届けに来た僕の姿を見れば、いつかのように、くすぐったい感じのはにかんだ笑顔を見せてくれる筈だ。

そんなことを考えていたとき、新宿の音にも慣れてきたはずの僕の耳に、生涯忘れることの出来ないであろう、二つの音が背後から飛び込んできた。

最初は物音だった。

『パン！』

そして。

「……きゃああああああアアアアアア」
振り返る。

「えっ……？」

時間が止まったんだと思う。

その刹那、『どくん』と一回胸が鳴ったかと思うと、寒空の中だというのに、身体の中から急激に湧き上がる熱を感じた。喧騒の街から音が消し去られ、いつきに僕の身体は視覚だけになった……。僕は見たことの無い一枚の絵を目の前に突きつけられて、間違い探しのように観察をしたのだが、思考がうまく働かない。

（赤？ ……手？ ……赤 ……血？ ……？ 胴？ ……？ 無い………歯？）

（苦しい……。息……。しなくちゃ……）

どれくらいぶりに空気を吸い込んだのだろうか、一年？ 二年？ そんなふうと思うほど、うまく空気を吸い込むことができなかった。

『ハッ………ハッ………ハッ………ハッ………』

少しでも呼吸が出来るようになってくると、ようやく思考が動き出した。

目の前の光景は、ファミレスで誰かがジュースの入ったコップを床に落として割ってしまった、あれにとてもよく似ていた。

赤い液体がたらふく詰まった『いれもの』が、砕け散って役割を果たせなくなってしまった状態。

（これはなんだ？）

（何かの冗談か？）

（腕が無い。）

（女の服？）

（片方の足が無い。）

（顎から先の頭が無い。）

（キモチワルイ。）

（これは人間………なのか？）

破裂した人間のすぐ横に、酷く怯えている女性がいた。たぶん叫

んだのはこの人だろう。ぺたんと尻餅をついたと思えば、痙攣したように手足を震わせて必死にその物体から『ズズッ……ズズッ……』と、ゆっくり逃げていく。

そこで、彼女の真っ赤に染まった足先が、何かを蹴った。その瞬間、僕の耳に音が戻ってきた。

「チリン」

音の方を見る。目が合った。

また、時間が止まる。

二章 【再会】

あの日から、今日が何日目なのか分からない。いくつか場所を移動して。たくさんの人に話しかけられた。たぶん、ここは病院なのだろう。

毎日白衣を羽織った笑顔の男に顔を覗かれ、変な言葉で話しかけられる。この人が先生だということは理解できる。でも、何をそんな熱心に喋っているのかが分からない。

スプーンを操って、食事を僕の口に運んでいる人、この人も医者なのかな。笑っているが、やっぱり何を言っているのか分からない。夜が来る。嫌だな。

あの日から、今日が何日目なのか分からない。いくつか場所を移動して。たくさんの人に話しかけられた。たぶん、ここは病院なのだろう。

今日はどこかで見たことのある男の人と、女の人 came。いつものように何かを僕に喋ってる。もちろん分からない。ただ、いつもならみんな笑ってくれるのに。この人たちは笑ってくれない。

スプーンが口に運ばれる、いつも笑ってくれるから、僕はこの人が嫌いじゃない。でもね。これを食べると夜が来るでしょ。だから今日は食べないことにするよ。

夜が来る。嫌だな。

あの日から、今日が何日目なのか分からない。いくつか場所を移動して。たくさんの人に話しかけられた。たぶん、ここは病院なのだろう。

あれ、あの日ってなんだっけ

先生、あの日ってなんだっけ。先生、あの日ってなんだっけ。
先生、あの日ってなんだっけ。先生、あの日ってなんだっけ。

いつの間にか涙が流れていた。心臓が破裂しそうなほど大きくなっている。

息が出来ない。苦しい。死んじゃうよ先生。

死んじゃうよ！ 死んじゃうよ！

『……………』

『……………』

ああ、そうだ。死んだのは僕の母だ

喉に焼け付く痛みを感じた。たくさん先生が来て、口に布を押し込まれた。窓のない部屋に連れてかれ、一人ぼっちにさせられた。

柔らかそうな白い壁に囲まれた大きな部屋。その中のひとつの壁が、スクリーンのように映像を映し出していた。いつか見た黒と赤の世界。僕を狂わしたいのだろうか。誰がこんなことを……。

（頼むからもう止めてくれ！ もうたくさんだ！ 誰か！）

破裂した血液、歯から上の無い顔、中からめくれた様な身体、無残に散らばった破片、怯える女性、愉快に笑う猫のキーホルダー。

また心臓が膨らみ、苦しみが襲う。叫んでないと死にそうだ。

あの日から、今日が何日目なのか数えてみた。もう三ヶ月が過ぎていた。いつの間にか僕は十五歳になっていたんだ。今日もたくさんの人に話しかけられる。たぶん、ここはきっと僕のような人間をまともにするための病院だ。

僕のいる部屋は、開くことの無い強化ガラスの窓際に、背の低いベッドが置かれ、中央に食事をするテーブルと椅子、隅には小さな本棚が設置されていた。厳重に閉じられた窓付き扉の脇には、洗面所とトイレが完備されている。

僕にとってこのシンプルな部屋は、窮屈で、湿っぽくて、陰鬱な気分させる牢獄である反面、安心を与えてくれる頑丈な砦でもあった。どちらの面も、今の僕にとって、とても重要な役割を担っている。

僕の他にも何人か患者がいるらしく、遠くで誰かの叫び声がある。

とても嫌な音だ、その音が怖くて僕は必死に耳を塞ぎ、そいつが僕の部屋に入って来るのではないかと、ひたすら扉を凝視した。

怖くて、寒くて、耳の内側に響く自分自身の呻き声がまた怖かった……。

ごめんなさい先生、今日は一人にして下さい。食事也不要せん。僕の顔を見て微笑まないで下さい。

それでも先生はやってくるし、スプーンが口に運ばれた。

夜が来るとあの日の後のことを、必死に思い出そうとしていた。

でも、どんなに頑張っても、どうしても思い出せない。

あの日から、五ヶ月が経過した。僕はいつからか、たくさん患者のいる病棟に移されていた。前とは違う開放的な一人部屋だった。

物も色々増えていた。ノート、筆記用具、折り紙、画用紙、クレヨン。僕はそのどれにも触らなかった。触ったら、手に取ったら、他の患者と同じになってしまう気がしていたのかもしれない。まるで呆けたように、飽きることなく画用紙を黒く塗っているだけの女性、折り紙を折り始め、形になる間際に破いて捨ててしまう男。クレヨンで化粧をする老婆。僕はこの人たちとは違う。絶対に違う。

食事は決まった時間に食堂で食べる。好きなものを自分でよそって食べるのだが、どれも味がしない不味いものだった。食堂には他の患者もたくさんいるのだが、僕はいつも隅で一人で食べる。他の患者と一緒になんて食べれるわけがない。

ある程度の自由が許されるようになったので、最近は毎日何をするかを自分で決めていた。

まず、朝起きたら最初に母のことを考える。一緒に遊びに行ったこと。褒められて嬉しかったこと。母の得意料理がとても美味しかったこと。母の姿、服、声、表情、癖、香水、好きなお酒、好きな俳優、好きな歌、好きな本。毎日違う母を思い出していた。

どうして一日の始まりに、そんな悲しくなるようなことを考えるのか、それは毎晩夢に母が出てくるからだ。ときには笑顔で、とき

には最後の姿で。

午後になり、昼食を終えると、雨が降っていない場合に限り、僕はいつもの場所へ向かう。コの字型の建物に囲まれた広い庭の、ほぼ中央に植わった大きな楓。その傍らにある白いベンチに座って、どんより黒ずんだ梅雨の空を見上げる。紙コップに注がれたお茶を飲みながら、こんな生活に意味なんてあるのだろうか、ここから出たい、どうやったら出れるのか、そんなことをいつまでも考えていた。

この夜は早い、夕食を終えて風呂に入り、部屋に戻るとすぐ消灯時間になるので、あとは寝るだけ。だが、もちろんすぐになど寝れない。暗闇の中で目を閉じるのが怖いからだ。

母が死んだことは、理解できているはずなのに。でも暗闇の中になると、たまにあの光景が映って離れなくなるときがある、そうするとまた大声を上げてしまい、先生達に迷惑をかけてしまう。他の事はだいたい自分で考えられるようになったのに、それでもやっぱり、夜だけは怖い……。

ある朝、いつものように、部屋のベッドに腰掛けて母のことを考えていると、先生が来た。

最近先生達の話す言葉も理解できるようになってきた。正確にはないけれど、聞き取れた単語を拾って、自分でくっつけて。もう一度再生してみるのだ。今は何て言っているだろう。

「……………長野……………お爺ちゃん……………会って……………」

多分、長野の爺ちゃんに会ってみるか。と、そう言っているんだろう。僕はこくりと頷いた。

しばらくして、先生が僕の部屋に何人か連れてきた。僕が顔を向けると、爺ちゃんと婆ちゃんらしき人物を捕らえることができた。二人ともすぐに泣き出した。『らしき』というのは、あまりに久しぶりで、こんな顔だったつけ、という疑念が生まれたからだ。

あれ、もう一人、泣いている人がいる。女の子だ……。

僕は不思議に思いながらも、いつの間にか僕の肩に触れていた爺ちゃんに目を戻す。泣いている爺ちゃんが何かを喋っているのを見つめながら、僕はどれくらい爺ちゃんに会っていなかったのかを考えた。

確か……最後に帰ったのは……。

そうだ、僕が小学校の授業で書いた絵が、まぐれで市の特選賞を取った年の正月だ。

市役所に展示されていた絵が家に返却されたと聞いて、爺ちゃんがどうしても欲しいとねだるので、どうせなら田舎に帰ったときに直接渡そうと思って、冬休みに届けに行っただ。

僕の書いたへんちくりんな絵を、たいそうな額縁に入れて居間に飾って皆で眺めてたな。

課外授業で写生しに行ったときに書いた、川辺の絵。自分でいうのもなんだけど、どうしてこんな絵が選ばれたのか、不思議でしゅうがなかった。飾ってみたときに、皆がその絵を唸りながら褒めちぎるので、僕は恥ずかしくて顔を真っ赤にさせていたと思う。その後大晦日の番組を見ながら酒盛りが始まると、つまらなくなった僕を気にしてか、いとこの女の子が絵について細かく質問してきたのを覚えてる。あれはなに？ これはどうして？と。

思い出した。爺ちゃんの後ろで泣いているのは、あのときの女の子なのか。そうか……。

あれは確か僕が三年生のときだったから……、六年前だ。そうか、六年で人の顔ってこんなに変わるものなんだな。爺ちゃん、こんなに白髪だらけじゃなかったよな。婆ちゃんはこんなにシワシワで小さくなかったはずだ。

そして何より、いとこの女の子はこんなに大人っぽくなかったし、こんなに綺麗ではなかった。

僕の記憶の中の彼女は、いつも三つ編みを両肩にぶら下げて赤いフレームの眼鏡を掛けた、お勉強が得意そうな感じの、少し暗い女

の子だった。確か僕は彼女のことを『みくちゃん』と呼んでいた。
今のみくちゃんは昔見た彼女の母親に被るところがある。僕の母の姉にあたるその人は、僕の母よりも一ランク上の女性といった感じで、ものすごく美人な人だったのを覚えている。とても明るくてやさしい人だった。いつの頃かは覚えていないが、うちの母と同様に夫とは離婚していた。

そういえば。彼女の母親は来ていないんだな……。

そうやって自然にすうっと沸いてくる記憶を確かめている合間にも、ずっと爺ちゃんは僕に話しかけていた。僕は、かろうじて頭に入ってきた「大きくなったな」とか「爺ちゃん達のこと覚えてるか」といった言葉に頷いて応えていた。

爺ちゃんは「先生と少し話しをしてくる」と言っ、皆を連れ部屋から出て行った。

少しして、みくちゃんだけが部屋に戻ってきた。「少しお庭に出てみない？」と言うので僕はいつもの場所へ案内した。そこへ着くと彼女は大きく背伸びをした。

「良いところねー」

笑顔で喋ったときの彼女の声は、よく通る高いアルトのとても澄んだ水色の音色だった。きっと街中で聞こえたら皆振り向いてしまっただろう。現に今僕がそうしているように。

彼女は七分袖のチュニツクを着て、下にはハーフジーンズに、少しかかとの高くなったサンダルを履いていた。チュニツクの色がとても印象的で、その色は、夕日が地平線に半分隠れた頃、真上に現れる、深く、神秘的な色だった。

ベンチに腰掛けると、彼女もそれにならって僕の隣に座った。その後十分くらい、特に話をするわけでもなく、ただ何も考えず、遠くの空を見つめていた。

梅雨が明け、晴れ渡った夏の空はとても清々しく、ゆるやかに吹く風が、少し汗ばんだ体に心地よかった。

ここは『良いところ』だったのか……。そう思った。

気付くとすぐ傍まで爺ちゃん達と先生が来ていて、また少し僕に話しかけてから、お別れを言って帰って行った。皆が笑顔で帰っていくのを見て、僕は言い表せぬ寂しさを感じていた。

明くる朝、どういふ訳かまた来た爺ちゃん達と一緒に病院を出ることになった。僕は治ったのだろうか。自分ではよく分からない。

たぶん爺ちゃん物であろうセダンの後部座席に乗せられた。運転席には爺ちゃん、助手席には婆ちゃん。そして隣にみくちゃんが座ると、僕に向けてにっこりと微笑んでいた。この子は何が楽しいのだろうか……。

その微笑の後ろに映る建物が、威圧的な顔でじつと僕を睨んでいた。徐々に遠ざかっていくそれを見て、僕は、開放感と罪悪感を同時に味わっていた。何故だか分からないが、まだあそこに居なくてはならない気がしていた。

車内はゆったり広く、乗り心地が良かった。きつと最近買ったのだろう、柑橘系の芳香剤の匂いに混ざって、新車独特のビニールっぽい匂いがした。少し走ってから爺ちゃんはラジオをつけた。途端に車内は女性のパーソナリティの笑い声に包まれた。リスナーからのハガキを読んだり、ゲストと夏休みの予定を話し合ったり、とても賑やかで、その音は僕から罪悪感だけをそっと拭い去ってくれた。車は高速道路に乗ると、すぐにサービスエリアに寄った。トイレのことを聞かれ僕が首を横に振ると、婆ちゃんとみくちゃんが車から出て行った。二人で手を取り合ってトイレに向かうのが見え、婆ちゃんの足でも悪いのかと少し気になった。

待っている間、これから始まるであろう新しい生活のことを考えて少し不安になっていた。

今度はきつと、この人達に迷惑を掛けてしまう……。

細かいトンネルが多くなってきて、所々で消えるラジオの音が、僕の不安をより一層強いものへと煽っている。

進路に現れた小高い山が、まるで餌を吸い込む魚みたいに大きく口を開けて迫ってくる。意思とは反対に車がそれに飛び込んで行き、

途端に車内が暗闇に包まれる。ラジオの音と一緒に、僕の存在もこの世から消えてしまいそんな感覚を感じていた。

そんな折、爺ちゃんがカーナビのボタンを操作したかと思うと、弱々しかったラジオの音が音楽に切り替わり、聞いたことのあるピアノのイントロが流れ始めた。知らない人などいない、有名な英会話の先生のバンドの有名な曲。英語の授業で歌わされてから好きになり、音楽の先生に頼んで、イントロの部分だけピアノを教わったことがある。

僕は頭の中で授業で習った歌詞を読んでいた。なるほど、この歌詞のように生きれたら、もっとずっと楽になれるかもしれない。

あるがままに……

このままそつとしておこう

いつか必ず答えが見つかる

あるがままに……

その後も彼らの有名な曲が続いた。所々で爺ちゃんが一緒になって口ずさんだが、わざとなのか本気なのか、とにかくへたくそなので二人に笑われていた。爺ちゃんも笑っていたのでわざとなのかも知れないと思った。

長いトンネル郡を抜けてからは、窓の外の流れる景色を見ていたら、あつという間に長野の山間にある爺ちゃんの家に着いた。車から手を引いて降ろされると、みくちゃんに手招きされ、家の玄関へ向かった。

見た目は六年前のままだった。白と黒のツートンカラーで、とても大きな二階建ての和風建築だ。みくちゃんがカラカラと引き戸を開けて中へと入っていった。引き戸の音がやけに懐かく感じる。僕の記憶の中にある田舎の風景は、決まってこの音から始まる。引き戸を開ける音、心地よい木の匂い、床の軋む音、親戚の集まった賑やかな居間、僕の成長に驚く声、という流れだ。

中を覗くと、家の中は記憶の風景とは違っていた。彼女は軽くとイレや風呂などの生活に必要な設備を案内しながら、三年前に改装したことを話してくれた。

それから玄関を入ってすぐ右にある居間に通された。田舎っぽい八畳広間で、ここだけはほとんど記憶の風景と一緒だった。

部屋の中を見回すと、所々で小さい頃の記憶がだぶって見えてしまう。僕だけじゃなく、母さん、爺ちゃん、婆ちゃん、みくちゃん、みくちゃんのお母さん。どれも眩しい笑顔だった。

この居間は、入ってきた廊下側の引き戸の他に、家の奥にある広すぎるダイニングキッチンから行き来できる扉が付いている。それ以外の壁は二面とも全て膝の高さから窓になっており、その下は出っ張った収納になっていて腰掛けられるようになっていて。田舎にはよくある造りだ。

昔のままの配置で中央に長方形の木製テーブルが置かれていたが、それとは対照的に、いつ来ても部屋の隅に陣取っていた台座の上のブラウン管テレビは、大きなくてスマートな液晶に変わっていた。

既に爺ちゃんは部屋の上座に座って夕刊を読んでいた。僕はその正面に座らされ、みくちゃんはそのままキッチンへ消えてしまった。特に何を考えるでもなく座っていたら、みくちゃんがお茶を運んできて爺ちゃんと僕の前に出ると、僕の脇の出っ張った収納に腰掛けた。その後は爺ちゃんとみくちゃんが改装するときの苦労話を、楽しく笑いながら話しかけてくれた。奥のキッチンでは婆ちゃんが夕食の支度をしていた。

僕は、不思議な感じが頭から離れず、ふわふわしていた。

（あんなに病院の出方が分からなかったのに、本当にあっさり出られてしまったな。）

少しだけお茶をすすってみたら吐息が漏れた。それだけで爺ちゃんやみくちゃんは嬉しそうに微笑んでくれた。

たった数時間でこんなにも世界が違って見えるなんて、思いもしなかった。とりあえず今は、母のことを考えるよりも、この三人と今後どうやって付き合っていこうかを考えることができた。

しばらくして、夕食が運ばれてきた。ひとつ、ふたつと、お皿に盛られた色鮮やかな料理がテーブルを埋めていく。

僕はその光景を見て、徐々に血の気が引いていった。

「おい、どうした美月」

爺ちゃんが驚いた顔して僕を見ている。僕はいつの間にか小刻みに震えていたのだ。

テーブルの上に並べられた料理は、その組み合わせ、盛り付け方、お皿の選び方、そのほとんどが母のそれと同じだった。真ん中にある牛肉とごぼうのしぐれ煮なんて、上に糸切唐辛子を乗せるところまで一緒だった。

なのに、母だけが居ない……。そう思った瞬間、母と二人きりの食卓が視界に飛び込んでくる。なんでもない時間、なんでもない会話、なんでもない母の笑顔、その全てが、かけがいのない幸せな食卓に思えて急に胸が苦しくなる。

（あんまりじゃないか……。たまの休みに腕をふるって僕のために作ってくれたのに、母抜きで食べなくちゃならないなんて。ここに座って、一緒に食べながら、学校であった話を聞いてよ。僕が行儀の悪い食べ方をしているのを叱ってよ。ねえ、母さん……。）

「美月くん！　ねえ、どうしたの？　大丈夫？」

みくちゃんが僕の肩に手をあてて心配そうな顔で覗きこんでくる。

（見ないで！）

僕は顔を手で覆い隠した。

涙があふれてきていた。叫んでしまいそうだった。

（だめだ！　来るな！）

折角あの場所から引き取ってくれたのに、今ここで叫んだらまた戻されてしまう。そう思って必死に湧き上がる衝動を押さえつけていた。

（戻りたくない！ 来るな！ 頼むから！ もう一人は嫌だ！）

「美月くん！ ねえってば！」

彼女は僕の手を半ば強引に引き剥がした。

（っ！）

彼女の顔が目の前にあった。彼女は僕をたしなめる顔で見ている。まるで、言う事をきかない子供に向かって、母親がそうするときのように。

だが、明らかにそれとは違うところがあった。彼女は泣いていた。（なん……で？）

よく見ると、テーブルを囲んで座っている爺ちゃんや、婆ちゃんも、僕を見ながら静かに涙を流していた。

（どうして……？）

その疑問を感じとったのだろか、彼女は普段よりもやや青みが増した声で、一言ずつ、丁寧にささやいた。

「美月くんはね、もう、一人じゃ……ないんだよ？」

どっと感情がせり上がってきて、前がぼやけて見えなくなる。次の瞬間、とても温かい感触に包まれた……。彼女が僕を強く抱きしめてくれたのだ。

「悲しいのは、皆一緒だから……ね？ 一人じゃないから……」
「……うっ……うっ……」

不思議な感じだった。今までに無い感じ。もう、叫びたいとは思わなかった。ただ、悲しくて、思いつきり泣きたかった。

「うっうっ……うっうっうっうっあああああ」

僕は涙が枯れるまで、彼女の中で泣き続けた。

心が洗われる、とはこういうことを言うのだと思った。重くてどす黒いどろどろの塊で覆われた心の壁が、四人の涙で洗い流されて徐々に薄まっていき、次第に今までその下に隠されていたのである。うろ青色の表面があらわになっていくのが分かった。

洗い流された黒い塊は、いつまで経っても母の死を受け入れることが出来ない自分への焦燥感なのか、新しい家族に迷惑を掛けては

いけないという使命感だったのか、それとも他の感情によるものなのか、今の僕には分からなかった。

どれくらい経っただろうか、僕が落ち着いたのが分かった、彼女は僕の首から腕をほどき、軽く涙を拭ってから、まだ少し湿っていたが、とても明るい声で言った。

「さっ、食べよっ？」

それに見習い、涙を拭ってから僕も顔を上げた。

久しぶりの暖かな食事が始まった。料理は少し冷めてしまっていたが、どれも本当に美味しかった。驚いたことに見た目は一緒なのだが、母の料理よりも若干薄味で、深みのある上品な味だった。

「どうしたの？ 美味しくない？」

みくちゃんが聞いてきた。たぶん、一口ずつ考えながら食べている僕が気になったのだろう。僕はその理由を教えてあげようと口を開いた。

「……」

が、音にならなかった。もう一度……。

「……」

喋ろうとすると、空気が出てこない。喉がおかしくなったのかと思いい、喉を指で触りながら口で呼吸してみると『はー、はー』と音が鳴る。特におかしくは無いようだ。

もう一度試す。

「……」

駄目だ。やっぱり喋ろうとしたときだけ空気が止まってしまう。いつからか皆の箸は止まっており、三人は少し驚いた顔をしてお互いに顔を見合わせていた。僕の様子に気付いた爺ちゃんが口を開く。

「美月……お前え……」

みくちゃんが立ち上がり、よろよろと廊下へ出て行った。

僕は言葉を失っていた

シヨックだった。目の前が真っ暗になっていくのと同時に、いつから喋れなくなっていたのかを思い出そうとしてすぐに止めた。考えるまでもなかったからだ。

「まあー、そう気を落とすな美月、きつとすぐに戻る」

爺ちゃんが言い終わるのと同時に、よろよろと何かを抱えたみくちゃんが戻ってきた。僕の隣にぺたんと座ると、「はい」と言っ
て抱えてきた物を僕に手渡した。

それは、どこにでもよくある大きいサイズのスケッチブックだった。よく意味も分からず、表紙をめくって中を見ると、そこには真っ白なページだけがどこまでも続いていた。

『ピッ』という何かが抜けた音に顔を上げると、彼女は細い方のキャップが外され、太い方のキャップの先にはめ込まれた油性マジックを差し出していた。

（そういうことか。）

僕は彼女から油性マジックを受け取ると、懐かしい匂いを感じながら、さらさらと言葉を文字にした。

書き終えてからスケッチブックを裏返し、彼女達に見せた。

『声が出ない』

どういうわけか、僕の書いた言葉を読み終えると皆の顔が笑顔に変わった。その代表として、みくちゃんが答える。

「うんっ」

彼女が見せた今日一番の笑顔に見惚れてしまった。それに気付いたのか、彼女の顔がはてなマークに変わっていくのを見て急に恥ずかしくなった。顔が赤くなる前に目を逸らして、もう一度、スケッチブックいっぱいと言葉を書いた。

僕はまたスケッチブックを裏返して、今度は笑顔と一緒に言葉を見せた。

『おいしい』

三章 【療養】

翌朝、相変わらず母が夢に出てきたものの、今までのとは違う感覚で目が覚めた。未だ悲しい世界の中だけど、少しだけ出口が見えた気がしていた。

鳥の会話がすぐ近くで聞こえる。ベッドの枕側に面した窓のカートンを開けてみると、すぐ下に見える瓦屋根から、スズメが何匹か飛び立って行った。その代わりに飛び込んできた風景で僕は昨日のことを思い出した。

右端に岩が積み重ねられ、その周りに玉石が敷き詰められた広い庭園、白い塗料で壁を塗られた大きな納屋、車二台くらいが平気で通り抜けられるような砂利の通路、遠くで揺れる巨大な杉の木。

（そうか、ここはもう病院じゃないんだ……）

そうして、ぐるっと部屋を見回してみた。ベージュの壁紙に、赤茶色のフローリング。そして、僕が寝ていた大きめのベッドの他に、たくさんの家具が置かれていた。箆笥、クローゼット、本棚、化粧台、テーブル、ベッドの脇の長いサイドボードには液晶テレビやノートパソコンまである。

確か昨日ここへ案内されたときは、『美月くんの部屋』としか説明されなかったが、明らかに客用の部屋ではなく、誰かの部屋だ。しかも女の人。そこで僕はひとつの答えに辿り着く。恐る恐るクローゼットを開いて、この部屋の持ち主を特定しようとした。

驚いた。中にぶら下がっていたのは男物の服ばかりだった。僕は軽く混乱しながら、その服ひとつひとつを見てはつとなった。

（あれ？ これは……）

僕が持っているお気に入りのジャケットにそっくりだった。もしや、と思いハンガーに掛かっている全ての服をもう一度観察してみると、なんのことはない、全部僕のものだった。その後、箆笥も一段ずつ確かめたが、やっぱり入っていたのは僕の下着やくつ下、季節

ごとの洋服ばかりだった。

昨日の夜、お風呂に入ったときは病院から持ってきた下着と寝巻に着替えたから気にしていなかったけど、たぶん、僕が困らないよう、家から着替えだけ先に持ってきてくれていたんだ。僕はそのやさしさに感動して、ありがとう、と心の中で呟いた。

僕はドアを開けて部屋の外に出た。目の前にトイレがあったので、とりあえず用をたしてから一階へ行こうとしたとき、背後でドアの開く音がした。僕の隣に位置する、階段から一番遠い部屋から出てきたのは赤いＴシャツに白いハーフパンツ姿のみくちゃんだった。

「ずいぶん遅いお目覚めね」

（今何時？）

（ああ、喋れないんだった……）

僕は今が何時か分からないことを伝えようと、とりあえず首をかしげて見せた。

それを見た彼女は何をどう受け取ったのか、軽く握った手を口に当てて『うふふっ』と笑った。そして、ひと息ついてから僕の方を向きなおり、やさしい笑顔で「おはよう」と言った。僕もぎこちない笑顔を作ってから頷いた。

「ご飯、すぐに用意できるわよ、食べる？」

お腹を触り、食欲を確かめてみるが、ちっとも減っていないので首を横に振って答えた。

「そう、じゃあお茶いれてあげるから、顔洗っておいで」

言い終えたあと、彼女は小さく『あっ』となった。

「緑茶とコーヒー、どっちがいい？」

少し考えてから、困った。首を縦に振っても、横に振っても答えにならない……。瞼を何度か細かく閉じて考えると、頭の上に電球が光った。

僕は彼女を自信満々の顔で見ると、右手でカップを持つ指を作り、口元で見えないコーヒーをすすって見せた。これで通じるはずだ。

「ぶっ」

（ぷっ？）

「ぷくくっ……あははははっ」

意味が分からない。何故か彼女はお腹を抱えて笑っている。その光景を見て、僕は呆然と立ち尽くしていた。

「ふふっ、はー、ごめんごめん。コーヒーよね、分かる分かる」

腑に落ちない。じっと見つめて問い詰めると、彼女はうつすら目じりに溜まった涙を拭いながら説明した。

「だって、美月くん、あーんまり可愛いんだもの」

（！？）

頬が熱を持ち始めたのが分かったので、サツと身を反転させ、わざと大きな音を立てて階段を降りた。途中、後ろから「ごめんてばー」と聞こえたが、全く反省の色を感じられない声だったので、そのまま洗面所へ向かうことにした。

風呂の脱衣所と兼用の洗面所は、畳にして三畳くらいの、とても広々とした空間だ。ふと、鏡の中の僕と目が合った。その顔は驚いたことに、笑顔だった。だった、というのは当然すぐに驚いた顔に変わってしまったからだ。

楽しかった。こんなに楽しい気持ちは本当に久しぶりだ。昨日まで塞ぎ込んでいたことが、遠い過去に感じるくらいに。ただ、楽しくて、まだ笑える自分が嬉しかった。

昔の自分に戻れるかもしれない。そんな期待に胸が膨らんだ。

そういうふうと考えられるのは、みくちゃんのおかげだと感じていた。昨日抱きしめてくれたこともあるが、小さい頃から僕を知っていて、深い悲しみを共有してくれる歳の近い女の子。そんな子が近くに居てくれる、それだけで僕は救われる気がしたのだ。

顔を洗うとぼさぼさの髪の毛が気になって、少しお湯で濡らして整えた。居間に向かう途中、キッチンでコーヒーメーカーにお湯を注いでいる楽しそうなみくちゃんの姿がチラッと見えた。するとな

んだか急にさっきの仕返しがしたくなったので、キッチンを通らず玄關脇から居間に入り、隅に置いてあるスケッチブックを手に取った。

昨日の夕飯の後、好きに使っていいと言われたので、よく使うことになるであろう居間に置いておくことにしたのだ。

しばらくしてみくちゃんが両手にコーヒークップを持ってやってきた。僕の目の前に「おまたせ」と言っただけで、僕から見て右斜め前にもうひとつのカップを置くと、そこにぺたんと力を抜いたように座った。この座り方は彼女の癖なのだろうか。

カップを手にとって『ふー』と息を吹きかけたところで、ようやく僕がスケッチブックを抱えていることに気が付いたようだ。

「なあに？　にやにやして」

勢いよくさつき書いた言葉を見せてやった。

『姉さんも　とーっても可愛いよ　最初見たときはおどろいたよ！』

それを見た彼女が『！？』となるのが分かった。みるみるうちに耳まで真っ赤になるので、こっちまで赤くなってしまいそうだ。

「ばっ！　ばかじゃないの！」

続けて、両手で抱えたコーヒークップに目を落とし『ちっとも可愛くないわよ……』と、お門違いなことを小声で言った。

ちなみにこの言葉を書くと、彼女のことをなんて書くかを迷った。さすがに久しぶりに彼女のことを呼ぶのに『みくちゃん』では恥ずかしい。かといって彼女の名前を呼び捨てにするなど僕の性格上不可能に近い。ということで、無難に三つ年上の親族としての呼び名を書くことにしたのだ。

仕返しは大成功に終わったが、なんか……ばつが悪くなって、僕もスケッチブックを床に置き、カップを手にとってコーヒーを冷ます作業に移った。

しかし『ばかじゃないの』とは心外だ。最初に見て驚いたのは嘘ではない。彼女はとても可愛い。というか綺麗だ。僕のタイプとかそういうのじゃなく、誰から見てもそうだと思う。

代表的なたまご型の、小さな顔。若干目じりが垂れた、切れ長の大きな目。薄い茶色の大きな瞳。小ぶりでスツと通った鼻。少し薄い唇は健康そうな朱色をしている。

昔からそうであった赤茶色の髪の毛なんかは、胸の位置まで伸びていても痛んでおらず、サラサラでやわらかそうだ。ランダムに毛束を作った前髪がゆるやかに右に流されていて、とても彼女の上品な雰囲気合っている。

そして何より極めつけは、透き通った白い肌だ。これは僕が将来結婚する女性を選ぶ際に絶対外せないこだわりでもある。おまけに純粹ときたものだ。ここがもし都会だったら、きつと悪い大人に騙されてしまっていたことだろう。

こんなことを考えながらコーヒースすすっていると、ふと気付いてしまう。僕がみくちゃんのことを、ものすっごく意識していることに。

そんな瞬間、彼女と目が合ってしまう。コーヒースすすりながらの上目遣いに。

すぐさま目を逸らしたが遅かった。今度はこっちが真っ赤になっているのが鏡を見なくても手に取るように分かる。彼女にバレないよう、顔を下に向けるとスケッチブックがあっただので、話題転化をそいつに託した。

『そういえば じいちゃん達は？』

「ああーと、畑に行っただよ。お弁当持って行っただから夕方まで帰ってこないわねー」

そうだ、ここは生粋の農家だった。どれぐらいの広さなのかは分からないが、畑と果樹園、それから松茸用の山まで持っているのだ。爺ちゃんとの作物は本当に美味しく、特に果物は逸品だ。毎年ダンボールいっぱい送ってくれるおかげで桃と巨峰は子供の頃からの大好物だ。

それにしても夕方まで二人きりなのか……。ふと壁に掛けてある時計を見ると、まだ十時半だった。

田舎特有の早い夕飯を考えても、爺ちゃん達が帰って来るまで軽く六時間はあるだろう。……参ったな。

『この後どーするの?』

「んー、何したい? 決めていいよ?」

『特に お姉さんは?』

「えー、私も特にー……あ、良いお天気だし、お散歩行こっかー」

悪くないと思い頷いた。病院にいる間に気付いたのだが、自然の中でボーっとするのは、案外性に合っているみたいだ。

「じゃあ、お昼食べたら出掛けましょう」

再び頷く。

「公園と川ならどっちが良い?」

さっき書いた言葉の一部分を二重線で消して、その上に相應しい言葉を書き足した。

『川かな お姉さんは?』

「私も暑いし川が良いかなー」

「つと、そうだ美月くん。できればその『お姉さん』っていうの止めてくれる? なんだかちょっと他人っぽい気がする」とゆーかー……えつと、皆私のこと『みく』って呼ぶから美月くんもそう呼んでくれると嬉しいな」

ひとつ頷いてから、僕からもお願いした。

『じゃあ みくもオレのこと 呼び捨てでいいよ』

それを見てクスツと笑った。

「分かったけど、名前、ちゃんと漢字で書いてよー」

彼女はスケッチブックを奪い取ると、僕に見えるように書いて説明した。

「深い紅って書くの。気に入ってるんだから」

その後も僕と深紅の、目と耳で受け取る会話は続いた。会話、というよりは僕の一方的な質問ばかりだったが、彼女は何にでも嫌な

顔せず答えてくれた。

今が七月の終わりで、高校最後の夏休み中だということ。小説が好きで読むときは日に五冊以上読むらしく、今までの最高記録が十冊だということ。料理が得意で、スパゲティには誰にも負けない自信があるということ。進学よりも児童教育、主に絵本や童話の書き方を教えている専門学校に通い、将来は絵本作家を目指していること。

そして最後に思い切ったことを聞いてみた。

『好きな人とかはいるの?』

きつとこんな大胆なことを聞けるのは、喋ることが出来ないおかげかもしれない。それと、『彼氏は居ないの?』と聞かなかったのはもちろん居てほしくないからだ。しかしその期待はあっさりと裏切られた。彼女は黙ってこくりと頷き、それどころか付き合い始めて一年になることまでをも教えてくれた。

聞くんじゃなかった。僕は我ながら自分の馬鹿さ加減に呆れた。

『彼氏はいるの?』と聞いておけば、好きということまで聞かないで済んだのに、自分でシヨックを倍増させてどうする。

まあ、落ち着いて考えてみれば誰だつて分かることだ。そもそも、これほど整った美しさを持った年頃の女性に、彼氏が居ないことの方がおかしい。だがしかし、落胆しながらも、彼女が頷いたときに見せた表情に、僕は一抹の希望を覚えていた。

なんというか、さっき僕が『今朝の仕返し』をしたときに、あれほど真つ赤になった深紅が、本来恥ずかしいことであるう好きな人のことを聞かれ、色を変えずあっさり答えたのだ。さほど好きではない、僕は勝手にそう思い込むことにした。

それから深紅が昨日の残り物を温めてくれて、僕らは軽い昼食をとった。後片付けは彼女から半ば強引に奪い取って僕がやった。もちろん彼女に気に入られるためだ。

寝巻のままだったので、一旦部屋に戻り出掛ける準備をする。箆筥から探し出したお気に入りの白いプリントシャツとちよつと高め

のジーンズを着込んだところで、鳥のさえずる声が聞こえていることに気付いて、今度はゆっくり窓の外を覗いてみると、そこには三羽のすずめが少し飛び跳ねては何かをついばみ、また少し飛び跳ねてはついばむ、を繰り返していた。どうやらここは彼らのたまり場らしかった。あまりにも目と鼻の先で楽しいダンスを踊るので少し見入ってしまった。

覗いたときと同様に、ゆっくりとその場を離れ玄関へと向かった。既に深紅は用意が済んでいるようで、サンダルを履いた状態で玄関に腰掛けていた。僕が階段から降りきるのを確認したところで、「じゃ、行こっか」と言ってゆっくり立ち上がり、玄関の引き戸をこれまたゆっくり開けて外へ出た。

彼女の動作はいちいちしっかりしている。しっかりしている、というか、例えば今の一連の動作にしても、『外に出る』という感じではなく、『立つ』と『歩く』と『引き戸を開ける』と『また歩く』をひとつずつこなしているような感じた。喋り方はそうでもないのだけれど、実はかなりおっとりした性格なのかもしれない。

外へ出てみると、真上から差し込む夏の日差しで、一瞬にして白い世界に引きずり込まれた。目を細めて前を見やると、白いワンピースに麦わら帽子を頭にのせた、お散歩用の彼女の姿がとても眩しく見えた。遠慮の無い陽光が浴びせられた肌は、より一層白く光っていて、とても美しかった。

高鳴る胸を抑えながら引き戸を閉めると、彼女は再び前を向いて歩き出し、僕はそれに付いて歩いた。そう、田舎というところは鍵を締めるという習慣が無い。無用心と思うかもしれないが、これでも開け放してある勝手口から猫や狸が入り込んでくることはあっても、空き巣に入られたり、強盗に押し入られたということは一度も耳にしたことが無い。田舎とはどこもそういうものなのだろう。

家の前の砂利道を抜けると、ぎりぎり車同士が通り抜けられる程度の舗装された道路に出た。そこで彼女は一旦立ち止まってから、僕の方を振り向いた。

「そんなに遠くないから、すぐ着くわよ」

そう言つて道路の中央を歩き出す。その先に目をやると、しばらく一本道だということが分かったので、今度は彼女と並んで歩くことにした。すぐ隣でゆっくり歩く彼女。ふと見ると笑顔をこちらに向けていた。どうしてこう、いつも彼女は楽しそうなんだろう。嫌いな物ばかりが並んだ食卓でも、作ってくれた人のことを考え、彼女は喜んで食べるに違いない。きっと、そういう人種なのだ。

六年しか経っていないというのに、目の前に広がる町の表情には見覚えが無かった。それもそのはず、ここへ来るときはいつも冬真っ盛りの季節だったので、全く白っ気の無い夏の景色を僕は知らないのだ。

凍えるほどに静まり返る白銀の世界とは真逆の、大小様々な木々によつて鮮やかに彩られた深い緑の大地。遠くで聞こえる小川のせせらぎ、頭上でその存在を誇らしげに誇示している大きな太陽、山から青葉の匂いを運んでくるさわやかな風、その全てが合わさつて僕の知っている田舎の景色とは違う物へと変えてしまっているのだ。たった半年。日にして百八十日の間に、こんなにも世界は変わるものなのかと、ただ驚いていた。

「なあに？ 深刻そうな顔して、何か考え事？」

そうか、僕は深刻な顔をしていたのか、今思っていたことを伝えてあげようと思つて『あつ』と、なつた。

（しまった、スケッチブックを忘れてきた。）

取りに戻るうかと少し考えたが、『ま、いつか』と思い、首を横に振つて答えてやつた。深紅の歩調のようにゆるやかな速度で。

本当にそれほど遠くなかつた。散歩を楽しみながらゆっくりと歩いてきたので二十分くらい掛かつてしまったが、普通の人の速さなら十分、自転車なら五分もしないで着いてしまうくらいの距離だろう。

家の前の背の低い木に囲まれた道路を真っ直ぐ進み、突き当たりの丁字路を右に曲がって、しばらく歩くと堤防が見えた。少し急な坂道を上ると橋になっていて、その脇から川へ降りることができののだ。そこに、彼女のお気に入りだという場所があった。嫌なことや、辛いことがあったときは一人でここに来て、日が落ちるまで川を眺めていると、それがさっぱり消えていくのだと、道中に照れながら教えてくれた。

そのお気に入りの場所は、川というか、自然に出来上がった公園のようだった。背が高くなった夏の雑草の合間に、一人がやっと通れるような道があり、そこを下ると今度は開花したばかりの白やピンクのコスモスが揺れている。その合間に流れる幅が五メートルくらいに川はとても緩やかに流れていた。

深紅はサンダルを脱ぐと、川の縁に腰掛けて足だけを川に泳がせた。

「気持ち良いよー、美月もやってごらん」

サンダルを脱いで同じようにしてみると、川の水は思ったほど冷たくなかったが、それでも、いつきに夏の蒸し暑さから僕を開放してくれた。その心地よさに自然と息が漏れていた。

「うふふつ、気に入ってくれた？」

（うん）

「とっても良い場所でしょー？」

（そうだね）

「あつ、そうだ、明日ここでピクニックしようかー？」

（うん）

「サンドイッチ作ってあげるね」

（うん）

深紅もスケッチブックが無いことが分かって聞いているのだろう。頷くだけで会話が成立する。彼女のやさしい気遣いがとても嬉しい。そんな僕の感情が透けて見えたのか、彼女は少し考えてから、いたずらっぽい表情を僕に向けた。

「飲み物は紅茶とコーヒー、どっちが良い？」

またか、と思い今朝のようにカップを持つ手を作ったところで深紅の真意に気が付いた。彼女はにやにやと憎たらしい表情でこちらを見ているので、悔しくなった僕は必死で考えた。するとすぐに閃いてしまった。僕は天才ではないだろうか。

わざとらしく彼女の前に見えないカップを持っていき、もう片方の手で茶葉の入ったティーパックを摘んだ指を作り、紅茶を作る仕草をしてから飲んで見せた。深紅は、はっとなつてから「おー」と言つて小さく手をぱちぱち叩き始めた。僕は腕を組んでどうだと言わんばかりの表情を作つてみせた。

すると彼女は今朝と同じように口を隠してクスクス笑い出した。

「やあっぱり、美月つて……あ、なんでもない」

怪訝そうな顔をする僕からサツと顔を逸らしたかと思うと、なんか勝手に赤くなっている。下を向いて両手で髪を梳かす仕草がたまらなく可愛い。

（ああ、なるほど……）

きつとまた『可愛い』と言おうとして、その後に自分がされた『仕返し』を思い出したのだろう。深紅のそんなところがまたとても可愛いらしかった。こんな彼女を見て好ましく思わない奴などこの世にいないだろう。

すこし甘酸っぱい沈黙が流れ、二人で穏やかな午後を満喫していた。

しばらく経つて、深紅は思い出したかのように帽子を脱いで背中の方に置き、代わりにぶちっと一輪のコスモスを摘んで、顔の前でくるくる回した。

「私ね、本当に安心してゐるの。病院にお見舞いに行ったとき、私やお爺ちゃん達がどんなに話しかけても全く聞こえてないみたいで、もうずっとこのままなんじゃないかって、それから面会出来なくなっちゃつて……すごく心配だったの」

視線が少し下に下がったのが分かった。それから彼女は『でも…

…』と呟いてから僕の方を見て言った。

「本当に良かった。美月がこうしてここに居ることが、本当に、嬉しいの、あれ？ やだ……」

深紅は不意に流れた涙を隠そうとまた下を向いてしまったが、隠すまでもなく、僕は彼女のそれを見てはいけない物のように思えて、ただ緩やかな川の流れをじっと見ていた。

彼女の気持ちはとても嬉しかったが、その中にひとつの違和感を感じていた。

何故僕のことをこんなにまで心配してくれるのか……。

まず、彼女が僕のことを好きだということは有り得ない。何せ子供の頃遊んだといっても年に一回程度だし、それに六年も会っていないのだ。だとすると、母を亡くした僕のことの不憫でならないのか、それとも数少ない親戚なら当然のことなのか……。

直接聞くにも、今の僕はその術を持っていない。

その後もあれこれ自分なりに考えてみたが、再会して二日しか経っていない彼女の心など僕に分かるはずも無かった。

どれくらい経ったのだろう。僕らが座っている場所はいつの間にか太陽の角度が変わって橋の陰になっていた。

そろそろ帰ろうかということになり、足を川から出して、体育座りの格好で少し乾かしてから僕らはサンダルを履いて立ち上がった。そこで深紅だけが体勢を崩して前に倒れかける。

「わっ」

反射的に僕が肩を捕まえてやる。

彼女の肩はとても細くてやわらかく、力を入れすぎると壊れてしまいそうだった。リップが薄くひかれた唇から吐息が漏れ、僕の肩にあたっているのが分かる。それに密着したときの彼女の身体は、並んで歩いているときには気付かなかったが、僕よりもひとまわり小さくてほんのり桜の匂いがした。

深紅は顔を上げると、少し照れて「えへへー、ありがとう」とお礼を言った。

僕が手を貸して体勢を直してやったところで、赤くなっているであろう顔を悟られないよう、彼女よりも先に来た道を引き返した。深紅の彼氏は、あの細い肩を抱きしめたことがあるのだろうか、あの可愛らしい唇に触れたことはあるのだろうか。それともその更に先に……。つまらない男と思われるだろうが、彼女を近くに感じれば感じる程、そう思わずにはいられなかった。

「ねえ」

ん、と振り返る。

「ここまで連れてきてあげたお礼に」

スツと細くて白い手を僕に差し伸べた。

「私を連れて帰ってくれない？」

は？ という顔をしていると、彼女は「ちょっと疲れちゃったみたい」と付け足した。僕は諦めた顔で深紅の手を取り、顔を見ないようにして、ゆっくりと道路まで出た。そこで手を離すと、あろうことか彼女は腕に巻きついてきたのだ。気が動転した。もう隠せない耳まで熱い。『なんのつもりだ！』という顔で必死に抗議すると。

「ね、もう足が疲れちゃって、うまく歩けないのー、おねがーい」

というわけの分からない嘘で誤魔化してきた。そんなわけないだろう、と軽く振り解こうとしたが、思いのほか強い力で巻きついていたので、ものすごく恥ずかしかったが、僕はとうとう観念して歩き出した。

「わーい」

……これは一体なんなのだろう。彼女がそうしてきた理由を考えようとするが、さつきから腕にふにふに当たる物が思考を妨げる。初めて感じる女の人の胸の感触。厳密に言うと事故で何度か触れてしまったことはあるが、こんな特別な状況は初めてだ。深紅の胸は見た感じ大きいサイズでは決してないのだが、ぎゅうつと押し当てられると意外にもしっかきその存在を認めることができた。いや、

むしろ大きいと思った。

やばい……。ジーンズが窮屈になってきたかと思うと、途端に歩きづらくなってきた。バレていないだろうか、そう思いチラッと深紅の顔を見ると、彼女は何の疑いも無い天使の笑顔でこちらを見ていた。

（だ、大丈夫、バレてない。たぶん……）

少々ぎこちない歩き方だが、幸いにも彼女の歩調がゆっくりなのが功を奏した、といったところか。

「美月ったら、大きくなったのねー」

（！？）

固まった。

（ば、ばかな……）

「昔はこーんなに小さかったのに」

といって手で高さを作った。

「今では私より大きいなんて、男の子ってすごいわねー」

それを聞いていつきに全身の力が抜けた。

（そっちかあ~~~~~）

「ん？ どうしたの？」

（なんでもな〜い……）

僕は脱力した手をひらひらさせた。

無事家に辿り着くと、深紅は僕の腕から離れ、おぼつかない足取りでふらふらと玄関まで行って引き戸を開けた。

（あれ、本当に具合でも悪かったのかな。）

家の中から深紅の元気な「ただいまー」の後に、「おかえりい」という婆ちゃんの声が聞こえた。散歩の報告を婆ちゃんにしているところを見ると、特に具合は悪くないようだった。

それから順番でお風呂に入り、夕食を食べ、なんとなく皆で夏休みの特番を見た。僕の様子が昨日とは、がらっと変わっていること

に気付いたのか、爺ちゃんが「なんか良いことでもあったんか」と言うので、僕は親指を立てて見せてやると「ほうかー、良かったな」と、それ以上は聞かなかった。少しだけアクシデントが起きたものの、誰かさんのおかげで本当に良い一日だった。それは間違いない。

『ふああ』とあくびしているその人を横目に、たぶん、僕はこの人が好きなんだろう、そう思った。といっても彼女をどうこうしようという気は今のところ更々無い。なんせ曲がりなりにも両思いの彼と付き合っているのだから……。

特番の後に放送された何度も見たことのあるアニメ映画が終わった頃、壁掛け時計が十一時を知らせるオルゴールのメロディを奏でた。ふと、明日は早起きしてやろうと思い、スケッチブックに言葉を書き込んで見せてやった。

『よし ねる』

「じゃー、わたしもー」

二人で居間を後にする。爺ちゃんと婆ちゃんは映画の途中で床についてしまったので、電気を消して回って二階へ上がる。部屋の前に着いて、深紅の「おやすみ」に手を振って答えてから部屋に入った。

ベッドに横になり、クーラーは使わず窓を開けて寝ることにする。ここは山から吹き降りてくる風がとても涼しいので、クーラーを使う必要が無いのだ。さっそく網戸越しに入って来た心地よい風を感じて、少し考え事をした。

（やっぱりそうだ、この部屋……。この部屋は深紅の母親の部屋だ。）

今朝、部屋を見回したときに辿り着いた答え、それはここが深紅の母親の部屋だということ。そして僕がこの部屋に居座り、今日一日全く母親の話が出てこなかったということの答え、それは深紅の母親がまだ戻ってきていないということだった。

数年前、母が受話器に向かって誰かと口論してるのを見つけて問

いただいたことがあった。『カケオチ』ってどういうことかと。あまりに大きい声だったので聞こえてしまったのだ。

母は迷いながらも教えてくれた。深紅の母が男と逃げたと。子供ながらにシヨックを受けたのを鮮明に覚えている。とっても優しくった人なのに、家族を置いて逃げるだなんて、誰が想像できるだろうか。あれは確か三年くらい前だったと思う。それからまだ帰ってきてないのかと思うと、深紅のことが可愛そうに思えて仕方なかった。

彼女は今どんな気持ちなのだろうか。自分のことを捨てた母のことを今でも恨んでいるだろうか。それとも、三年経った今でも逢いたくて仕方のない気持ちなのだろうか。どっちだとしても、僕は深紅が早く母に逢えると良いなと思っていた。彼女の母はまだ生きているのだから。

そんなことを考えたのがいけなかった。

あの日と同じ光景が夢の中で再現され飛び起きた。

胸が物凄い速さで鳴っていて、うまく息が出来ない。僕は、叫びそうになる衝動を抑え付けるため、震えている手を顔に当てて呪文を唱える。

（落ち着け、大丈夫。落ち着け、大丈夫。）

駄目だ、手の震えがどんどん大きくなる……。

（落ち着け！ 大丈夫だから！ 落ち着け！）

酷く汗を掻いていて、寝巻きがビシヨビシヨだった。

（着替えなくちゃ……。）

自我が崩壊しそうになるのをなんとか制止しながら、筆筒から代えのシャツを取り出して、半ば千切り取るように服を脱ぎ、新しいシャツに手をかけた。意識を着替えることに集中して、なんとかこの場を切り抜けようとしたのだ。

その試みはうまくいっていた。とりあえず息が出来るようになった。

ていた。

（落ち着け、大丈夫。落ち着け、大丈夫。）

そうしてシャツに首を通して、無事、着替え終わったときだった。この部屋に。長野の田舎であるこの部屋に。背後から鳴るはずの無い音が響き渡った。

「チリン」

時間が止まる。

振り向いてはいけなないと頭が知らせていたが、人間の条件反射に抗うことはもはや不可能だった。振り向いた瞬間、目が合った。

いつの間にか少し開いていた網戸から部屋の中に侵入してきたとこだった。鈴が付いた赤い首輪を巻いた黒い猫。

その刹那、僕はそいつの金色に光る目に吸い込まれた。もう考える力なんて残っていなかった。目の前に横たわるあの日の母の姿。

「ねえ母さん。顔はどこにやったの？ 腕と足はどこにやったの？

駄目だよ、こんなに血を流したら死んじゃうよ。早くしまつて。

ねえ母さん」

僕が悪かったから

気付いたのは翌朝だった。

あるうことが僕はきちんとベッドの上で目が覚めた。身の回りを観察してみるが、着衣や布団の乱れもない。体調は少しだるいくらいで心臓も落ち着いている。酷い夢だった……。

まだ、あの日の傷は癒えていないようだ。自分でも情けなくなる。昨日は自分でもすいぶん回復したと思っていたのに。いつまで苦しまなくちゃいけないんだ。僕がいつたい何をしたっていうんだ。

苛々している頭を少し落ち着かせてから起き上がり、トイレを済ませて一階へと向かった。

今朝も既に爺ちゃんと婆ちゃんの姿は無く。キッチンでなにやらごそごそと作業をしている深紅を見つける。きっと昨日言っていた

サンドイッチを作っているのだろうと思い、僕は顔を洗ってから声をかけることにした。

顔を洗い終えてタオルで拭う。仕上げて鏡を見る。すると、僕が着ているＴシャツの袖口に、少しだけ血が付いていることに気が付いた。あれ？　と思い袖をまくってみる。と、そこに現れたのはくつきりと残った爪の跡だった。僅かに血が滲んでいる。もしか、と思ひ反対側の腕も見みると、やっぱり同じだった。

あの夢を見ているときにでも引っこ抜いたのだろうか、痛々しい傷跡だったが、不思議なことに、触ってみてもそれほど痛くはなかった。

僕は辛気臭い表情の自分を吹き飛ばすように、鏡の前で大きく深呼吸すると、キッチンで作業をしている深紅に『おはよう』の挨拶をしに行った。

キッチンに入ると彼女はすぐに僕の気配に気が付いて、挨拶をしながら振り返った。

「あつ、おはよー……っ！」

最後の一瞬、深紅の顔が痛みに歪んだのを見逃さなかった。彼女の身に何が起こったのかを探した。すぐに見つかった。足だ。足首に痛々しい包帯を巻いている。一体朝から何してんだこの人は、と思った瞬間。チクリと腕の傷が痛み出すのと同時に、頭の中で映像が再生される。

部屋の隅で膝を抱えて腕を引っ掻いている僕だ。

口を大きく開いて何かを叫んでいる。

それを見た瞬間、背筋が凍りつくのを感じた。様子のおかしい僕に気付いて、彼女が慌てて弁解する。

「ち、違うの、これは今朝階段から落ちちゃって……」

言ってから彼女はハッとなった。何が違うというのだ。それはやましいことがある人の典型的な言い訳じゃないか。今度は腕の傷が

ズキンと痛んで、次の映像が流れ始めた。

我を忘れて叫び続けている僕。

必死でなだめようとしている深紅の姿。それを僕は……。

苦痛に顔を歪める深紅。叫び続ける僕……。

気が付くと僕は両腕を抱え、小刻みに震えていた。僕の肩を掴んだ深紅が今にも泣きそうな顔で何かを言っている。僕は彼女に謝らなくてはならない。怪我を負わせた責任を取らなくてはいけない。彼女を見て口を開く。

（ごめん……）

くそっ！ 言葉にならない！

（ごめんね深紅……）

どうしたら良いんだ！ 彼女に僕はどうしたら！

「もういいよ……」

（えっ）

「平気だから……」

「もうそんなに謝らなくていいから……」

（通じた……のか？）

震えが止まったのを見て、彼女はゆっくり僕の腕を解いてから両手を取って言った。

「お散歩、行ってくれるよね」

四章 【絵本】

彼女が笑顔で『あとちょっとで出来上がるから、もう少し待ってね』と調理作業に戻ってしまったので、僕はそれ以上そこに居ることが出来ず居間に行き、スケッチブックになにかを書こうとしたが、結局書く言葉は見つからなかった。足が痛むはずなのに、ゆっくり、一枚一枚キュウリを刻む音がする。そんな彼女に僕は何か言わなくてはいけないのに、どうしても言葉が思い浮かばなかったのだ。

結局、自分の不甲斐なさにあきれて部屋に逃げ込んできてしまったのだ。

深紅は僕に突き飛ばされて足をひねった。痛かったはずだ。僕のことを嫌いになったはずだ。尚も叫び続ける僕を見て気持ち悪がったに違いない。僕なんかとピクニックに行ったらつまらないに決まってる。

（そうだ、断ろう……）

いつも一人で来るお気に入りの場所に、僕んかが足を踏み入れて良いわけなんかないんだ。

『ごめん やっぱり行かない』

僕がその言葉を見せたのは、彼女がカラフルなタッパーに手製のサンドイッチを詰め込み終えたときだった。

軽く手をすり合わせてパンの粉を払い落とすと、腕を組んだ。

「あのね、美月、私のことを気にしてるんなら……」

一瞬何かを考えた顔をしたかと思ったら、急ににこやかな顔になる。

「私はね、この折角作ったサンドイッチ、どーしてもあそこで食べたいの、美月が行かないなら一人で行くからね」

ピクリと僅かに反応した僕に向かって、彼女は続けて言った。

「足がどんなに痛くたって行くんだから」

「あーあ、転んじやったらやだなー、起き上がれるかしらー」

彼女の意図が分かった。無理にでも連れて行くつもりだろう。でも分かって欲しい、もう二度と傷つけたくなんかないんだ。

「だから、ね、連れてって」

人間は心がある分、他の生物と比べて厄介だ。例えば食事だ。生き物だったら腹が減っているときに目の前に餌を出されれば、喜んで飛びつくのが普通だろう。だが人間は自らの欲望よりも心を優先する生き物だ。僕は彼女とピクニックへ行きたかった。けれど心が邪魔をした。どんよりと重たい曇が空を覆い隠すように、僕の心が欲望を飲み込んでしまっていたのだ。

そんな厄介な心を綺麗に洗い流してくれるもの、それは人それぞれ違うはずだ。深紅にとつてのそれはコスモスに囲まれて緩やかに流れる小川であり、僕にとつてのそれは深紅自身だった。彼女の温かい笑顔を見れば、どんなに辛いことも忘れることが出来る。彼女の高いアルトの声を聞けば、どんなに悲しい気分もすぐに和らいでいく。

もう彼女の前では僕のちっぽけな意地など無意味だろう。さつき深紅が屈託の無い笑顔で『連れてって』と言ったとき、ごちゃごちゃ考えていたつまらない感情は消え去ってしまい、彼女の傍にいたい気持ち、それだけになってしまったのだ。

既に散歩用の服に着替えていた深紅が「外で待ってるね」と言うので、部屋に戻って急いで着替えてからスケッチブックを抱え、高揚する心を抑えつつ外へ出てみると。ぱんぱんに膨らんだトートバッグを左肩に抱えた深紅が、ピンク色のスクーターに乗って納屋から現れたのだ。

(……………?)

「よし、じゃー行こっかー」

べべべと音を鳴らしながら方向転換し、道路へ向かおうとする彼

女を追いかけて肩を掴んで静止させた。

「え、なあに？」

なあに？ じゃない。僕は言葉を雑に書くと、勢い良く彼女の前に突き出した。

『それはなんだ』

「ああこれ？ うちの学校、バイク通学OKだから」

『そうじゃなくて！』

「えー、なによー」

『連れてけとか 転ぶとかは何』

「あら、私、歩いてく、とは言っていないわよー？」

（騙された！）

僕はむっとなつて、深紅の前を歩き出すと。後ろで愉快に笑いながら「まってー」と聞こえたが、構わずにずんずん進んだ。

深紅は僕のことを少しだけ追い抜いてはスピードを落とし、また追い抜いてはスピードを落とすといった感じで付いてくる。緩やかな風を受けてなびく髪が、そのやわらかい髪質を強調している。遠くを見つめる彼女の横顔はとても綺麗だった。それを見れたこと、それだけで怒りを忘れるには充分だった。目的地にはすぐに到着した。

橋が見えると深紅は先に行ってスクーターを脇に停めると、川の入り口で僕を待っていた。近付くと彼女はニコつと手を差し出した。きた。

「はいっ、連れてって」

この笑顔は反則だ。彼女の希望を叶えてやるために、黙って肩を差し出した。それにしっかり掴まった深紅は、ゆっくり歩き出し僕と一緒に坂を下った。一人しか通れない幅なので僕が先を歩き、深紅が付いてくる形になった。良かった、足の具合は思ったより深刻ではないみたいだ。

昨日と同じ場所に辿り着くと、深紅がバッグからがさこそと折りたたまれたビニールを取り出してぶわつと広げた。いっきにひろが

つたビニールシートは黄色い下地に白いくまが描かれたとても可愛らしいデザインで、座るのが少し恥ずかしい気がした。手を貸してやり、二人でその上に腰を下ろすと、深紅は『ふう』と一息ついてからバッグに入っていたものを次々に並べていった。

黄色い半透明のタッパ―、赤い半透明のタッパ―、水筒、弁当箱、そして水筒。

（んっ？）

思わず二つの水筒を見比べてしまう。

「ああ、これ？」

両手に持つて、こっちはアイスでこっちはホット、と陽気に説明する。

「安心して、どっちも紅茶よ」

一瞬の沈黙の後、笑いが飛び交う。といってもまだ僕の方は無音だが……。

「さー、食べて食べてー」

パカッと蓋を取られた二つタッパ―には丁寧に耳を切り取られた長方形のサンドイッチが六個ずつ並べられていた。タマゴサンド、ハムとチーズのレタスサンド、キュウリの入ったシーチキンサンド、ポテトサラダサンド、本当にどれも美味そうだ。お弁当箱にはチキンナゲットと斜めにカットされたウインナー、プチトマトに大粒のサクランボが、それぞれぎっしり詰め込まれていた。

手を合わせておじぎをしてから、タマゴサンドの半分を口の中に放り込んだ。このチョイスは僕の定石である。むぐむぐと噛み砕いて飲み込む。美味い。少しコシヨウが多い気もするが、少し荒めにつぶされた半熟の玉子が良い味を出している。女の子の手作りって感じでコンビニよりも格別に美味い。もう半分を放り込む。大丈夫、僕にかぎってベタな展開はない。咽ないよう、ゆっくり噛み砕いてから飲み込んだ。

その様子を心配そうにじーっと見つめている彼女に、僕はスケッチブックに感想を書き込んでから、大げさに震わせて見せてやった。

『う・ま・い・ぞー！ー！』

途端に彼女の顔に花が咲き、「やったあ」と両手で女の子らしいガッツポーズをする。

「よく自分のお弁当に作るから味には自信はあったんだけど、お爺ちゃん以外の男の人に食べてもらうのは初めてだったの。よかったあ」

僕の反応に満足したのか、「アイステイーでいいよね」と言っ
て紙コップに注いで渡してくれた。それから自分の分も注いでサ
ンドイッチを食べ始める。

嬉しかった。嬉しすぎて少し震えた。深紅手製のサンドイッチも
そうだが、彼氏に作ったことがないという事実が、何よりも嬉しか
った。その後は、こんな彼女がいてくれたらな、とか、年下は対象
外なのかな、などと考えながら次々と深紅の作ったお弁当を平らげ
ていった。

間に何度も感想を書いては見せて彼女の喜ぶ顔を楽しんでいると、
こんなに楽しいひとときだというのに彼女と喋ることが出来ない自
分に、苛立ちを感じてしまっ
て少しへこみそうになったが、そうい
うのがすぐ顔に出てしまう僕のせいで彼女の笑顔を損なわせてしま
いたくなかったから、次があるか分からない二人きりのピクニック
に専念することにした。

最後のサクラノボを勢い良く口に投げ入れると、また言葉を書き
込んで見せてやる。彼女が読み始めたのを確認すると、僕は照れ隠
しのために種を川へ飛ばした。

『深紅』才色兼美』

動きが止まった深紅の顔が、いつも通り赤くなっていく。

「やう……あ、ありがと……」

思った通りの反応が見れて僕は満足だった。スケッチブックを置
いて、残ったアイステイーを飲み干すと、まだ深紅がもじもじして
こつちを見ているので、胸の鼓動が急激に早くなった。

自分の喉がごくりと音を立てたところで、ちらつと遠慮がちに僕

のことを見た深紅の茶色い瞳と目が合った。

(えっ……)

「あ、あのね、美月……」

(そんな、まさか……。だって深紅には彼氏が……)

慌てて、スケッチブックに手を伸ばすと、手まで『どつどつどつ』と脈打っていた。

「それ……」

(えっ、どれ？ これ？)

「ビが違っ……」

(ビガチガウ？)

何のことだかさっぱり分からなかった。深紅が指差している方向にはスケッチブック、書かれている文字は……あつ。

「才色兼備のビは、美術の美じゃなくて、備蓄の備よ」

僕は真っ白になってから、真っ赤になった。

たらふく笑った彼女は、僕ががつくりしているのを見て悪いと思っただのか、二重に重ねた紙コップに温かい紅茶を注いで手渡してくれた。それに口をつけると、紅茶の香ばしい香りとともに広がる温かな甘さが心地よくて、沈んでいた心がぽつと浮上した。

すると、今彼女に伝えなくちゃいけない言葉が思い浮かんだのでスケッチブックに書こうとすると、また『ぶっ』と軽く吹きだすので、悔しくなった僕は書く言葉を変えた。

『これは美しすぎる 深紅用に作られた言葉なの！』

「ふふっ、ありがとっ」

期待した効果はあまり得られなかった。それから深紅は「でも」と言っ続けた。

「美月のそういうところ、私好きよ」

頭の中で勝手にエコー再生される。

(えっ……えええええ！)

「とーってもやさしいよね、美月って。きっと大人になったら良い男になるわよー」

（……はあ。それってつまり、まだ僕は子供としか見られていないってこと、だよなあ……。確かに、このくらいの歳で三つの差っていったらかなり大きく感じるけど……）

とても複雑な言葉をくれた彼女に、飲み終えて空になった紙コップを渡すと、おかわりを聞かれたので首を横に振った。それを確認すると彼女は片付に入り、最後の水筒をバッグにしまってから「さてと」と言っ僕を見た。

「折角だから少し歩いてみない？」

『足は大丈夫なの？』

「だいじょーぶよ、それに歩かないとピクニックにならないじゃないーい」

『そうなの？』

「そうなの！ 歩くの！ ほら早く立つ！」

やれやれという顔を作ってから立ち上がり、お姫様を立たせてあげた。「どうせ戻るときにここを通るから」と言うので、荷物はそのままにして歩くことにした。

肩を貸そうとすると「こっちが良い」と言っまた腕に巻きついてきた。僕の方も今度は振り解こうとはしない。半ば期待していたからだ。いつから、と聞かれれば、今朝彼女が僕に言った『連れてって』の言葉を聞いた時点からだ。

僕らはぴったりくっついて、川べりの比較的平らな芝生の道を一歩一歩確かめながら歩いた。彼女の足が気になる。本当に大丈夫なのだろうか。

向けられた視線を感じて、深紅が口を開く。

「足の怪我はほんと、大したこと無いの、一人で全然歩けるくらいよ」

そう言っ僕の表情を確認してから、静かに前を向き直ってひと息ついた。それから「答えなくていいから聞いてくれる？」という

前置きに僕がこくりと頷くと、彼女はおもむろに話し出した。

「私ね、病気なの」

一瞬立ち止まってしまったが、深紅は構わず歩き続けて巻きついた腕に催促した。僕は慌てて彼女のリズムに合わせる。

「徐々に筋肉が衰えていく病気。私の場合、両脚がそれ……。人によって個人差があるけど、大体の場合五、六年で動かなくなっちゃうんだって。リハビリで進行を遅らせることはできるらしいけど、治すことは出来ないそうよ」

（そんな……そんなことって……）

深紅の口から発せられた衝撃の告白は、僕から言葉を奪っていった。たとえ今喋ることができたとしても僕は黙っていることしか出来なかったはずだ。

掛けてやる言葉が見つからない。

十五年間しか生きていない僕には、この状況でどんなことを言うてあげるべきなのか、どうしても思い浮かばなかった。

「でもねー、別にいいの、そのおかげで今の私があるんだから。諦めたわけじゃないよ。歩けるうちは頑張って歩く、歩けなくなったら……そのときの私に出来ることを精一杯するつもり。だから大丈夫」

（……。）

今までの不可解な点を思い返していた。婆ちゃんと寄り添ってトイレに行く姿、たまにふらふらと歩く姿、力を抜いたような座り方、近場の散歩で疲れたと言う彼女、その全ての点が繋がり、ひとつの悲しい線になった。

途端にふたつの考えが生まれる。深紅はあとのくらいで歩けなくなってしまうのか、そして、彼女に何かしてあげられることは無いのだろうか、と……。

重く苦しい沈黙を破ったのは、透き通ったいつもの明るい声だった。

「あ、見て見て！」

深紅の指差す方向には、全身を覆う白い羽がとても美しく、愛らしい表情をした二羽のアヒルが、緩やかな川の流れに身をまかせ、ぶかぶかと浮かんでいた。

「可愛いねー」

確かに可愛い。彼らは思いついたように、黄色いくちばしで自分の背中をせわしなくつついたり、川の中に首を突っ込んで餌を探したりしていた。

僕らはしばらくその光景を眺めていた。

「昔さ、『みにくいアヒルの子』って読んだでしょー。あれさ、みにくいアヒルは最後白鳥になって飛んでいくじゃない」

こくりと頷く。

「昔その子をいじめてたアヒル達は、飛んで行くその子を見てどんな気持ちになったのかなー、ほら、アヒルって飛べないじゃない」
考えてみる。皆でいじめてた奴は実は自分達より優れた鳥で、自分達に出来ないことをする。羨ましいだろうか、悔しいだろうか……。いや、待てよ。アヒルにとっては飛べないことが当たり前なのだから『あいつは違う種類の鳥だったのか』ってだけかも。そもそもアヒルは飛びたいと思うのだろうか……。うーむ。

「私はね、羨ましいと思う。翼を持って生まれたんだから。折角なら飛びたいじゃない」

なるほど。飛ぶための翼を持って生まれたら飛んでみたいと思うのは当然だ。飾りの翼なんて生物にとっては足かせにしかない。そうなるをやっぱり自分達より劣っている奴が飛んだら羨ましいに決まってる。そして思うはずだ。

『あいつが飛べるなら自分も』と。

「ねっ？」

うんうんと頷いている僕を見て満足したようだ。それから僕らはしばらくの間アヒルを眺めた。

（なんだかこいつらって間の抜けた生き物だよな。そもそもどうして飛べないのに翼を持っているんだ？ かといって歩きは遅いし、

すぐバレる色してるし、鳴き声はうるさいし……）

そう考えていると、隣でアヒルを見つめる深紅の表情が少しだけ陰っているのに気が付いた。たぶん、普通に見たら気付かない程度の変化だ。きっと僕が深紅のことを好きだから気付けたのだと思う（もしかして、深紅は飛べないアヒルと歩けない自分を被せているんじゃないだろうか……？　だとしたら……）

さっきは歩けなくても大丈夫と言っていたが、アヒルの話をしているときは、はっきりと『羨ましい』と言っていた。そう考えると、大丈夫という台詞が、単なる強がりであるような気がして、急に悲しい気持ちになってしまった。

「帰ろっか」

そんな僕の考えとは裏腹に、透き通ったいつもの明るい声が聞こえた。振り向くと、深紅は両手を後ろに組んで、屈託の無い笑顔を浮かべている。さっき感じた陰りは跡形も無く消え去っていた。

深紅のお気に入りの場所に帰ると、さっそく僕は置いてあるスケッチブックを手にとって、さっき伝えそこなった言葉に、もう一行付け足して彼女に見せた。

『今日は楽しかった　ありがとう　オレも深紅と一緒に頑張って歩くよ』

それを見た深紅の笑顔は本当に眩しくて、僕には夏の西日よりも輝いて見えた。

夜、自室のベッドで横になりながら深紅のことを考えていた。

彼女は言っていた。

『出来ることを精一杯する』

彼女は自分の置かれている状況を受け入れて、そして臆することなく自らの足で過酷な未来を乗り越えようとしている。

彼女は強い。僕はどうだ、母が死んでから僕はいったい何をした。ちゃんと事実と向き合っているだろうか。目を逸らしていないだろ

うか。

病院では毎日母の夢に怯え、母のを受け入れることができずに先生達に迷惑をかけていた。病院から連れ出されてからは、楽しいことに甘えて辛いことから逃れようとしていた。確かに前よりもずいぶん回復したと自分でも思う。でもこのままじゃ駄目だ。

彼女と楽しい日々を過ごすことによって、辛い過去を忘れるのは簡単だ。でもそれだけじゃ自分の力で前に進んだことにはならない。『深紅と一緒に頑張って歩くよ』

僕はそう言った。これから自分と向き合って。真実を受け入れて。それを乗り越えなくてはいけない。そうしないと彼女と一緒に歩いたことにはならないからだ。

今朝みたいに、深紅を傷つけることに怯えるのはもうごめんだ。彼女ときちんと向き合えるようになりたい。それから……。

その日から、皆の前では極力普通に振舞い、夜になって部屋に戻ってからは、自ら母のことを考えることにした。またああならないように、ほんの少しずつではあるが、心の傷と向き合うことで先に進んで行ける気がしたのだ。

相変わらずそういうときに出てくる母の姿は、楽しい思い出に映し出される笑顔の母か、最後の無残な母の姿かのどちらかだった。後者の場合は、込み上げてくるあの衝動を必死に抑えながら、息を噛み殺して震えるだけで、叫んでしまうことは無くなった。もう深紅を傷つけるのだけは絶対したくない、という強い意思がそうさせてくれたのだと思う。

不意に頭上で気配を感じた。ギクっとなって目をやるとカーテンがもそもそ動いている。身を起こして恐る恐る手を伸ばしてみると『なーう』という猫の鳴き声が聞こえた。そのままカーテンを引いてみると、尻尾の無い黒猫がベッドから床へと飛び跳ねていった。昨日、勝手に入ってきた猫であることは間違いない。少し驚きはしたものの、僕自身、猫は大好きなので追い出すことはせずにそのまま観察した。

そいつは我が物顔で部屋の中を闊歩し始めたかと思うと、再びベツドの上に飛び上がり、首を後ろ足で掻き始めた。ここの飼猫なのだろうか、あまりにも無用心で愛嬌のある仕草は見るものを和ませてくれる。そつと手を伸ばして痒そうな首を掻いてやると目を細めて僕に首を委ねてきた。

昨日巻いていた鈴付きの首輪は付けていなかった……。

そうして二週間が過ぎていった。まだまだ季節は夏真っ盛りのはずなのだが、ここは山間に位置しているためか比較的涼しく感じる。ニュースで連日の猛暑日だと報じられている東京の風景は、どこか違う世界の映像に感じられた。

あれから深紅とは特別なことは起きていない。ここへ来てからの二日間は僕のために時間を割いてくれたが、本来高校三年生の夏休みは特別なものはずだ、友達や彼氏との時間や、受験勉強、それに彼女の場合リハビリもある。きつと彼女はやりたいことが山ほどあるに違いない。

僕が家にいるときつと気にしてしまうはずなので、弱っていた身体を取り戻すと言って、毎日爺ちゃん達の手伝いをするに決めた。今の時期は桃を枝からそつと収穫し、その日のうちに箱に詰めて出荷したり、九月の終わりに収穫を迎える巨峰の枝切りを毎日こまめにやっている。腰を曲げたり伸ばしたりを延々と繰り返すので、帰る頃には必ず腰が悲鳴を上げている。それを氣遣つてか、夕食の後のデザートに桃が出るがあった。収穫したばかりの桃は自分が収穫に携わったことも相まって、本当に甘くて美味しかった。爺ちゃん達も働き詰めではなく週に一日は休む。その日は深紅が貸してくれた文庫本を読みながら部屋で一日中横になっていたり、爺ちゃんと将棋を指して遊んだりした。

何度か深紅が作業に付いてきて軽い作業を手伝い、四人でお弁当を食べたりもしたが、結局この二週間、二人きりで出掛けることは

一度も無かった。これでいい。これで自分の足で歩ける。そう思っていた……。

八月も後半に差し掛かった頃、この家の異変に気が付いた。

世間はお盆だというのに、この家ではそういった素振りをまったくしようとしないのだ。僕は疑問に思つて夕食を終えた後に爺ちゃんに聞いてみた。すると爺ちゃんはギョツとした顔を僕に向けたのだ。その瞬間に僕は分かつてしまった。再び言葉を見せる。

『じいちゃん オレならもう大丈夫 皆で母さんを迎えてやろう』

しばらく悩んだ末に爺ちゃんは重い口を開いた。

「美月、お前え、もう大丈夫なのか」

しっかりと頷く。

「ほうか……付いて来い」

そういうと爺ちゃんと婆ちゃんの寝室に案内された。初めて訪れるそこは、微かに線香の匂いがして、風に揺られる風鈴の音が響いていた。たぶん僕の心境がそうさせたのだろう、夏もまだ盛りだというのにじめじめと湿っぽい感じがした。

漆塗りの立派な箆笥の横に爺ちゃんが僕をここへ連れてきた理由があった。金箔によって煌びやかに装飾された黒い仏壇。中に目をやるといくつかの立派な位牌が立てられていた。中心に立てられている比較的新しいのがきつと母のものなのだろうと感じた。爺ちゃんを一瞥すると、深く頷いたので、置いてある線香を一本焚き、鐘を鳴らしてから静かに手を合わせ、心の中で母にお別れを告げた。

こうすることで何かが変わるのか、正直なところ僕にはよく分かなかった。母は今安らかに眠っているのだろうか、僕と同じように苦しんではいないだろうか、その考えは仏壇に手を合わせても消え失せることはなかった。

「それとな」

襖の奥から一つのダンボールを取り出すと僕に手渡した。

「お前えの心の準備ができたら渡そうと思ってたやつだ」

僕はそれを一度床に置き、軽く閉じられているふたを開けて中を

覗く。どくと大きく脈打つのが分かった。そこに現れたのは黒くて硬い布と、その上に置かれた見覚えのある女性用の長財布だった。すぐにそれがあの瞬間に僕が持っていた母の財布で、下のは僕のトレンチだと分かった。更にその下に何か入っている。

(まずい……)

僕は握り締めたこぶしを高鳴っている胸に当て、深紅の顔を思い浮かべた。彼女の顔、彼女の声、必死に精神を沈めると、平静を装いスケッチブックに書き込んだ。

『ありがとう 部屋に持っていていい？』

「お前んだ、好きにしろ」

喋れなくて良かった。きっと今の僕では声が震えてしまうだろう。額に浮かんだ汗を見られないよう、うつむいた状態でゆっくりと立ち上がり、ダンボールを抱えて部屋に戻る。

部屋に着いて、気持ちを充分に落ち着かせてから、もう一度中を確認する。

母の財布……。中身はあの日のままだ。まだ微かに母の匂いがする。母がいつも付けていたバラの香りの香水を思い出す。

トレンチコートを取り出すと、その下にはトレーナーとジーンズ。これらはあの日の僕の服装だ。病院から渡されたのだろうか、だとすれば何故……。よく分からないままに服を取り出す。すると一番下に薄汚れたワークブーツと、見慣れぬ麻袋が半分に折りたたまれて入っていた。中に入れられた物によって、いびつな形に歪んでいる。明らかにいくつかの物が詰め込まれて出来た形だと分かる。

ダンボールから取り出して袋を広げると、微かに鈴の音が鳴った。

何度も感じたあの感覚が甦る。

なんなんだこの身体は。なんで鈴の音ひとつでこんなに心臓が破裂しそうになるんだ。もう嫌だ、ちっとも治ってくれないじゃない

か。僕にどうしろって言うんだ。

（息が詰まる……。苦しい……）

必死に抑え込もうとしていると、ノックの音と共に深紅の声が聞こえた。

「美月ー、入るわよー？」

扉を開ける音。

「美月？ ……ちょっと！」

慌てて駆け寄って来る深紅の方へ顔を上げると、同時に瞳に溜まっていた涙が零れ落ちた。そうなたら止まらない。一度頬にできた水路を伝って次々に膝に落ちて行く。

深紅は僕が持っている麻袋を見てはつとなり、僕から袋を奪い取って自分の後ろに置いた。そうするとまた鈴の音が鳴り、体が反応してしまう。

すると彼女は、僕の肩を抱きかかえ、優しく頭を撫でてくれた。

「大丈夫よ……美月……」

（まただ……）

そうささやいているときの彼女は、眉を少し下げて微笑んでいた。とても美しく、とても優しい表情に、僕は全てが許される気がした。その顔を見ていると、さつきとは違う苦しみが胸を締め付ける。（駄目だ、深紅……そうされると、僕は自分の足で歩けなくなってしま……）

深紅には頼らないと決めていたのに、また助けられてしまったことに悔しさを感じて顔を背けてしまう。

「どうして。どうして一人で考えちゃうのよ……」

（……そんなの決まってる。深紅と一緒に歩きたいからだ。）

「皆に、弱いところを見られるのが怖い？」

（そうじゃない、一人で立ち上がらなくちゃいけないんだ……）

「そうやって……」

相変わらず僕は下を向いたままだが、普段とは違うやや低めのトーンから、深紅が怒っているのが分かる。

「一人で解決してなんになるのよ、私たちはどうして一緒にいるの？」

ぴくりとも動かない僕に嫌気が差したのだろう、彼女は静かにため息をついた。

「私に相談するの、そんなに嫌？」

（嫌じゃない……けど……）

僕は考えた末にゆっくりと首を横に振った。

「私、美月に頼って欲しいの。辛いときは辛いって言って欲しい。悲しいときは悲しいって言って欲しい……。一緒に歩くって言ったじゃない。それってそういうことじゃないの？」

スケッチブックに手を伸ばす。

『相談するのが嫌なんじゃない』

『また怪我させてしまいかもしれないし』

『とにかく今は自分の力でなんとかしたい』

それを読み終えた彼女は少し目を閉じてから「わかった」と言っ
て立ち上がる。

「でも、この袋だけは私が預かる。見るときは私のいるところで見ること。それだけは約束して、お願い」

そうか、深紅はこの中に何が入っているのか知っているんだ。僕は直感的にこの状態を克服するには麻袋の中身と対面しなくてはいけないと感じたが、彼女の凜とした表情に、僕は逆らうことは出来なかった。

翌日の朝、目が覚めて居間へ行き皆と朝食をとっていると、昨日までの深紅とは明らかに態度が違っていた。挨拶はしてくれたものの、いつもなら今日の予定や、今読んでいる小説の話などを喋って聞かせてくれるのに、今日は何も話してくれない。朝食を食べ終わると「じゃあ、出かけてくるから」と言っであっさり出て行ってしまった。

昨日の事を怒っているのだろうか。昨日僕が頼ることを拒否したからか、それとも、あまりにも情けない僕に嫌気が差したのか、も

う何がなんだか分からなくなってきた。今日にでも深紅の部屋で麻袋の中を見ようと思う。でもまた我を忘れて深紅のことを傷つけてしまったら……。

農作業している間もぼやぼや考えていたせいで、せっかく美味しくずに熟した桃を落として駄目にしてしまった。もちろんそのくらのことで爺ちゃんは怒ったりはしないが、自分自身の罪悪感が許してくれず、ひどく落ち込んでしまった。そんな僕のせいでその日の夕食も会話は殆ど無かった。

深紅が足早に部屋に戻ってしまったあと、爺ちゃんが二人の仲を気遣ってなのか、こんなことを言い出した。

「美月、深紅のこと、もっと信頼してやれ。お前えとあいつはよく似てる……。一番お前えのことが分かるのはあいつだ。それに、一番あいつのことを分かってやれるのはお前えのはずだ」

部屋に戻って考える。『お前とあの子はよく似ている』それは二人とも両親が居ないからなのか、それとも種類に違いはあれど、二人とも立ち向かわなくてはならないものがあるからなのか……。

こういうときの一日は本当に長い。深紅のことを考えては、時計を見て肩を落とす。これを何度繰り返したことが。

今、僕は深紅の部屋のドアの前にいる。手に持ったスケッチブックには既に必要とされる言葉を書き込んでおいた。後はこのドアにノックをするだけ。

残念なことに、深紅が袋を預かると言ったあの日から既に一週間が経っていた。まったく、自分の情けなさにも呆れてしまう。あれからうじうじ考えまくって、ようやく決心がついたのは昨日の昼のことだ。では何故その日のうちにこのドアを叩かなかったかというと、深紅が友達の家泊まりに行ってしまったからだ。ちなみに彼氏の線は無い。女の子二人とどちらかの母親らしき人が車で深紅のことを迎えに来ていたからだ。深紅の病氣のことを当然分かったのこと

だと思う。

そして今日の夜に帰ってきた。夕食は済ませたらしく、風呂に入っただけで部屋に行ってしまった。僕への態度は相変わらずのままで。今日最後に彼女が僕に喋ったことといえば、「お風呂の水抜いておいてね」だ、「おやすみ」ではない。そろそろ僕も少し腹が立ってきていた。この一週間、僕がどんな思いで過ごしていたのかを少しは考えて欲しい。確かに自分でなんとかしたい、とは言ったが今僕を悩ませているのは、どちらかというとき深紅の態度だ。そこまで冷たくあしらわなくなっていていいじゃないか。

意を決してドアを二回ノックすると「はい、開けていいよー」と聞こえたのでゆっくりとドアノブに手をかけた。

実は深紅の部屋を訪れたのは初めてではない。最初に中に足を踏み入れたのは生活が始まって三日か四日経った頃だった。夕食中に何でもない会話をしていたら、スケッチブックを使い切ってしまった、それに気付いた深紅が僕を部屋に招き入れてくれたのだ。そして勉強机の一番下から新品のスケッチブックを取り出して僕に渡してくれた。使い切ったスケッチブックは何に使うのかよく分からないけど、彼女が欲しいと言った。スケッチブックの中身はミミズが這ったような汚い字なので渡すのは嫌だけど、貰った身分なので仕方なく返却した。

どうしてこんなにスケッチブックを持っているのか疑問に思い、貰ったばかりのまっさらなスケッチブックに書き込んで聞いてみると、絵本を書いているからだ、少し恥しいながら彼女は答えた。見せてくれと頼んだのだけれど、「もう少しうまくなったらね」と軽くあしらわれてしまった。まったく不公平な話だ。

それから度々、使い切ったスケッチブックを新品と交換するために、深紅の部屋を訪れることがあった。だけど、この一週間はほとんど会話をしなかったせいもあって、ここへ来る機会はなかった。

深紅の部屋は、およそ彼女の可愛らしさからは想像できないくらいさっぱりしていた。僕の部屋と同じフローリングの床に、勉強机

と小さな布団が掛かったセミダブルのベッド。中央に置いてある折りたたみ式のガラステーブルには、いつも化粧ポーチと鏡だけがちんまりと置いてあった。壁に収納されたクローゼットがあるためか、深紅の部屋はとても広く見える。そして、少しだけ寂しくも感じた。きつと女の子の部屋には、もっとそれらしく彩る物があるはずだからという、男の勝手な先入観がそう感じさせたのかもしれない。それっぽい物と言えば机の片隅に置かれた黄色くてまあいいヒヨコの人形だけだった。

扉を引くと、正面の勉強机に座り、体をねじってこちらを見ている深紅と目が合った。彼女は『あっ』となった後、机に手について立ち上がり、僕と向かい合った。

「どうしたの？」

無表情が胸に痛い。用意してきたスケッチブックを見せてやる。

いつもより丁寧に書かれた言葉。

『袋の中 見せて欲しい』

「ふうん、やつと来たのね」

紙芝居みたいにページをめくる。

『遅くなってごめん』

「どうしてあなたが謝るのよ」

少し胸が軋む。『あなた』ときたか、でも負けるわけにはいかない。次に見せるページを確認してから、書くのに苦労した長文を広げた。ところどころ間違えてしまって、言葉の間に塗りつぶされた四角い記号が挟まっている。

『あれからよく考えてみた。自分の心と向き合うのは大切だけど、俺は一人じゃない。深紅がいる。爺ちゃんや婆ちゃんだっている。それから、深紅にはやっぱり俺のことをしっかり見て欲しい。その代わり、深紅がこれから病気に立ち向かうときに、辛かったり、悲しかったりしたら、隠さないで見せて欲しい。そうやって一緒に歩

いて行きたい』

読んでいる彼女のことを固唾を吞んで待っていると。やがて、彼女の視線が僕の顔に戻る。僕の知らない表情。怒っているのか、悲しんでいるのか、喜んでいるのか。ただ、少しだけ、その茶色い瞳は湿っているように見えた。

「私……ごめんなさい……」

驚いたことに、深紅の瞳が一瞬揺れたかと思うと、ぽた、ぽた、と二つの雫が頬を伝って床に落ちた。

二人の間に静寂が訪れる。窓の外から吹き込む風に混じって、微かに鈴虫の鳴き声が聞こえた気がした。どうして泣いているのか、その理由は僕には分からないが、次々に流れ落ちる涙を必死に拭う彼女の姿は、寂しそうで、とても弱々しく見えた。

しばらく経ってから、机の引き出しから例の麻袋を取り出し、赤く腫らした目で真っ直ぐ僕を見つめる。

「それじゃあ、これ、返すね……」

両手で差し出された袋を受け取ると、僕のことを待っていたかのようにあの音が鳴る。本来、その美しい音色で人の耳を喜ばせたり、注意を引くために奏でられるであろうその音色は、僕を壊すための引き金、もしくは心の奥底にある重厚な扉を開けるための鍵でしかなかった。

耳の中に水が入ってしまったときののように音が遠くなってゆく。ただひとつ、心臓が脈打つ音だけがハッキリと、いつまでも鳴り響いていた。

世界が震えだした瞬間、僕の視界が固定され、世界は深紅だけになった。いつの間にか深紅が両手で顔を押さえてくれている。

「美月、大丈夫、ゆっくりでいいから」

彼女を見つめたまま三つほど深い呼吸をして、頷く。

麻袋の中に手を入れ、指先に当たったものを慎重に取り出す。も

う検討はついている。この中に入っているのは全てあの日僕が身につけていたもの。

財布、時計、取り出した物を彼女に渡して次に移る。携帯電話、そしてキーホルダーが付いた家の鍵……。覚悟をしてから対面すれば、どうってことはない。僕は茶色い猫をじっと見つめた。母の最後の姿が目には浮かぶ。何度も僕を苦しめてきたあの日の映像。大丈夫、今僕は一人じゃない、目の前には深紅がいる。どうってことはない。ただ涙が出るだけだ。

「美月……」

震える声で僕の名前を呼んだ深紅は、いつの間にかまた涙を流している。僕より三つも年上のくせに、本当に泣き虫だ。僕よりも涙を流しているじゃないか。

（ありがとう、深紅）

それから目を閉じて、あの日の母にお別れを言った。

（もう僕は平気だよ。さようなら、母さん。長い間引き止めてごめんね。）

ゆっくり目を開けて、深紅に頷いてみせる。彼女は笑顔で頷き返してくれた。

「頑張ったね、美月」

二人の笑顔の間を一陣の風が通り抜けた気がした。その瞬間左手の力が抜け、麻袋が手からこぼれ落ちた。床に着地した麻袋から不思議な音が聞こえた。

『チリン』

無意識に視線は右手に移る。茶色い猫と目が合う。

（……え？）

背筋が凍りついた。得体の知れない恐怖が徐々に僕を飲み込んでくる。体が勝手に動き始めて、目に映る映像だけがゆっくり動いてゆく。床に落ちた麻袋が近づいてきて、僕の手が荒々しく中をまさぐる。ぴたっと手の動きが止まり、掴んだ物をゆっくり引き出して握っている手を開く。

キーホルダーが付いた家の鍵。笑顔で僕を見つめているは鈴付きの首輪を巻いた黒い猫。

（どういうことだ、これは……これはきつと母のだ……。それは分かる。）

全身の肌が針で刺されたようにチクチクする。

「みつ……き……？」

（あの日、無残な亡骸の傍らで見つけた母の鍵、ただそれだけのはずだ。僕をあの時間に引き戻す鈴が付いたキーホルダー、それだけのはずだろ。なんで、なんでこんなに胸がざわつくんだ。さっきお別れしたはずだろ？ たかだかお揃いのキー……ホルダー……で……）

あることに気が付いた。多分、初めから分かって知らないふりをしていた。これはお揃いのキーホルダー。頭の中に再び映るあの瞬間の映像。そこから逆再生されていく。

黒い猫のキーホルダー。怯える女性。破裂したような血液。

（やめろ。もう分かった。見たくない。やめろ。）

「……よつと！ みつ……どう………の？」

どんどん時間を遡っていく映像の外側で微かに深紅の声がかたまる。だが逆再生は止まってくれない。

歌舞伎町のネオン街。声を掛ける人、掛けられる人。電車の中。乗ってくる人、降りていく人。茶色い猫のキーホルダー。

まだ逆再生は止まらない。着替えている僕。コンビニの弁当。布団に包まっている僕。朝から夜になる。

（やめてくれ！ 頼む！ あああああ！）

カチリと音がして、映像は止まる。

（……………）

気付いてしまった。体が鈴の音を嫌がる本当の理由。声を出すことが出来ない理由。

母が、死ぬ前日、くれようとした、お揃いの、キーホルダー。それを僕はどうしたか。あのときどんな言葉を交わしたか。母は

なんて言った？ 僕はなんて言った？ 震えが止まらない。

（嫌だ……僕は……嫌だ、怖い……助けて……深紅……）

深紅が居た方向に助けを求める。たぶん、きっと僕は情けない顔をしている。酷く怯えているのが自分でもよく分かる。できればこんな顔見せたくないけど、もう限界だ。このままではいけない。頭がおかしくなる前に、深紅……。

身体に軽い衝撃が走る。一瞬視界が大きく揺れた。さっきまで深紅が居た場所。そこにはただ壁を向いた机と椅子が見えるだけ。視界の隅に動く物が見えた。微かに桜の香りがする。深紅だ……、深紅の頭が僕の肩にある。深紅の身体がここにある。急に身体に体温が戻ってきた。二人分の体温がとても暖かい。

どうしよう深紅……。僕、母さんを殺しちゃったかもしれない……。

僕は小さな深紅の背中に手を回し、更に近くへと抱き寄せた。

さっきから泣いてばかりなのに、溢れ出る涙は枯れる気配がまったく感じられない。けどもう、止まらなくなっちゃった。ずっと深紅とこうしていられば……後はもう何だっていい。これ以上考えたくない。

五章 【克服】

あれから数日。いつの間にかカレンダーの写真が紅葉した山の風景に変わっていた。

うまく食事が喉を通らない。部屋の外へ出る気がしない。あの頃と同じだ……。『逆戻り』そう考えたくはないが、どう考えてもやっぱり同じだった。

ひとつだけ違うところ。話しかけてくれる人も、部屋に食事を運んでくれる人も、悲しくて辛いときに助けてくれるのも、全部深紅だった。

夏休みが終わってから、彼女は一度だけ学校に行った。僕の身を案じてのことだろう。次の日から一日中僕の面倒を見てくれた。もちろん爺ちゃんと婆ちゃんは反対したと思う。何もわざわざ深紅が学校を休まなくても、爺ちゃんに仕事を任せて、婆ちゃんが傍にいてくれれば済むのだから。けれど彼女はこうして僕の傍にいる。なんと云って爺ちゃん達を説得したのだろうか。

ちなみに、僕の傍、といっても彼女は自分の部屋で絵本を描いたり、文庫本を読んだりしているだけ。

何故彼女がそんなふうにいるかというと、全ては僕のわがままのせいだ。毎日付きっ切りで面倒を見てくれる彼女に、僕からそう頼んだからだ。

『できれば 家の中で好きに過ごしていて欲しい どうしようもないときは きちんと言うから 大丈夫 前みたいなのは絶対にしない』

それを見た深紅は、散々僕に注意を促してから、しゅしゅと自分の部屋に帰っていった。

ずっと自分の部屋で考えて、駄目になりそうになって、深紅の部屋の戸を叩く。それが今の僕の生活。

「お母様が亡くなったのは、美月のせいなんかじゃない。あれは事

故だったのよ」

僕が悩んでいることを打ち明けた夜、彼女は知っていることを全て教えてくれた。

話によると、母はたまに三軒隣のビルの屋上でタバコを吸っているとのことだった。客の前でタバコを吸わないことにしている母は、いつもなら店の裏で吸うのだけど、嫌なことがあったときや、憂鬱な気分ときは、きまってそのビルまでわざわざ足を伸ばしてタバコを吸いに行くらしい。

その日もタバコ休憩の時間にそこへ行った。いつものように柵に寄りかかると、運悪く腐っていた柵の根元が折れ、体勢を崩したところ、雪に足をとられ、落ちた。警察から説明されたのだから間違いない。ということだった。

それは分かった。直接の原因は僕との口論ではない事。でも、嫌なことがあったからその場所へ行っただけだ。その原因はきつと僕にあるんじゃないか。そして、母は僕のことを恨んでいるのではないだろうか……。

いつもそうだった。そんなことを考えていると、外でたくさん鈴虫が耳をつんざくような悲鳴をあげる。そうしてまた深紅の部屋の戸を叩く。延々とその繰り返し。

無情にもどんどん秋が深まっていき、水分を含んだ冷たい風が吹き始めた長野は、早くも冬の訪れを感じさせていた。部屋に届けられる食事に収穫したばかりのみずみずしい巨峰が添えられているようになった頃、その日はやってきた。

いつものように半分以上残してしまった食事を深紅が下げに来たときだった。「少し良いかな」といってテーブルを挟んで僕の正面に腰を下ろす。相変わらずべたん座る彼女を見ると少し寂しい気持ちになる。

「あのね、美月」

テーブルに両ひじをつき、指を組み合わせ、その上に顎をのせた彼女は、僕の残した食事をじっと見つめながら話を続けた。きつと怒られるのだと思った。

「私のお母さん、私と喧嘩して出て行っちゃったの」

（えっ……？）

「お母さん、好きな人が出来たつて。その人が九州に行くことになったから、その人と三人で暮らさないかって言われたわ……。会ったこともない人とよ？ 私は絶対に嫌だった。お母さんやお父さん、それにお爺ちゃん達とずっと一緒に暮らしてきた思い出いっぱいこの家を、お母さんの都合で離れるのはどうしても嫌だったのよ」

目線を落としたまま、彼女は深いため息をついた。

「私が言うことを聞かないから、いつも口喧嘩ばかりしてた。いつかね……、言っちゃったの。『好きな男のことで私を振り回すのは止めてよ。そんなに男が大事なら勝手に一人で出ていってよ。お母さんなんて大っ嫌い』つて」

深紅は淡々とした口調で母への暴言を話していたが、きつと実際は大声で怒鳴ったに違いない。けれど、僕には彼女の口が母を罵倒している場面が、どうしても想像できなかった。

「お母さんがいなくなったのは、それから三日後だった……。お母さんが出て行ったのはきつと私のせいだ、もう私のことなんて好きじゃないんだつて、しばらくの間ずっとそう考えていたわ……」

（それじゃあ……、それじゃあ僕と同じじゃないか……）

「でも一ヶ月もしない間にお母さんから電話がきたの。最初になんて言ったと思う？ お母さんはね、私に『ごめんなさい』つて言ってた。それから『あなたのことが大好きよ』つて、そう言うの」

（……………）

「だからね。だから……。きつと美月のお母様も、美月のことが大好きだと思っ。母親つて、そういうものなんだと思っ。どんなことをされたつて、子供のことを恨んだりする母親なんていないのよ」

深紅の話を聞き終えると。必然と僕と母が口論しているあの場面

が思い浮かんだ。でもそれだけじゃなかった。次々に胸から浮上してくる僕と母のあらゆる場面。

保育園児のとき、母の迎えが遅くてスネてしまい、家に帰りたくないと言つてきかなかった僕に、母はオロオロと困った顔で何度も謝ってくれた。ようやく帰ることを了承した僕は帰り道もずっと黙ったままで、母さんはそんな僕を喜ばせようと、臨時に商店街の総菜屋さんで大好きなコロッケを買ってくれたな。ようやく笑顔になった僕に、母はとびきりの笑顔を見せてくれた。

小学生のとき、万引きをしてしまった僕は、母に何度も頬を叩かれて泣いていた。でも、叩いた母の方が僕よりもぼろぼろに泣いていた。真っ赤に膨れ上がった頬よりも、ずっと胸の方が痛かった。あのときの母の顔、たぶん一生忘れないと思う。

去年、全国一斉学力テストの結果が、国語だけまぐれで学年一番だったとき、母は本当に喜んでくれて、結果の書かれた紙を店に飾ってお客さんに毎日自慢していた。恥ずかしいから止めるって言つた僕に、母は『これは母さんの宝物なの。どうしようが母さんの勝手でしょ』と言つてその紙を胸に抱きしめ、満面の笑みを浮かべていた。

母は、母は生まれてから何度も、本当に何度も僕に言ってくれた。
『大好きよ』って。

僕は馬鹿だ。本当に大馬鹿者だ。今まで目を背けていたんだ。母の愛に……。あんなに深い愛を与えてもらいながら、僕はなにひとつ返していない……。

（ごめんね母さん。僕のことを恨んでるだなんて疑つて本当にごめん。僕も大好きだよ。もう会えないのは辛いけど、これからは前を見て一生懸命生きていくよ。母さんの子供に生まれて本当によかった。ありがとう母さん。）

ふと、母が小さい僕をきつく抱きしめながら泣いている光景が頭に浮かんだ。軽トラックの真下を奇跡的に無傷で通り抜けたときの光景だ。買い物途中で迷子になった僕は、道路の向かい側に母を

見つけ、脇目も振らず飛び出してしまい、道路の真ん中で転んでしまった。その上を軽トラックが通過して……。気付いたら息苦しいくらいに抱きしめられていた。苦しいって言っても、ずっと離してくれなくて、結局そのせいで大泣きしてしまったな。今ならあのときの母さんの気持ち、痛いくらいに良く分かるよ。

（だからもうそんなに泣かないで、僕が代わってあげるからさ。）

こんなに気持ちの悪い涙は久しぶりだ。きっと今僕は、泣きたくて泣いているんだ。相変わらず胸は高鳴っているけど、その部分はとても暖かくて、雪を溶かす春の太陽みたいだ。

正面ですつと僕のことを見守っていてくれた深紅に微笑んで頷いてみせると、静かに涙を流していた彼女は、小さく声を漏らしながら泣き始めた。

（言わなくちゃ。深紅に、伝えてあげなくちゃ。）

今まで本当に長かった。僕が壊れそうになったときも、寂しくて震えているときも、ずっと傍にいてくれた。たくさん場面を振り返りながら、彼女に宛てて思いを綴る。

『もう大丈夫　きちんとお別れできた　深紅がいてくれたからだから　本当に　ありがとう』

時の流れは早いもので、この家に来てから三ヶ月が過ぎようとしていた。

最近はどうとう朝の気温が十度を下回り始めた。あれから深紅は毎日学校に出席している。深紅のセーラー服姿はものすごく可愛い。その可愛さといったら直視できない程だ。見ただけで赤くなりそうで、出掛けていくときの後姿ばかりが記憶に残ってしまう。帰ってくるとそのままの姿で夕食を食べるので、いつもテレビに集中して食べている。夏服じゃないだけまだマシだ。夏服だったら、自分だけ部屋で食べていたかもしれない。しかし、深紅にとっての最後の夏服は既に終わってしまったので、もう見ることは無いと思うと、

それはそれで落胆してしまう。なんなのだろう、僕は。

僕の方の学校生活はというと、実はまだ埼玉の学校に籍を置いてある。まだ自宅療養ということになっているみたいだ。じきに長野へ転校ということになるだろうが、いつから学校に通うかは自分で決めていいと爺ちゃんが言ってくれた。

もう精神的にはずいぶん落ち着いてきた。けれど、どうしてもまだ声だけが出ない。一度、隣街の精神科医に診察を受けたことがあったのだけど、もう心は回復しているが、しばらく声を出していないと、脳が声を出すことに抵抗してしまうのだとのこと。けれど、きつかけさえあればすぐ元通り喋れるようになると言われた。

きつかけ。カウンセラーの先生が言うには、思いつきり何かを楽しむことがきつかけに繋がると言っていたが、正直よく分からない。充分今の生活が楽しいというのに。

というわけで、ここところはきつかけを掴むために学校に通ってみるか、喋れるようになってから学校に行くか、で悩んだりする。

今僕は昔深紅が使っていたという、えんじ色のママチャリを納屋から引つ張り出し、家から三キロ程のところにある駅前のスーパーに向かっている。

深紅の趣味なのかどうかは分からないが、側面に貼られている鳥の羽の形をしたシールのせいで、ちょっとばかり恥ずかしい。

どうして恥ずかしい思いまでしてスーパーに向かっているのかというと、夕飯を深紅が作るというので、せめて買出しくらいはやらせてくれと僕がお願いしたからだ。ちなみに爺ちゃん達は町内の集まりに参加していて、今日の帰りは遅くなるとのことだった。深紅の話だと最後の酒盛りがメインなのとか。ようやく巨峰の収穫も終わりを迎えたところなので、この連休中は爺ちゃん達に思いつきり羽を伸ばしてもらいたい。そして僕も深紅と二人きりの時間で、大いに羽を伸ばさせてもらうつもりだ。今は伸ばすというよりも、走らせているという方が正しいが……。

ちなみに何故こんなお願いをしたのか、もちろんまだ学校も行っていないので、家でぐーたらしている身分なら当然なのだが、それだけじゃない。どうも彼女の脚の具合が悪いようなのだ。深紅の話によると、寒くなればなるほど言うことを聞いてくれなくなるのだそうだが、この前、夕食の後にコーヒーを淹れてくれたとき、キッチンからコーヒーを運んできた深紅が、僕の目の前で転んでしまったのだ。

『転んだ』という表現はいまいち合っていない。なんというか、かくつと急に脚の力が抜けた感じだった。幸い、コーヒーを被って火傷を負うという事態は避けられたが、僕は初めて深紅が本当に歩けなくなってしまう病気なのだと実感した。

そういうことがあり、僕はできるだけ深紅が嫌な気分にならないよう、さりげなくサポートすることにしたのだ。きつと強い彼女のことだから、必要以上の心配などはされたくないだろう。

スーパーに到着する頃には顔面に冷たい風を受けたせいで、鼻の感覚が若干薄れていた。買い物かごを手に取り、メモに書かれた野菜を次々に放り込む。僕は何かが出来上がるのは知らない。リクエストを聞かれたので、深紅の得意なやつ、と答えたからだ。それでも買い物かごの中身を見ればおおよその見当はつく、パスタであることは間違いない。それも和風のやつ。

会計を済まして外へ出ると、丁度僕と同年代くらいの男二人が露店の鯛焼き屋の主人から袋を受け取っているところが見えた。ママチャリにまたがったところで、露店に併設されたベンチに腰を下ろした彼らと目が合ってしまった、どくん、と心臓が一回鳴った。

明らかによそ者を見る目だ。それもそのはず、深紅の話によるとこの町には僕らの年代の学生など数える程度しかないという話だ。きつと見たことも無い同年代の人間を見ると、必然的にそういう目になるのだろう。こういうところは都会の方がずいぶん楽だ。

自転車をこぎ出して彼らの前を通り過ぎようとしたとき、嫌な予感的中した。

「お前」

ギクリとなつて自転車を止めて後ろを振り向くと、片方の男が立ち上がつて僕を見ていた。上下にウィンドブレーカーを着込んだ彼は紐で吊るしたサッカーボールを肩に掛けていて、スポーツが専門だということは一目で分かる。

「深紅のいところ」

ピクンと肩が跳ね上がつて、しどろもどろしてしまう。

（この男は誰だ？ ていうか、何で分かつたんだ？）

「その自転車、深紅のやつだ。誰だつてすぐ分かる」

僕は顔に出やすいのだろうか、何故こう簡単に考えていることが分かつてしまうのだろう。僕は仕方なく頷いて見せた。すると彼は少しだけ驚いた顔をして、ベンチに座つて僕の様子をじっと観察していた男と顔を見合わせた。

「本当に喋れないんだな」

そう僕に投げかけると、彼は舌打ちをして、小さな声で『つたく』とつぶやいた。何か僕は彼を不機嫌にさせてしまったらしい。

「まあいいや、深紅に伝えとけ。篠崎つて奴が謝つてたつて」

なにがまあいいのかさっぱり分からない。さすがにムカつとなつて、返事もせずに再び自転車をこぎ出した。

おかげさまで、帰り道はアイツのことが頭から離れなかった。茶色い短髪の頭で、少し目がきつい感じがしたが、鼻が高く、さわやかなスマート顔だった。背は僕と同じくらい。170センチといったところか。とにかく人を小ばかにしたような腹の立つ喋り方だった。

いったい奴は深紅のなんなんだ？ 呼び捨てかよ、鯛焼きなんか食いやがつて、偉そうに！ まったく、深紅の自転車のせいで嫌な奴に話しかけられてしまった。篠崎め、深紅と同じ高三か。

……まさか彼氏だったりして。

深紅が夕食を作っている間もその考えは尽きなかった。

（奴が深紅の彼氏……？ 近くに住んでいるってことは、ガキの頃から知り合いだったに違いない。僕の知らない深紅の顔を、奴はいっぱい知っているのだろうか。くそっ！）

僕はテーブルに頬杖をつき、もう片方の手で油性マジックを掴んで指でくるくる回し始めた。

（あの野郎……。深紅の髪の毛に触ったのか？ 深紅を抱きしめたことがあるのか？ 深紅の唇に触れたのか？ まさかもう深紅の身体を！）

油性マジックが手から勢い良く飛び跳ねていった。と、同時に深紅の声が聞こえる。

「美月ー、運ぶの手伝ってえ」

（ぬぬぬぬぬ、この深紅の透き通った美しい声が、あろうことかあんな奴の手によって、いやらしい女の声に変わるのか！）

スツと立ち上がってキッチンに行き、皿を受け取ると、まるで皿を運ぶただけに作られたロボットのよう、テーブルに置いてはキッチンに戻り、次の皿を受け取る、を繰り返した。深紅のあられもない姿を想像してしまった僕は、その後ろめたさから彼女の顔を見れないのだ。とにかく話しかけられないようにサクサク動いた。

全ての皿を並べ終わり、最後に冷蔵庫から牛乳を取り出して居間に戻ると、深紅はもう座っていた。僕も反対側に座って、二つのコップに牛乳を注いだ。

「美月の口に合う合わないは別にして、今日のは改心の出来よっ」
かなりの自信だ。チラっただけ深紅を見ると、少し顔を仰け反らせた、えへんという顔だった。それから皿に目を落とす。案の定パスタなのだが、僕の食べたことのない種類のやつだった。

透き通った狐色の和風スープに、あらゆる種類のきのこ野菜が和えられたパスタが盛られ、上には鶏肉と白髪葱がもっさり乗せられている。匂いを嗅ぐと、醤油と鶏肉が合わさったとても良い香りが鼻の奥に広がった。口に入れなくても旨いと分かる。なんてった

って深紅が作ったのだから。

二人でいただきますをしてから、目いっぱいフォークに巻きつけた深紅特製パスタを口へ放り込む。

(!!!)

(なんだこれは！ いったいなんなんだこれは！)

一瞬目眩がした。素晴らしい。芸術の域だ。こんなに旨いパスタを僕は食べたことが無い。深紅の視線を感じて、僕はわざとそのまま倒れこんだ。

「えっ？ ちょっとやだ、美味しくなかった？」

倒れたまま、すぐそこにあったスケッチブックを手に取り、深紅に見えないようにして言葉を書き入れる。起き上がると同時に、不思議そうな目でこちらを見ている深紅にそれを見せた。

『意識がぶっ飛ぶほど……』

ページをめくる。

『美味！』

深紅は安心するように肩を落として「よかったあ」と言った。

「びっくりしたじゃないよお、もー」

少し呆れた表情になってしまったので、慌てて弁解する。

『ごめんごめん マジでくらっとしたんだって』

そうすると深紅はふふつと笑ってサラダを食べ始めた。ちなみに、テーブルの上にはパスタだけではなく、サラダ、コーンスープにこんがり焼かれたフランスパンのバターtoastまでもが並んでいる。さっき並べているときには考えなかったが、これはもう、どこかのお店レベルじゃないか。これを全て作ってくれた深紅を見て感動する。なんて良い子なんだ……。

「な、なによもお……、美味しいのは分かるけど、そんなに見ないですよ……」

(その顔も素敵です。深紅様。)

たぶんこれが漫画やアニメなら、今僕の両目はハートマークになっているに違いない。むしろそうなって欲しいくらいだ。

そこから僕は、つまらないことなど忘れ、ひとくちずつ身体 of 全感覚を総動員させて深紅の手料理を味わった。

（ざまあ見る篠崎。お前も食いたいか。やらねえぞ馬鹿たれが！）生涯一番の幸せな夕食が終わり、例のごとお皿を洗っていると頭の中に鯛焼き野郎の言葉が流れた。そういえば、喋れないからって、なんで舌打ちされなくちゃいけないんだ？ それと、伝えておけとか言ってたな。分かった、伝えてやろうじゃないか。キュッと蛇口をひねり水を止めると、意を決して居間に戻り、深紅の向かいに座る。

『そういえばスーパーでしのぎきつて人に声を掛けられた』『ええ？』

眉をひそめて『マジ？』という顔になった。

「ゆたか……、美月になんて？」

よほど気になるのだろう、深紅は前のめりになって質問してきた。（やっぱりか、鯛焼き野郎。良かったな。お前も呼び捨てだぞ）

少し頭にきてしまったので、奴の言葉をそのまま書いた。

『深紅に伝えておけ しのぎきつて奴が謝ってたって』

すると深紅は見慣れない反応をする。なんか良く分からないけど胸に手を当てて、ほっとしているのだ。

（なんだよ！ 鯛焼き野郎に謝られてそんなに嬉しいか！）

一人だけ蚊帳の外にいる僕は、いらいらする頭の勢いに任せてスケッチブックに書きなぐる。

『彼氏でしょ、格好良い人だねー』

不思議そうにその文字をしばらく見つめて、『あっ』となって彼女は言った。

「美月って鋭いわねえー。確かにゆたかとは付き合ってたけど、もう別れたの。結構前だと思ったけど、そっか……。言ってなかったわね」

しばらく固まっていたと思う。徐々に嬉しさがこみ上げてきて、僕は笑顔を抑えるのに必死になった。

(嘘だろ、マジかよ、それって……。好きになっていいってこと……?)

いつきに身体が栗立った。さっそく告白している自分を思い浮かべてしまったからだ。

「でも、どうしてあなた達が？」

字が汚くならないよう平常心を装って書く。

『たぶん 自転車の羽で気付いたんじゃないの』

「そっか、なるほどねー」

『そういえば 何を謝ってるの しのざき』

「えっ？ ……それはまあ、いいじゃない」

良くないが、あまり深いところを聞くのはデリカシーが無いというもの。というより、別にどうでもよかった。鯛焼き野郎と別れただけで十分だ。調子に乗った僕は恥ずかしい台詞を惜しげもなく言う。

『まあ、いいや。それより今日のご飯、本当に美味しかった』

勢いをつけてページをめくる。

『深紅の旦那になりたいくらいだよ』

「なっ！ なに言って……」

これだ、これが見たかったんだ。

深紅はいつかのように耳まで赤く染まった顔をうつむかせて、両手の指で髪の毛を梳いている。普段は凜としていて落ち着いた大人の表情のくせに、恥ずかしいことがあったときの深紅は、僕か、僕よりも年下を感じさせるとっても可愛らしい顔になる。僕はこっちの顔の方が数段好きだ。

僕は狙った通りの顔が見れて感無量になり、盛大なガッツポーズを繰り出した。

深紅のいない月曜日がきて、深紅のいない火曜日がくる。そうやって僕は指折り数えて週末が早く来ないかと平日を過ごしている。

そういう日に何をするかというと、学校から届いた中間テストの解答用紙を教科書を見ながら埋めたり、深紅に借りた文庫本を読み漁ったり、携帯に届く友達のメールに返事をしたり、深紅のお母さんのパソコンで、喋れない人達のコミュニティに参加したりしている。と言いつつ、どれも合間に深紅のことを考えながらすることがほとんどだ。

カウンセラーの診察を受けてから、爺ちゃん達の手伝いはしていない。今は朝から晩まで好きなことをして過ごせ、と爺ちゃん直々に命令が下ったからだ。

今も途中まで埋めた解答用紙の続きをやっている。教科書を見ながらなので、答えを埋めるだけなら本当に簡単なのだが、理解しないまま学校に戻ることを考えると、恐ろしくてとてもじゃないけどそんなことは出来ない。

その中でも国語、社会、理科は比較的楽に覚えられる。問題は数学、英語の二つだ。前者は答えそのものが教科書に載っているので暗記するだけで終わる。けれど後者は違う。数学は数式を覚えて、それを問題に置き換え、更に解かなくてはならない。極めつけは、折角解いたものを今度は分解しろとか、その過程を説明しろだとか、本当にわけが分からない。一体僕に何をさせたいんだ。英語に至っては、小学校の頃から大のつくほどの苦手で、基礎が出来ていない僕にその上の段階の問題を出されても、丸写しはできても理解するだなんて土台無理な話だ。

本当なら深紅に教わりたいのだけれど、ここのところ学校が終わった後はリハビリセンターに通っていて、帰って来る頃にはくたくたになっている。とてもじゃないけど深紅の休息の時間を奪うことなんて、今の僕に出来やしない。

彼氏と別れた。そう聞いてからの僕の心は、日に日に深紅への思いが募るばかりだ。いとこだから駄目。そういう気持ちが邪魔になることもあった。でもパソコンで調べると意外にもあっさりそんな気持ちは消し飛んだ。

あるサイトで見つけた情報によると、『いとこ同士の婚姻は法的に認められている』とあった。それを見て喜んだのもつかの間、新たな心配が増えてしまった。『しかし、近しい血族間に生まれる子供は、虚弱体質になってしまう確率が若干上昇する』深紅にとって是最悪の事実だ。

でも、僕は深紅と一緒にになれるなら子供なんていらなと思った。深紅はどう思うだろうか……。ガキの発想だと笑うだろうか……。そもそもまだ付き合ってもいないし、深紅が僕のことをこれっぽっちも好きではないのかもしれないのに、思いだけが勝手に先走ってしまふ。本当、男ってやつは馬鹿だな、と冷静に考えては素に戻り、その数分後にはまた同じような事を妄想しては勝手に切なくなっているのだ。恋の病とはよくいったものだ。

深紅のスクーターの音がした。時計を見ると針は夕方六時半を指している。ほぼいつも通りの帰宅時間だ。問題はその後だった。スクーターの音がしてから一分、二分、と過ぎても引き戸を開ける音がしないのだ。気になって外を見ると、納屋の柱につかまった状態で座り込んでいる深紅の姿が見えた。もしかして……。

いいような不安に駆られた僕は、急いで一階に降り、爺ちゃん達に見つからないようゆっくり引き戸を開けて納屋に向かった。

深紅は僕と目が合って、恥ずかしそうに笑った。僕の好きな表情ではなく、どことなく寂しい笑い方だった。

「えへへ、ちよつと無理しすぎたかも、疲れちゃって……」

僕は黙って手を差し出した。深紅がしっかりと握るのを確認してから引つ張りあげて肩を抱えてやる。

（重……）

驚いた。疲れたところの話ではなかった。深紅はどうみても脚に力が入っていない様子で、ほぼ全体重が僕の肩にかかっている。これではたった数メートルの玄関まですら無事辿り着けるか危うい。そう思っただけの膝を抱えあげた。

「ちよ！ みつきっ！？」

手をバタバタさせて抗議している彼女に構わず、玄関へと歩き出した。

「やつ！ 嫌だつてばあ！」

うん、お姫様抱っこをすると、今度はかなり軽く感じる。きつと平均体重よりかなり軽い方だろう、と彼女の気など関係なしにそんなことを思っていた。

玄関前に着き開放してやると、彼女は怒りかけたが、そのままへたりこんでしまいそうになる。また僕が肩を抱いてそれをなんとか阻止する。引き戸を開けて中に連れていき、玄関の中に座らせると今度は黙り込んでしまった。

僕はすかさず居間に置いてあったスケッチブックを手にとって書いて見せる。

『ごめん でも制服が汚れるよりましだろ』

それを読んだ深紅は、チラッと上目遣いで僕を見てから、そっぽを向いた。

「ありがとう……」

かろうじて聞き取ることのできた彼女の声は、とても弱々しくて、とても儚く、僕には泣いているかのように聞こえた。

六章 【絶望】

「あとで部屋に来て」

僕に目を合わせずに彼女がそう言ったのは、静かな夕食の後だった。

玄関でのやり取りの後、彼女は半ば這うようにして居間に入り、窓の下腰掛に座った。そこで脚を深紅専用の遠赤外線ヒーターで充分に温めてから、手すりだらけの壁を伝って手を洗いに行った。

この家は三年前に改装して、今の建築基準に合ったバリアフリーみたいになっているが、普通ならそれは爺ちゃんや婆ちゃんの足が悪くなったときのためのものだろう。こんな、こんな悲しい使われ方をするためのものなんかじゃない。それからほとんど会話も無しに夕食が終わり、風呂から上がってきた深紅がそう言い残して部屋に戻っていったのだ。

風呂に入っている間中、深紅の言葉が頭から離れず、気が気ではなかった。何の話をするのだろう。無理やり抱きかかえてしまったことを怒っているのだろうか、いや、怒るに当たって、いちいち部屋に呼び出してまでする話ではない。とするとやっぱり……。きつと脚のことだ。『歩けるうちは頑張って歩く』そう言ったのは紛れもない深紅本人だ。でも、今日のあれはとも歩ける状態ではなかった。彼女はこれからいたいどうするつもりなのだろう……。僕はいくら考えても答えの出ない問題にイライラして湯船に顔を沈めた。

深紅の部屋に向かう前に一度自室へ戻り、頭を充分に落ち着かせてから、スケッチブックを手にとって部屋を出た。

「入って……」

ノックの音に反応した深紅の声は、いつもより低く別人のようだった。けれど相変わらずよく通っているため、扉越しでもはっきりと聞こえた。

気分とは不思議なものだ。いつもは明るいメーブルの扉も、今の僕の目にはダークブラウンに映っている。ドアノブに手をかけ、戸を開けると微かに聞こえる程度の音量で洋楽が流れていた。深紅のように低く透き通った女性シンガーの声。母が大好きでよく聴いていたのを思い出す。確か三十二歳という若さで悲惨な最期を迎え、その悲劇から映画も作られたらしい。今流れている曲は英語に疎い僕にでも何て歌っているのかよく分かる。きっと世界中の人々に向けて歌ったのだろう。とても簡単な英語。今の雰囲気とミスマッチなどでも明るいメロディが余計に悲しい気持ちにさせる。

ベッドに腰掛けている深紅にはいつもの凜とした感じはなく、なんとというか、切羽詰っているような、深刻そうでいて、突付いたら破裂してしまいそうな危うさを感じさせる、そういう顔だった。

いつか来る、そう思ってた。深紅の人生にとつて、とても重要な意味を持つ時。それが今なのだと、直感でそう感じた。

僕はテーブルではなく、深紅の足元にあぐらをかいて座った。きつとそうした方が良いと思ったからだ。

「わざわざ来てもらっちゃって、悪いね」

ほんの少しだけ笑顔を作り、首を横に振ってやる。

曲が終わり、重苦しい沈黙が部屋を支配する。深紅は何かを喋ろうとして口を開くが、音にはならず、そのまま深いため息をついた。さつきとはうって変わって、ゆったりとしたバラードが流れ始めたとき、僕の方から話しかけた。

『焦らないで ゆっくりでいいよ』

意表をつかれたのか、少し驚いた顔になってからうつむいて「うん」と小さく頷いた。彼女は目を閉じて深呼吸して、僕に視線を合わせる。

「去年はね、冬がきて、動かなくなったの。でも……今年も秋」

言い終わる頃にはまたうつむいてしまっていた。

「ちゃんと、リハビリしてるのに、このままだと、来年はどうなるのかなあ」

『ちゃんと歩ける』

「うん。分かつてる……。でも、再来年は？　その次の年は？」

深紅はそう言った後、とても悲しい目をして、自分の脚をやさしく擦り始めた。

「分かつてるのに……。もう、とつくの昔に分かりきつてたのになあ」
「やっぱりそうだ、深紅は前に『大丈夫』と言っていたが、そんなのは単なる強がりでしかなかったんだ。僕に心配を掛けないため、自分を無理やり元気付けるため……。僕がそうだったように、今、彼女の心の奥は他のことでいっぱいのはずだ。」

なら僕に出来ることは……。

『分かるわけないよ』

「えっ？」

僕は急いで続きを書いた。

『歩けなくなりかけている人と　歩けない人は違うよ　去年の深紅と今年の深紅の気持ちが違うみたいに』

「そんな……　なんで……」

深紅はきょとんとした表情で、なんで慰めてくれないのか、と言いたそうな顔で僕を見つめる。僕はそうなるのが分かつてて書いたんだ。更に続ける。

『だから　分かるはず無い　もちろん　俺にも歩けない人の気持ちが分かつてあげることなんて出来ない』

「……　酷いよ……　美月なら、美月ならって、思ったのに……」

失望したような声に、心がズキリと痛んだ。それでも僕は続ける。
『どうして？　歩けない人の気持ちが分からなくちゃ駄目なのか？』

読み終わると、震えながら深紅は言った。

「出てって……」

相変わらず僕を睨んでいる。憎しみすら感じる目だ。でも、これだけは最後まで伝えなくちゃいけない。僕は意を決して言葉を刻み込む。

『深紅は　母さんが目の前でバラバラになった　俺の気持ちが分か

るのか？』

ハッとなつて、彼女の顔はみるみる青ざめていく。

『分かるわけないよな』

『でもずっと傍にいてくれた 俺はそんな深紅に救われたんだ』

『あのとき どうして傍にいてくれたんだ？』

（……くそつ、スケッチブックが終わつてしまった！）

真っ青になつた深紅を尻目に、勝手に机の一番下の引き出しから新品のスケッチブックを取り出して書きなぐつた。

『ずっと俺の傍にいた深紅なら分かるはずだ』

『本当に分かるのはひとつだけだろ』

『やめて……』

深紅の悲痛な哀願が聞こえたが、止めるわけにはいかない。

『それだけは俺も痛いほど分かつてやれる』

『もうやめてよ！』

酷く怯えた子猫が、敵わないと分かつている相手に向かつて威嚇するときのように、深紅は氣力を絞つて僕を睨みつけた。

（最後の一言だ。我慢してくれ深紅……）

僕は深紅の鎖を解いてやるため、出すことの出来ない声を、ありつたけの気持ちを込めて文字に変えた。

『怖いよな』

彼女はそれを見た瞬間、肩がピクンと跳ねたのが分かつた。そして、下を向き、膝の上の小さなこぶしが小刻みに震えだした。

きつと今、深紅は自分の心と戦っている。いつもそうだった。心と頭は別のことを同時に考える。優先すべきなのはどちらなのか、それがどうしても分からない。だから第三者に委ねるんだ。どんなに強い人間だって、背中を押されないと決められないことがあるんだ。

「……………い……………よ……………」

ぽたつ、ぽたつと雫が深紅の膝に滴っている。次の瞬間、その映像がいきなり大きく歪んだ。

(あ……れ……?)

どうして、僕も。泣いているんだろう。胸がズキズキする。……違う、そんなことどうだっていい、まだやることが残ってる。

僕は震えている深紅の手を強引に引っ張って、ベッドから引きずり降ろす。二人とも膝立ちの状態になって向かい合う。そして、やさしく深紅を包み込んでやった。

「怖いよ……」

深く小さく頷くと、深紅も僕の背中にそっと手を回した。

「こ……わい……。こわっ……。いのぉ……」

胸の中を支配しているだろう黒くてどろどろした感情を吐き出すと。今度は涙がぼろぼろ出てくる。僕も痛い程知っている。たぶん、弱い部分を吐き出すことと、涙を流すことは二つ合わさって効力を発揮するものなのだろう。きつと今、深紅の心の中のどろどろは、少しだけ涙と一緒に流れているはずだ。そう信じて、深紅の頭を撫で続けてやる。

今度は僕の番だから……。

深紅のとても悲しい泣き声に混じって、おもちゃの鉄琴のイントロが聴こえた。耳を傾けていると、どうやら虹のことを歌っているようだ。さつきと違い、歌詞の内容は理解できないが、とても深紅の泣き声にぴったりの曲だった。

それを聴いて、僕が何故泣いているのか、なんとなく分かった気がした。

アルバムの全ての曲が再生され尽くして音が鳴り止んだ頃、深紅も目もとに残った最後の雫を拭って、深い深い、深呼吸をした。それから彼女の願いで電気を消して、今僕らはベッドに寄り添って座っている。

きつと、明かりを消したのは、初めて僕の前で大泣きしてしまったことの恥ずかしさを紛らわすためと、赤く腫れ上がった目を隠す

ためだろう。暗闇の中、深紅が頭を僕の肩にコツンとぶつけてきたので、そつと肩を抱きかかえてやった。いつもの甘く切ない桜の香りが胸を突く。

「そつか……、こんな感じだったのね……」

はつきりとは分らないが、少しだけ微笑んだ気がする。

「美月って本当に大人ね。それとも、私が子供なのかなあ」

首を横に振って見せた。それから深紅はしばらく黙ってしまい、どこか一点を見つめている。何かを考えているのだろうか。さっきと同じように口を開いては思いとどまり、ため息をついている。だけどさっきとは何か違う感じ。今は、艶やかでとても色っぽく見える。そんな深紅の姿を意識して見てしまったのがいけなかった。

ふと、今僕が置かれている状況を客観的に見てしまう。

好きな女性が、腕の中で、切ない表情で、ため息をついている。

そんな言葉が頭の中をぐるぐるとまわり始め、今まで聞こえなかった心臓の音が、急に大音量で響き渡ってくる。

『どつくん、どつくん、どつくん、どつくん』

まずい、これではさすがに深紅に聞こえてしまう……。こんなに静かで、こんなに身体を密着させているのだから……。

さっき勝手に止まってしまったアルバムが、ものすごく恨めしく思えた。静寂の中、僕の心臓の音に気付いていないか気になって深紅の様子をこっそり窺う。

(っ！)

途端に全身が硬直して金縛りにあってしまう。心臓だけが動いている世界。空気さえも止まってしまったのだろうか、うまく息が出不来ない……。いや、止めているのは僕の意味だ。

どうしてか、それは深紅が僕の顔をじっと見ているからだ。

全てを見透かすような、潤んだ茶色い瞳で、僕と目が合ってからも逸らすことなく、ただひたすら見つめてくる。彼女は何故そうするのか、僕に何を求めているのだろうか、もしかして……。そんな

はずはない、そんなことがあるわけない、でも。

（駄目だ、思考がうまく回らない）

身体が勝手に、彼女の瞳に吸い込まれていきそうになる……。

「……あのね？」

僕は、足元の脅威に驚いたときの猫のように飛び跳ねた。それと一緒になって深紅も跳ねて驚く。一瞬の沈黙の後、僕らは目を見合わせて、どっと笑いあった。深紅なんて、うつすら涙すら浮かべている。僕の方も、あんなに張り詰めていた心臓が、笑い合うことによって、少しずつ開放されていくのを感じていた。

しばらく笑い続けた。笑い終わっても目が合うとまた笑ってしまふ。どれくらいそうしていたのか分からないが、ようやく落ち着いて、涙を拭った深紅が口を開いた。

「あのね」

僕も涙を拭ってから頷いた。

「前に、しのぎきつて人に話しかけられたでしょ」

過剰反応しないようにしてコクリと頷く。

「あの人が謝ってたことって、実は美月のことと関係があるの」

（え？）

「しかもね、それが原因で別れたんだあ」

（ちよつと待った、どういうことだ？ さっぱり分からない。だってあの時初めて奴と会ったんだぞ？）

スケッチブックに手を伸ばそうにも、深紅の肩から手を解くことなんて出来ない。それに暗くてスケッチブックがどこにあるか分からない。そもそも書いたってこの暗さじゃ……。そのとき、あるひとつの考えが過ぎった。

（もしかして、電気を消したのは……）

「ほら、美月がこっちに来てから、私、ずっと付き添ってたでしょ？」

（……。）

「彼にね、何度もデートに誘われてたの。でもね、私は一度も行か

なかった」

（そんな、それじゃあ、僕のせい……なのか……？）

目を丸くして驚いている僕に気付いて、彼女はやさしく言った。

「うっん、美月のせいなんかじゃない。私のせい……」

首をだらんと下に曲げ、髪の毛で顔が隠れてしまった。今彼女は落ち込んでいるのだろうか。だとすればいったい何に……。

「ずっと誘いを断ってたなら、いつかね、言われたの……。そいつ、本当は病気だなんて嘘なんじゃないのか、お前のことが好きで、一緒に居たくて引き止めてるんじゃないのかって……」

どくん、と心臓が大きく鳴った。

「私、気付いたら彼のこと叩いてた」

（どうしよう。僕はなんて男だ……）

卑怯な手で別れさせてしまった後ろめたさがどつと押し寄せてきて、僕は全身の力が抜けていくのを感じた。それに彼女は顔を上げて反論する。

「もう！ 美月のせいじゃないって言うてるでしょ、お願い、最後まで聞いて……」

それだけ言っつて、また顔を伏せて黙ってしまう。深紅は何を怒っているのだろうか。

「あのね、その後……ね。彼は怒って言ったの。なんだよ、お前もそいつのことが好きなのかよ、って……」

（は……？）

「私ね、そのとき、気付いちやっつた……。だからね、美月、その、だから……。美月のせいじゃないの……」

（え……？ ええええええっ！）

世界がひっくり返った。驚いて僕はどうしたら良いのか分からなくなり、とりあえず深紅の顔を覗き込んだ。すると彼女はいつものあの仕草をしていた。

待ってくれ。まだ僕は全然理解できていない。ここは喜ぶところなのか？ その……、深紅は僕のことを好きということなのか？

誰か教えてくれ。僕はその後どんな顔をすれば良いんだ？

この心臓の破れそうな沈黙に耐えられなくなり、立ち上がってス
ケッチブックを探す。

「駄目」

振り向くと深紅はまた首を下に垂らしていた。

「答えなくていいの、電気は点けないで、今日はここで終わり」

（でも……）

「お願い……」

やっぱりそうだ、深紅はこの話をしようと考えたから、電気を消
させたんだ。僕に答えさせないために……。

いくら待っても深紅は下を向いたままなので、僕は彼女の言う通
りにして部屋を後にした。

部屋に戻ってひどく後悔した。戻ってくるべきじゃなかった。あ
のまま、強引にでも自分の気持ちを伝えておくべきだった。きっと
深紅は迷っている。いとこ、それも三つも年下の僕とそうなっては
いけないと、そう思っているに違いない。……でも。深紅は最初か
ら答えを聞くつもりが無かった、それはつまり最初から恋を成就さ
せようという気が無かったからじゃないのか。くそっ、分からない。
僕にどうしろってんだ。

冷たい布団に潜り込むと、彼女の気持ち余計に閉ざされていく
気がして、とても辛くて切ない気持ちになった。さっきまでこの腕
の中に深紅がいたなんて、到底思えないほどに。

ふと、彼女の部屋の方に目を向ける。この壁の向こうで、深紅は
今何を考えているのだろうか。どうしてそうしたか分からないけど、
僕は布団から手だけを出して、深紅が寝ている方向に伸ばしていた。

七章 【恋愛】

朝、深紅の態度は一変していた。昨日起きたことが全て嘘だったかのように、明るくて、楽しそうな笑顔を皆に振りまいていた。とても痛々しいくらいに、僕にはそんな深紅を見ていられなかった。学校に出掛けていく深紅に『いつてらっしやい、無理だけはするなよ』とだけ伝えて、僕も出来るだけいつもの日常を過ごすよう努めた。一分でも時間が空いてしまうと深紅のことを考えてしまう。そうした時間はとても辛いので、無理やりにも他のことに集中している方が良いと思った。

こんな日に限って、数学の問題がすらすら解ける。まったく、本当に意味の分からない教科だ。あつという間に解答用紙が埋まっていき、再び手が空いてしまい、ふと気付くと頭の中は深紅のことだらけ。

辛い。胸が痛い。今すぐ深紅に会いたい。その小さな肩を抱きしめたい。その可愛い唇を僕の口で塞いでしまいたい。……深紅。とてもじゃないけど僕の心はそれほど持たないと思う。

気付くと、僕は数学の教科書に彼女の名前を書き綴っていた。それも、何箇所も。そんな自分で書いた名前にすら愛おしさが溢れてくる。しばらくそれを眺めていると、急に恥ずかしさがこみ上げてきて、急いで消した。

これは病気だ。今までで一番ひどい病気だ。一人でいてこれなんだから、深紅の傍にいたらどんなことを仕出かすか分かったものじゃない。人を好きになるってこういうことなのだろうか。ひよっとして僕だけがこんなに苦しい思いをしているのではないだろうか。そう思えて仕方が無かった。

その日の深紅はいつもより早く帰ってきた。どうやらリハビリセンターに行かなかったみたいだ。夕食を囲んで僕らは普段通りの会話をした。好きなおかずの話。東京と長野の違いの話。今日読んだ

文庫本の感想。それぞれの友達の話。

話すネタが尽きると今度はテレビから話題を拾う。将来乗りたい車。好きなアーティスト。好きなタレント。好きな映画。半ば強引に続く会話。沈黙が訪れるのが怖いんだと思う。僕も、深紅も。

きつとお互い、胸の中は違うことを考えている。そう思っているのは僕だけじゃないはずだ。爺ちゃん達が寝てしまっってからでもそれは続いた。

ごめん、深紅。やっぱり、僕にはこんなの我慢できやしない。さつきから胸が張り裂けそうなんだ。

腫れ物に触れるようにして、そつと話を切り出したのは僕だった。『少し話がある』

深紅は神妙な面持ちになり、静かにこくりと頷く。

十月も残り僅かとなった。

前はあんなに心待ちにしていた日曜の午後。僕は爺ちゃんと居間で将棋を指している。こここのところ憂鬱な雨ばかりだ。そして、雨が降る度毎朝寒くなってきている気がする。本当に憂鬱だ。僕はパチンと桂馬を動かした。

深紅はというと、あの日から学校を休み続けている。本人曰く『風邪』ということらしいが、理由はきつと違うところにある。

脚のことだ。雨の日は危ないということで、バイク通学の禁止が義務付けられている。要するに深紅は自転車で登校しなくてはならない。この雨の中をだ。それでも脚が動かないと言えば婆ちゃんが快く車で送ってくれるのだろうか、そうしないのはきつとそれは、僕のせいだろう。だから『風邪』なんだ。

「おい」

えっ、となつて爺ちゃんを見ると、僕が指した歩を顎で突付いている。よく見て赤面した。あるうことか、初歩中の初歩のルールである『二歩』を指してしまっていたのだ。ごめん！と手を合わ

せると、静かに笑って頷いてくれた。僕が指した歩を取り除き、再び次の手を考える。

あの日、居間で話したこと。それはもちろん僕らのことについてだった。

出来ることなら文字ではなく、自分の声で伝えたかった。

『好きだ』

それを見た深紅の表情はなんと形容し難いものだった。深紅の答えを、クリスマスプレゼントを開ける子供のように僕は待っていた。答えは決まっているものと、そう考えていた。それがどうだ、リボンを解いてみれば中には何も入っていなかった。そんなことは通常ありえない。空の箱を開けた子供はどんな気持ちで、どんなことを言うだろうか。たぶん、僕は同じことをした。

そうして引き出した答え。『ありがとう』『とっても嬉しい』『ごめんなさい』。

そんな答えで楽しみを奪われた子供が諦めるわけがない。更に食い下がって聞くと、彼女の本音が分かった。思った通り、いとこだということと、自分の脚が悪いことが理由であることを教えてくれたのだ。それを聞いて落胆はしなかったが、自分の身勝手さに呆れてしまい、結局諦めはしないものの出直すことにした。それから深紅は僕を避けるようになってしまった。僕はこの状況をどうすることもできず、いつも通り、くよくよ悩んでいるわけだ。まったく僕らしい。

いとこ、という点については本人同士の気持ちの問題であることが大きい。確かに否定的な考えが一般的だろう。それでもお互いの気持ち揺るがない、確かなものであれば、法的に認められている以上問題はないはずだ。

問題は深紅の脚のことだが、僕は深紅の脚が動かなくなっただけに生きていけるだけで幸せだ。ただし、前に僕が言った言葉が思わぬ足がかりとなってしまうた。

『歩けなくなりかけている人と、歩けない人は違う』そう言った。

それはそのまま僕に置き換えられる。

『歩けなくなりかけている人を好きな気持ちと、歩けない人を好きな気持ちは違う』そういうことになる。深紅の話によると歩けなくなった自分を見て、嫌いになられるのが怖い……。ということに至ったようだった。つまりは『歩けなくなった自分を見て、それでも好きでいてくれたなら……』ということなのだろう。

「深紅となにかあったのか」

そう聞かれたのは、将棋盤の上にあったはずの僕の強固な陣が、いつの間にか爺ちゃんの駒達によって、ひっかき回されているときだった。たまに爺ちゃんと将棋を指しているが、基本しか知らない僕は勝った例がない。この一戦でも早くも負けが見えている。

『なにも』

「ほうか……」

そう言った爺ちゃんは、僕の陣地で遠慮なく龍と成った飛車を自由自在に操って、逃げ惑う僕の王を追い掛け回している。そのとき僕は何を思ったか、深紅とのこれからを考え、爺ちゃんに対して布石を打つことにしたのだ。

『そういえば 爺ちゃんは婆ちゃんと どうやって付き合ったの？』

爺ちゃんは、突拍子の無いことを聞いてきた僕を、片方の眉をつり上げた顔でじっと睨んできた。少しダイレクトすぎたか……。

『俺 母さんしかいなかったからさ そういう男同士の話聞いたことないんだよね』

しばらく考えて、ひとつ咳払いをしてから、仕方なくといった感じで答えてくれた。

「おれが押した」

少しこそばゆい感じが背中を走ったが、満足だった。思った通りの答えが聞けたからだ。婆ちゃんはどうしても控えめで無口な性格だ。昔はいいとこのお嬢様だったと聞いた。爺ちゃんが押したということとは、きつと親が反対したに違いない。それをどうやって乗り越えたのか知れたかった。

『すんなりいつた?』

「まあ、それなりだな」

『それなりって何』

パチリと金を防御に加える。

「うーん……。人と人が恋仲になるまでってのは、そらお前え、色々あるだろうが」

『うまくいかなかったってこと?』

「そうだったら、お前えらは生まれとらん」

うーん、と唸っている。僕への返答を考えているのか、将棋の手を考えているのか、どっちだろうと思った。一分くらい経った頃、爺ちゃんは龍ではなく、後方で控えていた角を前線へと動かした。

「あつちは箱入りだから親の言いなりでよお。ちよくちよく見合い話をされて困ってることをよく相談されてなあ」

僕はここだと思つてさつき動かした桂馬を突入させて金に成り、王手をかけた。

『どうやって押したのさ』

僕の手を受けて、一瞬だけ驚いた顔をしたが、腕を組んで、ふんと軽く鼻を鳴らした。

「お前え、深紅に惚れとるんだらう」

どきりと心臓が脈打った。

(くそつ、もうバレたか。もう少し話が聞きたかったのに……)

最終的にはバレて欲しかったのだけど、まだ早すぎる。質問があるからさますぎたのかと考え、爺ちゃんの質問にどう答えるか迷っていた。

動けずにいる僕のことをじっと睨んでから、爺ちゃんは王を動かしてさつき成ったばかりの金から逃げた。

「反対はせん」

(えっ?)

「前にも言つたように、あいつの気持ちが一番良く分かるのは、今でもお前だと思つとる」

僕はあっけに取られ、口を開けたまま爺ちゃんの次の言葉を待った。

「そのお前えが、家族としてにせよ、恋仲としてにせよ、傍にるのが一番だろう。そこから先は当人同士の問題だと、おれは思ってるよ」

『ほれ、次』と言われてからようやく僕は動き出した。慌てて盤面に目を落とす。たぶん、今僕は攻めに転じているはずだ。ここぞとばかりに手駒の香車で王の逃げ場を塞ぐ。

「あいつは良い子だ。おれや婆ちゃんにとっての宝物だよ」

『あんな良い子 他に探したって絶対いないよ』

「ばかもん」

更に王を逃がしてから言った。

「お前えもだ」

(……)

不覚にも少し目が潤んでしまった。まったくあの件があつてからというもの、本当に涙もろくなつてしまった。全て深紅のせいだ。

そう思いながら次に銀で王手をかける。すると爺ちゃんが不適な笑いを浮かべて僕に一瞥をくれた。

「ちなみによお、男が押すときは、絶対に逃げられないように押すんもんだ」

あつ、となつたが遅かった。パチリという音と共に、爺ちゃんの王は歩の隙間を縫つて安全地帯まで逃げ込んでしまったのだ。次の策を講じてみるが、一手余裕ができた爺ちゃんはあっさりと僕の王を追い込んでしまった。

「もうひとつ、お前えが深紅に惚れとんのは、とおの昔に気付いてた。最初に気付いたのは婆ちゃんだがなつ、と」

言い終わると同時に爺ちゃんは席を立った。

……完敗だ。

とうとう何の進展も無く十月のカレンダーがめくれてしまった。

時計の針が夜の十二時をまたぐ頃、窓から入り込んできた晩秋の夜風を全身で感じながら、いつものように机に向かって考えを巡らせていた。

深紅に伝えていないこと、まだまだたくさんある。どれだけ僕にとって彼女が必要なのか、どれだけ恋焦がれ、どれだけ彼女を想うことに時間を費やしたか。どれだけ深紅の気持ちが嬉しかったか、そしてどれだけ今が辛くて苦しいか。こんな気持ちを抱えていたら、とてもじゃないけど脚が動かなくなるまでなんて耐えられない。

彼女が僕のことを想ってくれている気持ちはいつたいどのくらいなのだろうか、できれば僕と同じであって欲しい。エゴだろうか、なんだっていい。彼女にどうしても僕と同じ気持ちを味わって欲しい。(けど……)

あのときの僕は浅はかだった。後悔に後悔を重ね、持ちきれないほど重くなったそれが今でも頭の中に居座っている。以前の僕ならベッドでふて寝しているところだが、今はどうにか爺ちゃんの援護のおかげで前を睨むことができる。

『好きだ』そう伝えることが出来たのは紛れも無い事実。そして、断られたのも紛れも無い事実だ。そうなったのはたぶん、僕が僕自身のことしか考えていなかったからだろう。あの告白はただひたすら彼女を求めた結果が生んだものだ。僕はもう少し大人にならなければいけない。深紅の不安をきれいに拭い去ってやれるくらいじゃないと。いとこ同士という垣根や脚の病気のこと全部含めてだ。

部屋の中に強い風が吹き込んできて寒さに肌が震えた。窓を閉めると途端にカーテンがおとなしくなる。そんな光景を見てふと思出す。たくさんの深紅との思い出は、いつも風に吹かれて動き出す。秋の風は色々な表情を持っていた。夏の終わりと共に吹く風は、まだゆるやかで、生暖かく、暑い夏を乗り越えたことを褒めてくれているような感じだった。中旬になると毎日違う風が吹いてくる。心に安らぎを与えてくれる、さわやかで心地よい風。木の葉と土の

匂いを運んでくる切ない風。油断するなと戒めてくれる冷たい風。そして丁度今頃吹く風は、凍える冬に向けての準備を促しているような、遠慮の無いとても冷たい風。厳しい時期は一人よりも二人の方が楽に乗り越えられるぞと、そう僕に教えてくれているように感じる風だった。

（分かってるよ……）

翌日、僕は深紅をデートに誘うことにした。

風邪と言って三日間休んでから、深紅は学校を休みがちになっていった。週三回くらい行けばいい方だ。学校を休んだ日は一日中部屋から出てこない。部屋の中で深紅が塞ぎこんでいることは、食事を運んでいる婆ちゃんの表情を見れば分かる。リハビリもあれから一度も行っていないそうだ。いいかげん、日に日に弱っていく彼女と同じ家に住んでいて、まだ何もしていない自分に嫌気が差した。そうして決断するに至ったのだ。

婆ちゃんがクリームシチューとパンをトレイに乗せたときに、『俺が持つていくよ』と書かれた紙を見せると、喜んで了承してくれた。爺ちゃんの話によれば婆ちゃんも僕の深紅に対する気持ちに気付いているはずだ。そう考えると少し恥ずかしさがこみ上げてきて顔が赤くなってしまった。

ノックをすると、久しぶりに綺麗で透き通った声で「はい」と聞こえた。久しぶりというのは、話す相手が僕になると、いつも浮かない声になってしまっからだ。きっと相手が婆ちゃんだと思っているのだろう。不謹慎だが、なんだか無性に楽しくなってくる。好きな子にいたずらを仕掛けて驚かしてやろうという子供の気分に近い。あれ、よく考えればそのものじゃないか。

期待感を膨らませて扉を開けると、ベッドに腰掛けて文庫本を読んでいる深紅が見えた。こんなに無防備な彼女を見るのはどれくらいぶりだろうか。

部屋には、男性二人と女性で構成された、アメリカのフォークグループの曲が流れていた。曲名は忘れたが、確かドラゴンと少年の物語を唄った曲だ。昔アニメーション付きの映像が教育番組で良く流れていたのを覚えている。とてもやさしいメロディの中に、少しだけ悲しさを感じさせる素敵な曲だ。

深紅はそのメロディに合わせて足をぱたぱたさせている。なんていうか、ものすごく可愛い。どこか誰も来ない場所に飾って、一日中眺めていたい。それが叶わないのなら、もういつそのこと、このまま押し倒してしまいたい。

そんな犯罪まがいな事を考えてしばらく見つめていると、読んでいた文庫本を閉じたところで深紅と目が合った。案の定、驚いた表情で瞼をぱちぱちさせている。僕は黙ってトレイをテーブルに乗せてやり、その下に折り曲げた紙を差し込んだ。そのまま出て行こうとすると、背後から例の浮かない声で呼び止められた。

「美月……、ありがとう」

振り向いた先の深紅は、もじもじしていて更に可愛かった。上機嫌になった僕は、親指を立ててニヤリとした表情を見せてやり。勢いよく部屋を出た。

紙にはこう書いた。

『深紅へ 明日学校休んでデートしよう！ 十一時になったら居間に集合ね！ 残念ながら雨天の場合は中止です。 晴れることを祈りましょう！ 美月』

明るいい口調で書かれているのは、二時間みっちり悩んだ結果だ。特に『デートしよう』と『遊びに行こう』のどちらにするかでだけで一時間近く悩んだ。気持ち悪がられていないだろうか……、引いてないだろうか……。とても心配だ。

居間に戻ると、頭の中に深紅の無防備な姿と、最後に見た恥らう姿が交互にやってきた。もうそれだけでキュンとなってしまう。とても深紅の食器を引き下げになど行けないので、忘れたふりをして夕食後はそそくさと風呂に入ってしまう。明日は一世一代の大勝負

だ。別にいやらしいことをするわけではないが、体の隅々まで念入りに洗う。ふと我に返り、なんだか前と比べてどんどん自分が馬鹿になっていく気がしたが、別にそんなことどうでもよかった。深紅のためならえんやこら。そんな気分だった。

早々にベッドに入り、目覚ましを六時にセットする。明日は大忙しだ。深紅のいる方向に顔を向けて、再び胸をキュンとさせながら眠りについた。

『……ヴ、ヴヴヴ、ヴヴヴ、ヴヴヴ』

枕元の携帯を手に取り、六時であることを確認する。何故音を消していたかというと、隣の部屋の深紅を起こさないためだ。バイブなんかで起きれるか不安だったけど、今からすることは絶対に見られてはならないのだ。

（よおーし、やるぞおー）

来てくれるかという不安はまったく無かった。むしろ、予定時刻よりどれくらい早く来るかを予想して楽しんでいたくらいだ。現に十時を少し過ぎたばかりだというのに、すっかり出掛ける準備をした深紅がこうして目の前にいるのだ。どうしてそんなに自信があったのか、ということではない。無理に押し付けたこととはいえ、深紅は約束を破るような人間ではないと知っているからだ。

『おはよう！ 深紅の祈りが通じたよ！』

少し自分でも無理があると思う図太さを見せてから、外を指差してみせる。雲ひとつない快晴、とはいいがたいが晴れていることに間違いない。天気予報によると、降水確率は午前10%、午後20%、夜20%とのことだ。上等とは言えないが、こんな勝負どころでその20%を引くようじゃ、この先良い人生は待っていないというもの。振り返って深紅の顔を見ると、サツと顔を逸らすのが見えた。

今日の深紅は中に薄いピンク色のハイネックに白いダッフルコー

ト、下は茶色のミニスカートだ。おまけに黒いニーハイまで履いている。もう、この姿が見ただけで今朝の早起きが報われた。

少し予定よりも早いけど、僕は出掛けることにした。さっそく僕は深紅に手を差し伸べる。深紅はしばらく何か言いたそうな顔で僕を見ていたが、僕がまったく動じないのを見てか、諦めておずおずと手を掴んできた。引っ張りあげてやると、よろよと一人で玄関まで行ってしまった。

なんだかとても不思議な気分だ。今はまったく恥ずかしさがこみ上げてこない。それどころか、気持ち良いくらいに深紅への愛おしさでいっぱいだ。イタリア人の霊でも乗り移っているのだろうか。(どうせ三つも年下なんだ。格好つけたって鯛焼き野郎にかないっこない。なら、出し惜しみせず深紅への思いを投げつけるだけだ。それだけなら絶対誰にも負けない自信がある！)

僕はあの日のトレンチを羽織り、丸々と太った自前の黒いリュックを手を持った。そのまま玄関でもぞもぞ動いている深紅を追い越して先に外へ出た。それから、用意しておいたママチャリのかごにリュックを入れて玄関に横付ける。『キッ』というブレーキ音に気付いて深紅が座ったままこっちを見た。すかさず、今朝のうちに小さいクッションを縛り付けておいた後ろの荷台をばんばんと叩いてみせる。

さすが深紅だ、首をかしげてぼけーっとしている顔も絵になっている。もう一度、ちよつと強めにばんぽんと叩いてやると、ゆっくり立ち上がって近づいてきた。

「あの、これ、乗っていいの？」

(もちろん)

深紅が座るのを確認してから一枚の紙を渡した。深紅はそれを無言で受け取る。

『今日はデートに付き合ってくれてありがとう。折角のデートだけど、いところからの一生に一度の願いを聞いてください。それは、今日一日遠慮しないで思いっきり甘えると約束すること！』

「え？　これどういう……わっ」

読み終えたみたいなのでママチャリを発進させた。はずみで深紅は僕に抱きついてきた。狙い通りだ。僕のお腹に回された深紅の手が、さつき渡した手紙を持っていたので、サツと奪い取ってポケットにしまう。こんな恥ずかしい物、何度も見られたくない。

「美月ー、どこにいくのー」

砂利道のせいで、深紅の声が震えて聞こえる。答えるわけにはいかないで顔をぶんぶん横に振った。自転車だと会話が出来ないのが残念だが、かえって余計な詮索をされないで済む。我ながら良い選択だ。深紅を自転車の後ろに乗せて走っているだけに、ただ腰に手をまわされているだけなのに、それだけで僕の気持ちが彼女に流れ込んでいる気がして、ひどく充実した気持ちになっていた。深紅が乗っているぶんスローペースなので十五分もかかってしまった。予定より早く出たのは正解だったかもしれない。僕は以前スーパーへ買い物に来たときに見つけた輸入小物雑貨店で自転車を止めた。

二人で降りて店の前に立つと、お店は丁度開いたところらしく、緑色のお洒落なエプロン姿の女性店員が箒で店内を掃いていた。店内に顔だけ入れて目配せしてみると、女性店員が気持ちの良い声で挨拶をしてくれた。どうやら中に入っても良いようだ。僕は女性店員に笑顔でお辞儀をして、三段だけある入り口の階段で転ばないように深紅をエスコートして招き入れた。

店内はほんのりとローズマリーのお香が焚かれており、照明が落とされて薄暗い雰囲気になっている。あまりこういう類の店には来たことが無いのだが、この雰囲気は輸入小物のことがよく分からない僕でも楽しみな気分にさせてくれる。こんな小洒落た店がどうしてこんな田舎の駅前にあるのか不思議だったが、前に女子高生らしき二人組みが中で楽しそうに騒いでいるのを見たので、少なからず需要はあるのだろう。

訳も分からず入り口に立ちすくんでいる深紅に向かって手招きを

する。深紅には悪いが、買う物は既に決めてあった。パワーストーンやウツドネックスの棚を通り抜けた先に指輪のコーナーがある。そこに連れて行き、手のひらで『どうぞご覧ください』といった感じの仕草をしてやる。並べられている指輪に気付いた深紅は、熱い物に触ってビックリしたときのように、両手を胸の位置まで引つ込めた。

「……えっ？」

さすがに仕草だけでは選ばうとしてくれないので、ポケットに入れてあったメモ用紙に言葉を書き込んで見せてやる。

『好きな選んでいいよ 買ってあげる』

「そんな、なんで？」

『初デートの記念』

深紅は嬉しい顔、ではなく、残念ながら少し困った顔になってしまった。

『甘えてくれるって約束だろ いーからいーから』

読み終えた深紅の背中をポンと叩いて促すと、不服な顔のままではあるが、ようやく指輪に目をやってくれた。深紅は、上体をかがめると、垂れ下がってしまう髪の毛を片側だけ指で押さえながら選んでいる。思わず顔がにやけてしまう仕草だ。そんな彼女の前にもう一度メモを見せる。

『少し選んでて 俺ちよつと他見てる』

「え、ちよつと……あつ」

颯爽とお店の外に飛び出した。僕はそのまま四軒隣の小さな書店に入って、取り寄せを頼んだときに渡された紙を店員に見せた。奥に入って行った店員をしばらく待っていると、やがて彼はA4サイズくらいの大きな本を持ってきた。「お間違えありませんか？」という質問に、題名を確認してからこくりと頷く。会計を済ませリュックに入れようとしたが、少し無理があったので雑貨店に戻ってから自転車のかごにそれを入れた。

店内に戻ると深紅はまだ選んでいた。僕の足音に気付いて振り向

くと、すぐに拘ねた表情に変わって僕に目で何かを訴えている。手を合わせて謝ると、深紅はぷいっとそっぽを向いてから、なんとか指輪選びに戻ってくれた。ほっと一安心した僕は店員のお姉さんがにこにここちらを見ている事に気付き、体中がくすぐったくなつた。なんだかこういう場面を見ると、本当に恋人同士みたいだ。

しばらく余韻にひたりながら深紅を待っている、やがて二つの指輪を手にとつて悩み始めた。手元を見ると、中央がゆるやかなV字型にくねったシルバーの指輪と、控えめな大きさの石がはめ込まれた指輪で迷っていることが分かった。僕はスツと片方の指輪を指差して教えてやる。それが深紅に似合っていることを。

一目で分かった。中央にはめ込まれている石は、六年ぶりに再会したときに深紅が着ていたチュニツクの色と同じ、深い藍色だ。本当に彼女にぴったりの色だ。

深紅はV字型のシルバーを指輪ケースに戻すと、その藍色の石の指輪をやさしい目で見つめた。と思つたら急におろしだした。どうしたのかと不思議に思つたが、少し考えると彼女が何に動揺しているのかすぐに分かった。それを察して今度は深紅の右手の薬指を指差してやる。彼女がどんな顔をしたのかは分からない。さすがに今僕が真っ赤になっているのが分かるので、顔を逸らしてしまつたのだ。

「どお……かな？」

その声に振り向くと、深紅の薬指にぴったりはまった深い藍色が目映つて、言葉を失う。きつとこの店のこの指輪はずつと深紅のことを待っていたに違いない。本当にそう思つた。巡り会えてからあつさり深紅と一つになれた指輪に嫉妬すら感じた。その気持ちを、さつそく深紅に伝えてやる。

『悔しいくらいに似合つてるよ 本当に』

彼女は頬を赤くして素直に喜んでくれた。

「ありがとう。美月」

店を出た僕たちは再び自転車に乗って、次の目的地に向かった。

もう深紅は何も聞いてこない。観念したように頭を僕の背中にあてている。

（ありがとう）

それは僕の台詞だよ、深紅。

背中に深紅のぬくもりを感じながらのんびり自転車をこいだ。終わる間際の秋の陽気を全身で楽しみながら。ふと遠くで学校のチャイムが聞こえた。丁度良い時間だ。

ゆっくりとブレーキをかけた。着いた場所は小さな川原だ。深紅との思い出の場所。通ってきた道で気付いたのか、それとも半ば予想していたのか、彼女の顔は驚いていなかった。折角前とは違う道順で来たのに、ちよっぴり残念だ。右手でリュックと本を持って、左手を深紅の腰にあてると、彼女も僕の肩に手をまわした。転ばないように一歩ずつ、しっかりと地面を踏んで、安全を確かめてやりながら先導する。

ようやく辿り着いた深紅の場所。そこは三ヶ月前の青々しくて爽やかだった面影は既に失われていた。狐色に支配されたその風景はとても寒く感じる。きっと深紅は僕よりもっと寒く感じているに違いない。少し心配になって聞いてみる。

『寒いかな？』

深紅はいつから僕の真似をするようになったのだろう。まるで喋れないかのように、彼女は首をゆっくり横に振った。相変わらず、やさしい笑顔は崩さないままだが、揺れているすすきの穂を背景にした彼女は、見ているととても寂しい気持ちになる。やはり、辛い冬の訪れを感じてしまっているのだろうか。

深紅をここへ連れてきたのは悲しい思いをさせるためではない、僕の気持ちを感じて、少しでも元気になってもらうためだ。僕はリュックからスケッチブックを取り出した。深紅が持っている物とは違う表紙のやつだ。おとといの内に文房具屋で買っておいた。何故

わざわざ買ったかというところ、ここから深紅に話しかけづらくて最後のスケッチブックを使い切った後は、婆ちゃんに貰ったメモ用紙で会話をしていたからだ。そして、今日の僕にはこれが必要なのだ。

これから僕がすることを考えると足がすくむ。一世一代の大勝負、とは本当によく言ったもんだ。おそらく、後にも先にもこれほどまでに恥ずかしいことなどありはしない。でも、今日やらなきゃ深紅と僕の未来は消えてしまう。そう無理やり自分に言い聞かせて崖から勢いよく飛び降りた。

『俺が肩を叩くまで後ろを向いてて』

しかし、今日の深紅はいつもの二倍は動きが遅い。顔を傾げて僕を見ているだけで、一向に後ろを向いてくれない。僕が急かすように人差し指と親指で『クルツ、クルツ』という動きを見せてやってようやく後ろを向いてくれた。

深紅が完全に後ろを向いたのを確認して、僕は行動に移った。リュックから取り出したビニール袋、その中から一枚の紙を取り出して見つめる。

（頼む、届いてくれ）

僕はもう一度強く決心し、その紙から手を離す。するとその紙はひらひらと舞い踊りながら落ちていき、やがて静かに地面に着地した。それを見送ると、次々と袋の中にたくさん詰まっているそれを、掴んでは上に投げ、掴んでは上に投げを繰り返した。散らばっている紙の数に呼応するかのように、僕の心臓が脈打つ回数を増やしていく。大丈夫、きっと届くはずだ。そう心に何度も言い聞かせながら最後まで気持ちを込めて紙を撒き散らした。

（終わった……）

空になったビニール袋を縛ってリュックに戻し、もう一度じっくり辺りを見回した。自分の作り出した光景に満足した僕は、そっと深紅の肩を二回叩いてやる。

ピクッと反応して、恐る恐る深紅が振り向いた。

「……」

口は『あつ』と言っているが、声は出ていない。そのまま顔を動かして辺りを見回していく。

「すごい……」

そのとても小さな第一声を聞いて、僕は心底ホツとした。

辺り一面に咲き乱れるコスモスの花。赤、黄、青、ピンク、オレンジ、白、紫。少し大げさな色に塗られた手作りのコスモスは、辺りを包む秋色に溶け込んで、不思議な世界を創り出していた。

僕はそのコスモス畑の中央にビニルシートを広げ、呆然と立ち尽くす彼女をそこへ座らせた。すると彼女は一枚のコスモスを手に取って眺め始めた。右手に淡く輝く藍色の指輪、その指先にはピンク色のコスモス。

（まだだ、まだ僕の気持ちは伝えきれていない）

続けて僕はリュックの中に手を入れた。目的の物を掴んだとき、隣から鼻をすすする音が聞こえた。慌てて振り向くと、そこには、瞳から流れ出ている雫を拭おうともせず、ただ手に持ったコスモスを見つめ続けている深紅がいた。

「もういいよ……美月……」

深紅は顔を上げてからもう一度言った。

「お願い……もう、止めて」

胸が音を立てて軋んだ。片手をリュックに入れた間抜けな格好のまま、体が震えて動かなくなる。途端に頭に血が上ってくるのを感じた。

深紅の言葉が理解出来ないわけじゃない。いや、むしろ今深紅がどんな気持ちなのか手に取るように分かる。そうじゃなくて、どんなことを言われようが、どんなに引かれようが、最後までやり遂げると決めたのに、こんな簡単に挫折しそうな自分に苛立ちを覚えているのだ。

「痛いよ……美月の、気持ちは……嬉しい、けど、痛いの……」

声が漏れるのを堪えて泣いている彼女は、まるで大事な物を無く

してしまつて親に必死で謝る少女のようだった。

硬直している体を奮い立たせて、深紅の方に向き直る。

『届いたんだね 俺の痛み』

読み終えた深紅は小さくこくと頷いてくれた。

深紅の口から『痛い』と聞いた。その瞬間、本当の意味で僕と深紅が繋がったんだと思った。それなら僕は続けられる。

『俺にも届いてるよ 深紅の痛み』

届いてる。届いてるんだ。だから、だから涙が止まらないんだろ？ 書いているそばからスケッチブックを滲ませているのは、僕の涙じゃない、深紅の涙なんだろ？

『覚えてる？ 最初は深紅だよ』

『次は俺だった』

『そして今はお互いに届いてる』

『こつなつたら もう無理だよ』

『我慢できっこない』

『そうだろ？』

（そうだよな？ これ以上待てないよな？）

『もう一度だけ言うね』

静かにスケッチブックをたたんでから、静かに、大きく息を吸い込んで深紅の顔のある場所を見つめた。

「好きだ、深紅！」

終章 【言葉】

声には不思議な力がある。

文字には無い不思議な力。

あるときは愛を伝える言葉になり、
あるときは音楽を奏でる歌となる。

またあるときは争いを生む武器となり、

またあるときは悲しみを訴える叫びとなる。

人の声は、人の感情をのせて、人の頭に届き、人の心に響く。

長い間忘れていた。失って初めて気が付いた。生まれながらにして持っていた不思議な力を。もう二度と忘れたりなんかしない。自分自身のためにも、深紅のためにも、そして母さんのためにも。

「……………み……………つき？」

「うん」

「美月！」

彼女は僕に倒れかかるように抱きついてきた。僕も力を込めて深紅の身体を抱きしめ返す。僕らはそのままの形でぼろぼろ泣いた。だけどまだ答えを聞いてない。少し意地悪な局面でもあるけど、聞かすにはいられなかった。

「深紅っ！ 大好き！ 深紅は？」

「うつ……………うつうつ……………だいっ……………すきい！ だい……………う……………好き
い！」

そう言い終えると、深紅は声を大にして泣き始めてしまった。

『わああああ わああああ』と泣きじゃくる深紅の声の合間に、川の流れる音が聞こえている。ここはなんて、泣くには最適な場所なんだろうと思った。

ようやく深紅の気持ちを聞けて、僕の心は溶鉱炉のように真っ赤に燃え上がり、やがて、溶けてもなお沸騰するマグマになった。僕

の腕の中で、僕のことを好きと言ってくれた。もう、本当に胸がいっぱいだ。後のことは何だっていいと思った。この腕の中に深紅だけを残してくれば、他のものは全て消え去っても構わないと、心からそう思えた。

どれくらい経ったか分からない。僕は泣き止んだ後も、ずっと抱き合ってたままだった。どうしてか分からないけど、この手を解いたら、深紅が離れていってしまう気がしたからかもしれない。そんなこと考えたのはほんの一瞬なのに、どうしても拭い去ることができなかった。もしかしたら、どこかの哲学者が言っていたように、『人は生まれた瞬間から死に向かっている』のと同じ感覚なのかもしれない。願わくば、深紅も同じことを考えていて欲しい。彼女の頭をやさしく撫でながら、僕はそう思っていた。

「ねえ、みつき？」

「ん？」

「好き？」

「うん、好き」

「ほんと？」

「ほんと」

「私も好き……」

「ほんとか？」

「ほんとっ」

深紅の顔は見えないが、きっと僕と同じ表情をしているに違いない。

「ずっと一緒にいてくれる？」

「それはこっちの台詞だよ」

「やーだー、聞きたいー」

可愛すぎて少し笑ってしまった。女の子という生き物は、気を許した相手にしか見せない部分というのがあり、それは普段とはこん

なにもギャップがあるものなのかと、感心するのと同時に、自分だけが知っているという優越感が胸を満たしていった。それから僕は首をフルフル振っているお姫様に、望み通り答えてあげた。

「ずーっーっつと、一緒にいるよ」

「ほんと？」

「こら！」

また二人で笑い合う。そしてゆっくり深紅が体勢を起こして、お互いの腕が解けてしまい、足は崩しているが正座で向かい合っているような形になる。

「ずっと、一緒だよっ」

その言葉と一緒に、深紅の少し潤んだ笑顔を見て、現実感がふつふつと沸いてくる。どっちが先かは分からないが、二人ともタコみたいに真っ赤になっていった。顔を逸らしてはチラッと目が合い、二人とも照れながら笑った。

「ねー」

「なに？」

「抱っこして」

「は？」

声が裏返ってしまった。意味が分からない。え？　だっこ？？？　よく分からず、とりあえず立ち上がろうとした。

「ちがうー」

「ええ？？？？」

それから深紅の細かい指示に従うと、体育座りの足を開いたような格好にさせられた。すると両脚の真ん中に空いたスペースに、深紅が後ろ向きでちょこんと座った。ああ、なるほど、これが女の子の世界では『抱っこ』というのか。深紅の小さな背中が目の前にきたので抱きしめてみる。途端に深紅から桜のやさしい香りがしてきた。左耳に深紅の髪の毛がさわさわと当たっている。無意識に、本当に無意識に視線が下に落ちた。白いコートの隙間にピンク色の二つ膨らみが見えてしまった……。

男というやつは本当にどうしようもない生き物だ。意思とは別に生理現象が自動的に働いてしまう。自分で言うのもなんだけど、ここまで本当にロマンチックにやってきたというのに、たった一瞬、あらぬ事を考えただけで全てをぶち壊そうとしてくれる。深紅にバれないよう、そっと、慎重に、腰だけを僅かに引く。そして謝る。

（ごめんよ、深紅……）

情けない気持ちでいっぱいだ……。

「きれい……」

「……なにが？」

「作るの、大変だったでしょ？」

「ああ、これか」

そう言っただけでシートの周りに落ちているコスモスを一枚拾った。これはおととい、深紅をデートに誘おうと決めた日に僕が作った物だ。画用紙とクレヨンを買って、色を塗ってから切り取った。一番時間を費やしたのは切り取る作業だった。やっている間に色々作業方法を考えて試行錯誤してみたが、どの方法も大して時間の差はなかった。昼から始めて、袋がいっぱいになる頃には夕食の時間になっていた。何にせよ手を抜くことだけは絶対にしないと決めていたので、花びら一枚一枚きちんと先端がギザギザになっている。だから『きれい』と言われて謙遜などせず、自慢げに言った。

「深紅のことを想って作ってたから、あつという間だった」

「まあ、何か今日の美月、とーってもキザね」

顔が赤くなってしまったが、こういうときの『抱っこスタイル』は便利だった。

「でも、本当に素敵……ありがとう、美月」

切ない声でお礼を言われ、とくん、と胸が高鳴った。だけど、もう隠す必要など無いことに気付き、いつそのこと聞かせてやろうと、身体を押し付けて強く彼女を抱きしめた。

（……とくん、とくん、とくん）

すると、自分の喧しい鼓動とは遠いところで、小さく、小刻みに、

でも確かに深紅の鼓動を身体で感じた。深紅も同じように感じているのだろう。それが証拠に二人とも示し合わせたかのように黙っている。

（ドクン、ドクン、ドクン、ドクン）

（とくん、とくん、とくん、とくん）

僕は喉をゴクリと鳴らしてから、願いを込めて彼女の名前を呼んだ。

「深紅……」

僕の願いが通じ、深紅は静かに僕を振り返ってくれた。切ない表情だった。初めて知った。本当に、本当に人間同士が見つめ合うと瞳は止まらない。深紅の瞳は僕の歪んだ顔を映しながら、何かを探しているように細かく動いていた。それはたぶん僕も同じ。深紅の瞳を見つめれば見つめるほど、どこに焦点を合わせていいのかわからなくなる。どう見つめれば想いが伝わるのか、どこを見つめれば僕は次の行動に移ることができるのか、それを必死に探していた。そのまま深紅の世界に吸い込まれてしまいそうだった。とても心地よくて、身体は強張っているのに力が入らない。出来ることは深紅を愛おしく想っていることを視線に込めるだけだった。それが通じたのか、ただ我慢できなくなったのかは分からない、深紅の長いまつ毛がゆっくり下がっていった。……それから、どちらともなく顔を近づけていき、僕と深紅は口づけを交わした。

一秒だったか、二秒だったか、そんな程度の時間だったのに、何故だか軽く息があがってしまった。それが無性に恥ずかしくなつて、僕はもう一度深紅の口を塞いだ。今度は少しだけ長く……。深紅の唇を開放してやると、今度は深紅が甘く、切ない吐息を漏らしている。その口元を見つめていると、深紅の方から三度目のキスをしてくれた。

顔をゆっくり離してから、目を見ないようにして二人とも元の体勢に戻った。する前よりも二段階ほど心臓が早くなっていて、とても息苦しい。耳から心臓が飛び出てきそうだ。また深紅の背中にく

つついて、互いの速さを確かめ合う。収まるまでずっと。

甘い沈黙が訪れ、その間、あまりにも自然に初めてのキスができたことに驚いていた。誰かから教えてもらったわけでもないのに……。

（そういえば、深紅は鯛焼き野郎としたのだろうか……。もしかしたらアイツの前にも他の男と……）

そんなこと、考えなくてもいいのに、勝手に考えて落ち込んでしまふ。自分でも女々しい奴だと思ってはいたが、まさかこれほどとは思ってもよらなかった。

「あの……、初めてだから……」

いつも以上に小さくなってもじもじしている。

「えっ？」

「だからっ……………キ……キス……………」

「ええええええっ！」

僕がごく当たり前の反応をすると、それに不服なのか、深紅までもが驚いた顔で振り向いてきた。

「なっ、なによ！ 嬉しくないのっ！」

「ちっ、違くて！ だって鯛焼き野郎と一年も付き合ってたんだろ？」

「鯛焼き????」

「あ、ごめっ、なんだっけ、えーっと、あ、しのぎき」

「ああ、二人でなんて会わないもの、いつも友達と一緒に。それに、ゆたかとは周りが騒いで強引に付き合うことになっちゃって……」

「へえ……………」

かなりわざとらしく、長めに相槌をうつた。

「なによっ」

半分だけこちらを向き、深紅は唇を尖らせている。

「強引にされたら、付き合っちゃうんだあ……………」

意地悪な口調でからかってみる。

「ち・が・う！ そんなんじゃ、ないもん……………」

「分かった分かった」

「もお！」

「嬉しいよ。本当に……。大好きだよ、深紅」

きゅっと、軽く腕に力を加えた。

「……………もお」

それから婆ちゃんと一緒に作った弁当と一緒に食べ、二人で川を眺めながら、今まで喋れなかった分を取り戻すかのように、僕はただひたすら会話を続けた。深紅と出会ってから話、出会う前の話。互いのどこが好きか、それにいつ気が付いたか、二人で何がしたいか、どう過ごそうか、どう振舞おうか。夢について、季節について、雲の話、風の話、本当に何でも話した。

辺りは夕焼け色に染まり、派手な色のコスモスも、だんだんと目立たなくなっていた。もうそろそろ帰る時間。全ての人にそう思わせるかのような切ない風景。真上に広がる空は、丁度、深紅の指輪にはめ込まれた石と同じ色だった。光を失いかけたときに数分だけ現れる、夢と現実の狭間の色。

帰る前に、深紅と話し合っておかなくてはならないテーマがある。もう、お互いに気持ちが悪く固まっているのは確かだけど、まだ伝えきれない大切なことが残っている。『押すときは、絶対に逃げられないように押す』そうだろう？

僕の肩に寄り添って川を眺めている深紅に、最後の気持ちを伝え始めた。

「深紅」

「なあに」

「最後にひとつだけ話して帰ろう」

何かを悟ったのか、顔だけ僕の方に向け深く頷いた。

「脚のこと、まだ怖いかな」

「……………」

しばしの沈黙の後、注意深く見ていないと気付かない程に小さく、

深紅はコクつと頷いた。

「よく考えてみたんだ、やっぱり、深紅の脚が動かなくなったときに、俺がどんな気持ちになっっているかなんて、分からない……。でも、俺は深紅の脚に惚れたわけじゃない。一緒に悲しんでくれるところ、一緒に苦しんでくれるところ、一緒に喜んでくれるところ、そういうところに惚れたんだ。だから、それだけあれば、後はどうなるうが、ずっと好きでいられると思うんだ」

「美月……」

僕はリュックにもたれかかるようにして置いてある茶色い紙袋に包まれた一冊の本を手に取り、紙袋を丁寧に開けて中からそいつを取り出した。

A4サイズの本の表紙には、夕焼けの空に向かって悠々と空を飛ぶ、一匹の白い鳥が描かれていた。

『そらとぶアヒル』

その絵本を深紅に手渡してやると、彼女はゆっくりとそれを受け取り、まじまじと表紙を眺め始めた。

「知ってたか。アヒルって空飛べるんだぜ」

その言葉を聞いて思い出したのか、小さく肩が震えだした深紅に僕は続けた。

「飾りの羽でも飛べるんだよ。……だから、だから深紅も、脚が動かなくなっただって、きつと飛べるはず。歩けなくなっただって、飛べるなら、良いと思わないか？」

そつと絵本を抱きしめた深紅は、下を向いたまま涙を流している。日が完全に落ちてしまい、周囲が暗闇に包まれてしまった。やがて彼女は静かに顔を上げた。

「うん」

深紅が湿った声でそう言うと、月の光がやさしく輝きだし、深紅の顔が薄っすらと暗闇に浮き上がってきた。泣いているけど、とても安らいだ表情。それを見て僕も安らいでいくのを感じる。そして僕らは秋の空に半分だけ顔を出した月の下で、再びキスを交わした。

季節外れの鈴の音と共に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6944o/>

言葉（仮）

2010年11月10日13時55分発行